
jump up high

百葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

jump up highlight

【コード】

N7672Q

【作者名】

百葉

【あらすじ】

藍染との戦いから半年以上がたった春、夏梨の霊圧が上がりはじめる。その霊圧はみるみる高くなり、霊圧を自分で抑えないと周りに被害が出る程に。それをきっかけに夏梨の世界はがらりと変わった。夏梨とそれを取り巻く新たな物語が始まる。

晴れた夏の日（前書き）

夏梨がメインの話です。

文法、表現、誤字など至らない所が多々あると思います。
オブラートに包んでご指摘お願いします。

そして感想を心からお待ちしています。

晴れた夏の日

ーキーンコーンカーンコーン

ここは空座町にある、小学校である。7月2日、午後4時02分、6年1組。

藍染の騒動から半年以上がすぎていた。そして夏梨は今、6年生に進級しあたしはいつも通りの放課後を迎えていた。

「夏梨ちゃん一緒にかえろーっ」

「ごめん遊子、今日あたし帰りによりたいところがあるから先帰って。」

「そっか、わかった。夕ご飯までには帰ってきてね。」

「うん、そんなに遅くならないと思うからさ。」

「ばいばい。」

「じゃあな。」

本当は用なんかどこにもない。

それでも遊子と帰らないのには理由がある。

最近なんか変だから。

何もしてないのに虚が襲ってくる。しかも遊子や翠子には見えない化け物。

はじめて虚に襲われたのはあたと遊子と他の友達と数人で帰っていた時だ。

当然あいつらは化け物があるなんて気づかない。

化け物があるんだ！と言ったところで変人扱いされるだけだ。

だから『帰りながら鬼ごっこしない?』と誘って走らせる。
昼休みだったら『かくれんぼしよう!』と言って。
何度同じようなことがあったかしのれない。

最初こそ?鬼ごっこ?で騙せてた友達もだんだん不審がってくる。

夏梨がいつも鬼を買ってでて皆を急かしていたのだが、あるとき翠子という友達の一人が訊ねてきた。

「夏梨ちゃん、もしかして後ろ、何かいるの?」
あたしの顔がそんなに険しかったのか?」

「…な、なんでそう思うんだよ」

「だっていつも何も無い方を睨んでるから…」

もちろんそこで?うん?と馬鹿正直に言うはずない。

「そんなはずないじゃん。お化けでもいるって言いたいのかよ!」

あはは、おかしっ、と笑ってはぐらかした。

「そう?それならいいんだけど…」

翠子は気の強い方じゃない。どちらかというと遊子のような女の子だからそれで折れてくれた。

そうやってみても、いずれ限界はやってくる。

虚に追われた事で遊子も翠子もほかにもいろんな人が怪我をしてしまったこともあった。

足を何かに掴まれた、とかランドセルが引き裂かれた、とか。
本当に、怪我人だけで済んで良かった。

でも、毎日のように起こる出来事は夏梨の手に収まるようなもの
なかった。

そしてある日、またも虚が現れた。
しかも学校で授業受けてたとき。
校庭にいたヤツはあたしを見てた。

そこでやっとわかった。

ああ、狙われてるのはあたしだったのか。

皆を危険にさらしているのはあたしなのか、と。

それが分かってからは遊子達とは帰らないようにしている。

下校中は特に襲われることが多いから。

夏梨は何も考えず、時間つぶしに川の土手を歩いていた。

そろそろかえっていい頃だろ。そう思って足を速めたとき。

急に後ろから嫌な感じがした。おそろおそろ振り返るとやはりそこにはやっぱり虚がいて…。

でもその虚はいつもの虚の2倍くらいの大きさがあった。

夏梨はチッと舌打ちをしてから言って走り出す。しかし虚から逃げられる気がしない。

怖かった。

「はあ、はあ、はあ」

もうずっとは走ってる。もう肩で息をしている状態で必死に走ってるのに、それなのに虚との距離は変わらない。
それどころか今にもその大きな手で掴まれそうだ。

やられるっと思った瞬間、後ろから

?ブシャアッ!!

血の吹き出す音がした。バツと振り返るとそこには、しましまの帽子をかぶった駄菓子屋の店主がいた。

「いやいや、危なかったっすね、夏梨サン。」

「う…浦原さん…なんで…」

「アタシの店で待ってる人もいるんで、うちまで来てください。」

ところ変わって浦原商店

そこの茶の間にいたのは夜一、一護。

「夜一さんに一兄まで…どうしたの?」

「心当たり、ねえのかよ」

「?」

「夏梨サン、アタシから話します。」

「…うん。」

夏梨には今の状態はまったく理解できない。

ここは喜助の聞くのが早いと考え、返事をする。

浦原はお茶をすすって一息つくと話し始めた。

「まあ簡単に言うと今、夏梨サンの霊圧が急激に上がってるんす。」

あなた最近よく虚に襲われていたでしょう」

はじめに反応したのは一護だった。

「夏梨、なんで言わなかった」

「ま、待って、虚ってあの化け物のことか？」

「そうじゃ。…知らんかったのか」

「そりゃ…誰にも訊いてないし…」

「だから、なんで俺に相談しなかった！」

「一兄に心配かけたくなかったし…」

「隠される方が心配になるだろ」

「一兄、自分じゃ気づいてないかもしれないけど、死霊力なくしてからの一兄、見られるもんじゃなかった。さらに心配なんてかけられるか！」

「!？」

それ以上一護には言い返せる言葉がない

「二人とも落ち着いてください。話を続けますよ。このままにしておくと現世に被害が出てくる事態になりかねません。」

「それじゃあ、その虚つてのを防ぐ方法はあるのか？」

「あるっちゃあるんすけどねえ」

「そんなの絶対反対だ！」

「と一護サンが…」

「方法つてなんだよ」

「それは…」

「浦原さん！言うな！」

「夏梨サン、あなたが死神になればいいんすよ」

「！」

「だめだ！確かに死神になれば自分の身も、他の奴らも護れるかも

しれねえ。けどな、死神になれば死の危険が纏わりつく。…だからお前には…」

「一方的に言うな！あたしだって自分が狙われてるって自覚してたし、それで周りを巻き込んでる事も分かった。…それが分かっても、一兄は何もするなって言うのか?!」

「…っ」

一護には夏梨の思いが痛い程分かる。

かつて自分自身がその力を手にしようとしたのと同じ理由だ。

「黒崎サン、夏梨サン、とりあえずこうしましょう。どちらにせよ夏梨サンにはある程度の力をつけてもらった方がいいでしょう。霊圧を抑えるくらいなら死神にならずとも簡単にできるんで、そこら辺はアタシ、夜一サン、鉄裁サンの三人で叩き込みましょう。二週間あれば十分っす。…そしてその間、もしくはその後でも夏梨サンの霊力が暴走してしまった時は…分かってますね?」

「浦原さん、他に方法はねえのか…」

「妹さんが心配なのは分かるっす。でもただの魂魄のままでは霊力を抑えるのに限界があります。分かってください」

「…そうか。わかった。夏梨は浦原さん達に任せる。夏梨を鍛えてやってくれ。…じゃあな、夏梨。」

「うん、ありがとう。一兄」

一護は浦原商店を出て、ピシヤリと引き戸を閉める。そして無力な自分に嫌気が差して悔し拳を握った。それと同時に一護はあることを固く決心した。

一護が去ってからすぐに浦原と夜一は夏梨を地下の勉強部屋に連れていった。

「あんな小さいお店の下にこーんな大きい空間があつたなんてー！っ！」

浦原がわざとらしく大きな声で言った。

「十分驚いてるから。」

と夏梨の声からは飽きれている事がよく伝わってくる。

「そうっすか？ まあいいや、今日は魂魄の姿に慣れてもらいます。」

お兄さんと似た反応だなあと思いながら喜助はポケットから丸薬を取り出す。

「これを食べてください」

「え？」

「早く」

「わかったよ」

喜助に急かされ夏梨はその丸薬を飲み込んだ。

飲み込んだ瞬間、夏梨の肉体と魂魄が分離した。

「どうっすか？ 魂魄の姿は息苦しかったですか？」

「平気」

「じゃあこちらを見てください」

「ん？」

喜助が指差した方を見ると、夏梨の地面に倒れていた肉体がムクリと起き上がった。

そして

「私の名前は黒崎夏梨！12歳です！キャピ！好きな色はピンクでえ、ハートとりボンがも大好き！よろしくお願いしマース！キャピ？」

「ぎゃあああああ！！」

夏梨は心の底から悲鳴を上げた。

「浦原ああ！」

夏梨は喜助につかみかかる

「どうなってんだ？！あれはあ！！気持ちわりい！気持ちりいよ！！」

「ぶつぶツ！」

「笑うなア！！」

「これは、傑作じゃッあっはっはっは」

「そっちも豪快に笑うな！さっきまで結構シリアスだったじゃん？

！あの空気どこ行っただよ？！」

「げ、原因はさっき飲み込んだ義魂丸っス。ぶぶツ」

「まだ笑つか！きちんと説明しろ！」

「まあ、正確には改造魂魄なんスが。つまり、夏梨サンが肉体から抜けると、動かなくなりますよね？」

「ま、まあ」

「夏梨さんはこれから二週間学校を休む事になっちゃうんスよ？それはさすがにヤバいでしょう？」

「そうだけど…まさか！」

「そう！夏梨サンがここに居る間はこの夏梨さんの代わりにこの改造魂魄さんが学校に行ってくれんす！！」

「？くれるんす！！？じゃねええ！！こんなの、バレるに決まってるだろおがああ！」

「なんでっすか？」

「こんなのキャラ違い過ぎだろ！」

「大丈夫っす。夏梨サンが学校でちょっと変な目で見られるようになるだけっす」

「全然大丈夫じゃねえ！！！」

「まあまあ、落ち着いてください」

「これが落ち着いてられるか！」

「仕方ないっすねえ、学校はアタシがなんとかするっす」

「するって…どうやって」

「そんなの校長と先生方ににちよろちよろっつと」

「……」

「そう言うわけなんです、今からちよっつと運動してもらいましょう。何してもらおうか……」

「待てえい！さっきふんわりした表現で言っただけど、ちよろちよろっつとて何する気だ？！」

「ちよろちよろっつとはちよろちよろっつとっすよ」

「…もういいや」

「そうっす。深く考えなくていいんすよー」

「で？何するんだ？」

「そっつだなあ〜」

「それなら儂と鬼事というのはどうじゃ？」

「それはまだ早いんじゃないっすか？」

「御主に聞いているんじゃない。夏梨に聞いておるのじゃ」

「鬼ごっこがあたしには早いってか…？おっし、のった。やってやろっつじゃねえか！」

「よし、じゃあ決まりじゃな。夏梨、御主が鬼でよいか？」

「うん」

「うむ、スタートじゃ。」

そう言った瞬間夜一は夏梨の目の前から姿を消した。

もちろんその鬼ごっこは夏梨の知っているものとは懸け離れていたことは言うまでもない。

晴れた夏の日（後書き）

誤字脱字の報告、感想をもらえるとうれしいです。

夢で見た世界（前書き）

1話のすぐ続きです。

夢で見た世界

「それにしても久しぶりだなーっ、現世」
とスキンヘッド。

「そうだね、一角。それにまたこのメンバーと来る事になるとはね。」
それに返事をするオカッパナルシストの男。

「現世に来たからには買い物に、エステに、食べ物つ。する事が沢山あるわ〜！」
と金髪のグラマーな女性。

「松本、遊びに来た訳じゃないだろうが」
羽織を着た少年が目を伏せ、眉をピクピクさせながら言う。

「まあまあ、隊長も落ち着いて。急いで一護の家まで行きましょっ、あの事を伝えるために。」
なだめるように入れ墨の赤毛が言う。

「そうだったな、急いで伝えに行つてやるっ」

そう、日番谷、乱菊、一角、弓親、恋次の日番谷先遣隊は今、空座町の上空にいた。

「死神の力を取り戻す方法を見つけたとな」

目の前から夜一が消え、夏梨は驚いていたがすぐに驚きの顔は無くなり走り始めた。

しかし、普通に走っただけで瞬歩に追いつく筈もなく、10分経過。

「はあ、はあ、はあ…」

「夏梨、おぬし、10分も走り続けるとは。その根性は一護と同じじゃな」

「全然…追いつかな…かったじゃ…ねえ…か…はあ、はあ、…な
んで、消えんだよッ！」

夏梨は肩で息をしつつ、

「わっはっはっはっ、凄いじゃろ？これは舜歩という死神の歩法の
一つじゃ」

「んじゃ、…さっさと、そのやり方…はあ…教えてくれよ」

「そう言わずともこれからいやという程叩き込んでやるからの」

「ま、今のは一種の準備運動だと思ってください。本番は明日から
っス」

「わあ たっよ。…今日はもう寝る」

夏梨が浦原商店に来て7日がたった。夜一から瞬歩、白打を習い、浦原からは霊圧の抑え方と、ついでに尸魂界について教えてもらった。3日目からの修行には鉄裁も加わり鬼道を教わり、30番台まで出来るようになった。(詠唱破棄はまだまだ)夏梨は物覚えがよく、凄い成長スピードだった。

あと残り7日。朝10時。地下勉強部屋。

「夏梨サン調子はどうつスカ？」

「おう！疲れてるけど、つらくない」

口調こそいつも通り夏梨だが、その顔は無理に作った笑顔だと夜一と喜助には分かった。

「どうか、しましたか？」

喜助が直球で訊ねる。

「ん？どうもしてないよ？」

やはり夏梨は笑って見せる。

「夏梨サン」

喜助が落ち着いた声で、でも強く言う。

「…。悪かった…話聞いてくれるか？」

「もちろんじゃ。」

夜一が優しく返事をした。

3人は居間に移動して夏梨の話聞き始めた。

「なんか、自分でもよくわかんないんだけど…、3日くらい前から夢を見んの。凄くリアルな夢。その夢の中の世界には水が一面張ってて、その地面からすごく大きいコンクリートで出来た高さがバラバラの柱が何本も立ってるんだ。あたしはいつもその中の1本の柱の上に立っていて…、ここの声が聞こえてくるの。？聞こえるか？つて。だからあたしは？聞こえるよ。あんたは誰？？つて聞いた。そしたら？我が名は　だ？つて答えてくれたんだけど、名前の部分がはつきり聞こえないの。………それだけ。けどなんか不安で…足で踏んだ砂利の感覚も、耳で聞いた声も本当、夢とは思えないくらいリアルなんだ。」

「そうでしたか。それは不安だったでしょう。…だったら丁度いい昼過ぎくらいまでは休憩にしましょう。アタシもそろそろ店の品を買い出しに行かないといけないし、夏梨サンは少し落ち着く時間がほしいでしょう？暇になったらウルルとジン太と遊んでればいいっス」

「そうじゃの、僕も気になる事だあるんでう。少し出かけようと思っ。」

「そっか。ごめん、氣い使わせちゃって」

「そんなわけあるか！いいか、死神は自分の心が強さに大きく関わる。つまり、御主を鍛えると決めたという事は、同時に御主の精神面でも支えるという事じゃ。無用な心配をするでない！」

「そ…っか。あはは、ありがと」

夏梨の顔が緩む。

喜助も珍しく優しい笑顔で笑った。

「…では、行ってきますね〜。鉄裁？行くっスよ。」

「僕も行ってくる。ではの」

喜助、夜一、鉄裁の三人は3人は浦原商店を出ると歩きながらさっきの夏梨の話について考えていた。

「あの夢は斬魂刀の夢じゃろう」

「はい。あの話を聞く限り、そうっス。」

「生きた人間が斬魂刀の夢を見るなどありえる話なのか？」

「聞いた事はないっスねえ」

「そうか…。僕はこっちじゃ」

「はい、ではまた後で」

「店長、夏梨殿はこれからどうなるのでしょうか」

夜一と別れ、しばしの沈黙の後に鉄裁訊いた。

「そうっスねえ…」

少し間を空けて

「やっぱり、いずれは。」

「やはりここにおったか。一護」

「よ…夜一さん！」

急に窓から夜一が入って来た。

「ん？まだ連中は来てないのか」

「は？連中？」

「いや、なんでもない。気にするな。」

「もしかして連中って冬獅郎達の事か？」

「おっ、そうじゃ。もう来たのか。」

「もうっていうか、夏梨を浦原さんに預けた日に来たけどから一週間くらい前の話だけど」

「そうじゃったのか、で、どうするつもりじゃ。」

「話の内容まで知ってるのか」

「まあな、死神の力を戻す方法が分かった、というものじゃ。で、どうするのじゃと儂は聞いておる」

「ん、そうだな、ルキアや恋次、冬獅郎達には義骸に入ってもらえば会えるし、虚はイモ山さんとか石田とかがいるし、それに家族とか友達のためにも危険な事はしたくない。……」

「…ほう」

夜一はにやりと笑う。

「…と最初は思った。でもそれって逃げてただけなんだよな。始めの始め、俺がなんで死神になったのか忘れてた。…護りたい。」

「そうか、そうなると思っておったぞ。して、出立はいつなのじゃ？」

「たぶん今日。先週冬獅郎が一週間後に返事を聞きに来るって言うてたからな」

「具体的にはどうやって死神の力を取り戻すかは知っておるのか？」
「ああ、なんか俺さ、死神の力は無くしたけど、虚の、つまり仮面ヴァインガードの軍勢としての力はまだあるらしいんだ。だから俺ん中からその虚を引き出して、それと俺が戦う。そうしているうちに死神の力は戻る…らしい。」

「御主がこれからどうするかも訊く事が出来からの。僕はもう帰る」
「あ、待ってっしてくれ、夏梨はどんな感じだ？」

「元気にしとる。…お、そうじゃ、夏梨の奴、三日前から斬魂刀の夢を見ているらしい」

「斬魂刀の夢？」

「ああ、おぬしは知らんのか。魂魄が斬魂刀を得る前に見る夢じゃ。」

「…って事は、夏梨は…」

夜一は厳しい顔つきの一護から窓の外へと見る先を移す。

「…どうなるかわ分からん。…しかし、夏梨はすでに普通であるには難しいかもしれんのか」

「…そうか。教えてくれてサンキユ」

「安心してよい。あやつは御主が心配する程柔ではないぞ？なんせ御主の妹じゃからな」

「はは、それもそうだな」

1時間後

「黒崎一、返事を聞きに来たぞ」
今度は冬獅郎が窓から入って来た。

「おお、冬獅郎か。ていうか、お前らは玄関というものを知らないのか？」

「黒崎、これからの事は決めたか？」

無視ですか…。心でつつこむ。

「決めたぜ」

「…」

「戻りたいに決まってるんだろ」

「そうか…。お前ならそう言うと思ってたぜ」

「そうかよ」

「じゃあ、これからお前には尸魂界に来てもらいたいんだが、お前は今、ただの魂魄。だから霊子変換機付きの穿界門じゃねえといけねえ。だから浦原にもうそれを作るように頼んである。じゃ、行くぞ」

「準備がいいじゃねえか」

「言っただろ？誰も彼も分かってたんだよ。…行くぞ」

「りょーかい。でも玄関から出るぞ」

一護に窓から出ようとしていた冬獅郎に言った。

夢で見た世界（後書き）

本当にわかりにくい文章ですいません。特に夏梨が斬魂刀の夢の話をする所。これからの話も、文章もできるだけいいものになりたいので感想を是非ください。

感想、誤字脱字の報告、よろしくおねがいます。

死神の斬魂刀（前書き）

まだ夏梨が浦原さん達に斬魂刀の夢の事を話した日です。

死神の斬魂刀

午後二時、一護と日番谷が一護の家から出て約10分程がたち、2人は浦原商店に着いた。

「浦原さん居るかー？」

その一護の声を聞き浦原が店の奥から出てきた。

「黒崎サンに日番谷サン。思っていたより遅かったっスねえ」

「そうかよ」

日番谷は不機嫌そうに言う。

「ささ、中に入ってください。準備はできてます。」

浦原に連れられ、日番谷と一護は地下勉強部屋へ行った。

日番谷はそこに着いて見た光景に目を見開く。なんとそこには死神の格好をした夏梨がすぐその布団で布団を敷いて寝ていたのだ。

「な…なんで夏梨が死神の格好してんだ？それに霊圧も前と比べ物にならないくらい上がってんじゃねえか第一、なんであんなとこで布団敷いて寝てやがるんだ？」

一護は霊力がないため夏梨がそこに居るのが見え、日番谷が浦原に問うたのを聞き、夏梨がそこに居て、しかも死神になったのだと悟る。そして自分の妹がそこに居るのがわからない自分に齒噛みした。

「ああ、それはですね……成り行きです。」

「てめえ今すんの面倒だからハシヨっただろ」

「冗談です。数週間前から夏梨サンの霊圧が急激に上がりまして、虚から狙われるようになったので一週間前からアタシらで霊圧の抑え方や白打、鬼道などを教えてたんす。」

「それはわかるがなんで夏梨が今死神になってるんだ？」
日番谷はさらに聞く。

「え〜とそれはですね……」浦原は何があったのか話始めた。
時は数時間前に遡る。

12時・正午・浦原商店

「たっただいまー」

浦原が買い出しから戻り、居間に入ると夏梨が一人で座っていた。

「浦原さん、やっぱり考えたんだけど…あたしの事死神になれるように鍛えてくれない？」

「夏梨サン、前も言いましたが死神になるという事はそう甘い事ではありません。それに今の夏梨サンの力でも十分虚を追い払えます。」

「でもそれじゃ足りないんだ。確かにあれだけの力があればあたし自身は護れるかもそれない。だけど一兄を護つたりとか、冬獅郎とかの助けになりたい。いつまでも護られるだけなんていやだ。あたしが護るんだ。」

「そうですね、正直言うと今あなたは死神になる一歩手前にいる。あなたをアタシが鍛えれば死神になれるでしょう。……アタシの修行は厳しいですよ?」

「やってやる!」

「そうですね、だったら決まりだ。地下に来てください。」

地下勉強部屋

「ではですね、この刀を使ってアタシに怪我をさせてください。」

「なんだ?この刀」

「それは浅打といってまだ斬魂刀を持たない死神が使う刀っス。」

「そうなんだ」

夏梨はそう言って一息つくくとニッと笑った。

「それじゃ、始めようぜ」

「ええ」

ガキーン

夏梨の刀と浦原の持っていた杖がぶつかった。

「破道の31・着火砲！」

夏梨の撃った鬼道をヒョイツと避られてしまった。

「次はこっちから行きますよ」

そう言いながら浦原は持っていた杖から刀を出し、夏梨に刀をむける。夏梨はそれを受け止めようとするが、刀で受け止めきれず肩に深い傷をおった。

夏梨はクソつと言つて傷口を押さえながら浦原に背を向けて走り、岩陰に隠れる。

?このままじゃ無理だ。殺される。どうしよう、どうしよう?考えていると浦原が目の前に現れ、また逃げ始める夏梨。そのとき、焦る夏梨の頭に誰かの声が聞こえた。

?……何をそんなに怖がる?

夏梨は一瞬びつくりしたが聞き覚えのあるその声に答える。

?だって強すぎる。このままじゃ殺される?

?……ならば力をつければいい。お前は逃げて生き延びればいいとでも思つか?

?思っわけない!あたし、さっきから逃げてばっかで情けない!!

こんなんじゃない大切な人どころか自分の身すら護れない？

後ろから浦原が追って来て鬼道を飛ばして来る。

？――力が欲しいか？

？当たり前だ！ずっと前から力が欲しい思ってた！！護るための力が！！あたしに力を貸してくれ！！！！？

？――良いだろう。前を向け、後ろを振り返るな、敵を斬れ、進め！我が名は？

「藍月らんげつ！！」

浦原の放った鬼道で土煙が立ち、見えなかった夏梨の姿が、浦原が鬼道での攻撃を止めた事で見え始めた。

夏梨は黒い死神の格好に、一護の斬月を少し小さくしたような刀を担いでいた。しかし手持ち（柄）の所は包帯ではなく、青竹色とふじ色で編まれた布で巻かれていた

「ほっほーう、それを待ってたっすよ。そろそろ本気でいけますか？」

「あたりまえ。…いくよ」

「いつでもどどっぞ」

「月牙天衝っ！！！！」

ツドツカーン

浦原の真横に夏梨の出した斬撃で深い谷の様なものができた。すると

パチパチパチ

「夏梨サン良くできました。これであなたは死神の力を得る事が出来ました。おめでとございます。」

「…ほんとに？」

「ええ」

「やった…」パタリ

夏梨はいきなり大技を使った所為か、倒れてしまった。

と、そこに一護の家から帰って来た夜一が地下に降りて来た。

「おおつ、夏梨、死神になったのじゃな！しかも儂の居なかったこの短時間で」

「凄いつスよね。アタシも驚きました。夏梨サンが死神になりたいと言いだしたので、力試しも兼ねて戦ってみたら霊圧の上がり方からしてこれはいけるかもっと思っただんでギリギリまで追いつめたら死神になっただんですよ」

実の所をいうと浦原は途中、夏梨の肩に傷を負わせた時、彼女の怯えた顔を見て彼女は死神になれる程の覚悟がないのでは？と思っただ。しかし、死神になる事の出来た夏梨を見て安心するのだった。

「それにしてもここで寝てしまっただは夏梨の奴風邪を引きかねん。喜助、布団ここに持ってこい」

「あゝはいはい。待っててくださいね」

「……………」と、こんな感じですかね」

「そうだったのか」

日番谷と一護は難しそうな顔をしていた。

「ていうか、部屋に連れてってやれよ」という一護のツッコミは見事に無視して話が進む。

「ところで例のものはできてるか？」

「もちろんっす。ではここに立っててください。いきますよ〜」
パチンツと浦原が指を鳴らすと縦長の四角い穿界門が現れた。

「うお、久しぶりに見たぜ。これ」

「わかってますね？この中は走り抜けてください。」

「おっっ」

「じゃ、黒崎行くぞ」

飛び込もうとした瞬間、後ろから幼い声が聞こえた。

「一兄、冬獅郎！」

自分の名前を呼ばれて振り向く二人。

「やっぱりか、行くなら声かけてけよな。冬獅郎なんて会うの久しぶりだろ」

そこには死神から体に戻った夏梨が居た

「そうだったな。それにお前死神になったんだとな」

「そうだよ！これからいっぱい修行してお前に追い抜かしてやる」

「やれるもんならやってみろよ」

夏梨と日番谷のやり取りを見て一護は微笑ましく思った。

「さて、そろそろいいっすか？」

「ああ、わりい、浦原」

「じゃ、行くか、冬獅郎。夏梨も修行頑張ってたな」

「じゃあな、一兄、冬獅郎」

一護と日番谷は穿界門の中に消えていった。

「夏梨サン、もう平気ですか。」

「うん！早く冬獅郎みたく強くなりたい」

「そうっすか。じゃあしばらくは空座町に出る虚を倒しましょう。」

「えっ、それだけ？」

「それだけっす。だけど一日に出る虚の数はかなりの量なんで力はずっと思えますよ。」

「それならやる。」

「ああ、そっだ。これ。」

浦原は夏梨にS O U K L * C A N D Yと描いてあるかわいらしいものを渡した。

「なにこれ？」当然夏梨はこの道具を知らないので浦原に訊ねた。

「この丸薬、義魂丸を飲み込むと体から抜けて死神化する事ができるんす。」

「へっ、便利だね。今やってみていい？」

「勿論」

夏梨が義魂丸を一個飲み込むと夏梨は体から抜け、死神の姿になり、倒れていた夏梨の体はムクリと起き上がった。そしてこう言った。

「はじめまして。趣味は勉強と掃除です。」

「う…浦原さん、この性格、絶対あたしじゃないってバレるよな。」

「まあ虚が出た時に体から抜けられる物ならなんでもいいじゃないですか。」

「そうなんだけどさ…」

「あとこれも、伝令神機」

「伝令神機って?」

「えっとですね、虚が空座町に出現したらピピピ、ピピピと鳴って知らせてくれて、この画面の地図に虚の居場所がマークで表示されるのでそこに向かってください。」

「了解」

「そんなところですかね。虚が出るまで適当に休んでいいですよ」

「うん」

二時間後、 18時49分

「虚か。よし行くか」

「虚か。よし行くか」

死神の斬魂刀（後書き）

感想、是非是非ください。

再び力を

夏梨は伝令神機からの虚の反応を待ち、ゴロゴロしながら二時間程が過ぎようとしていた。

そのとき、

『ピピピ、ピピピ、ピピピ、ピピピ、』

甲高い音が伝令神機から発せられた。

「うおっ」

油断しきっていた夏梨はその音に驚いて大きな声を出した。

そしてその音が虚の出現を知らせるものだ夏梨は知ると浦原商店を飛び出した。

画面に表示される虚の位置まで5分程走る。

その現場着くと、虚はプラスの霊の少年に襲いかかった。それを見るや否や夏梨は背中に掛けてある斬魂刀を構え虚に切りかかった。

ブシャーっ!!

その虚は思いのほか弱かったため一撃で仮面が割れて簡単に倒す事が出来た。

虚を倒し一息着いた夏梨は先程襲われていた霊の少年に近づく。

「おい、あんた大丈夫?」

「うん、大丈夫。ありがとう」

「気にすんな。今からあたしがあんたを尸魂界に送ってやるから。安心しな」

「尸魂界？」

「そう。まー、行けば分かるよ」

そう言いながら夏梨は浦原から渡された5cm程の五角形の板を少年の額にあてると、少年は消えて行った。

夏梨の使った道具は魂葬板こんそうばんと言って、形、大きさは一護の持っている代行証と変わらず、しかし板の表面に着いている柄はどくろマークではなく地獄蝶。これは浦原が開発したもので正式な死神でなく、魂葬する術を持たない者でも、これを霊ソラスの額にあてる事で魂葬の出来る優れたものだ。夏梨が義魂丸と伝令神機をもらった時に一緒にもらったものだ。

「ふー、これで一件落着」

夏梨が商店に戻ると雨ウルルとジン太が夕食をとっていた。

「おー、夏梨オメーも食べるか？」

口にごはんをほうばりながらジン太が喋りかけてくる…。正直汚い。

「夏梨ちゃんおかえり。ここ座っていいよ」

雨が奥に席を詰める。まあ、詰めるといっても二人しか座ってないので元から食べる場所はあったのだが。

「ありがとう」

夏梨の初めての虚との戦闘は、なんとも素っ気ないものだった。

浦原商店の地下で穿界門をくぐり、断界に入ると日番谷と一護は遠くにある光を目指して走り続けた。そして拘流に追われつつ、やつとの思いで断界を抜けると目の前には白と橙を基調とした建物の立っている瀟霊廷に着いた。前のように流魂街に出ると思っていた一護は感心した顔をしている。

恋次、一角、浮竹、乱菊、やちるなどの一護とも親しい死神達が一護と日番谷を出迎えた。

「一護君、元気にしてたかい？」

「いっちー、霊力早く取り戻してけんちゃんと遊んであげてね」

「一護、今度お酒一緒に飲みましょッ」

と順番に一護に喋りかける浮竹、やちる、乱菊。

日番谷はまったく、という顔で出迎えに集まっている面々を見ていた。そして話が一段落したのを見て一護に話かけた。

「おい黒崎、行くぞ」声をかけるなり歩き始める日番谷。あわてた

一護は走りながら大声をだした。
「分かった、じゃあな浮竹さん達ーっ」

「おい冬獅郎、今どこ向かってんだ？」

浮竹達と別れてから、日番谷の少し後ろから一護が着いて行く形で
かれこれ10分は歩いている。

「一番隊隊舎だ。総隊長に呼ばれてるからな」

「お前がか？」

「いや、お前がだ黒崎」

「俺？」

「そうだ。あの戦いの後は尸魂界の復旧、暴走した生き残りの破面の討伐、そんな忙しい中でも進められてたのがお前の霊力を取り戻す方法を探す事だった。そしてつい先日、やっと見つけたというわけだ。」

「そんな大きい事になってたのか。」

「ああ」

そんな事を喋っていると一番隊舎に着いた。隊舎の大きい門をくぐり、長い廊下を歩くとまたまた大きな扉が現れた。日番谷はその扉の前でかしくまったように言った。

「日番谷冬獅郎、黒崎一護ただいま参りました。」

「おお、入れ」

その声と共に扉が開いた。

「黒崎一護、来たか」

「ああ」

「死神の力を取り戻したいんじゃない？」

「当たり前だ。」
「そうか、よかるう。ではさっそく始めるぞ第一演習場へ行く。着いて来い。日番谷は公務に戻ってよい。」
そこで日番谷と分かれて総隊長に連れられ一護は第一演習場に向かった。

演習場に着くと仮面の軍勢である、平子真子と猿柿ひよ里が居た。

「よう、久しぶりやのう、一護。」

「相変わらずハゲた面しとんのう」

「お前ら…」

一護はあまりの言われようにイラッとして眉毛を引きつらせる。そんなやりとり総隊長は割り込むように言った。

「まだ人数が揃ってないようだが僕はこの後、別件があるゆえ先に隊舎に戻る」

シユツ

総隊長は瞬歩でこの場を去った。

「じゃ、始めたるか」と平子が切り出す

「何をだよ」

「何や怖がるなや、一回やった事あるやろ？」

「何の話だ？」

「まさか何も聞いてへんの?!お前を虚化させて死神の力引っぱり出すゆう話」

「ああ、その事が、少しなら聞いているぜ」

「そ、じゃ始めるで」

「わかった」

「何やねんお前!この一年でこんな腑抜けて、なんやねん?!」

「てめえら…人が真剣に力取り戻しに来てんのにからかいやがって
！！」

「ハゲ真子にハゲ一護！！うるさいわ！！…それトリサ達来たみたいやで」

ひよ里が言つと

シュツシュツシュツシュツ

瞬歩で矢胴丸リサ、有昭田鉢玄、六車拳西、久南白、愛川羅武、鳳橋楼十郎がやって来た。

「おつす、一護」トリサ

「お前らも来てたのか」

「そうや。じゃ、サクツと始めよや」

「それもそうやな…行くで一護」そう言いながら平子は一護の顔の前に手のひらをかざすと一護は気を失った。

「ハツチ、結界や。前と同じように一護の五体にも封印や」

「はいデス。…鉄砂の壁 僧形の塔 灼鉄熒熒 湛然として終に音無し 縛道の七十五・五柱鉄貫！」

ジャッポーン！！

一護は水の中に勢いよく落ちた。そこは一護にとって最後に斬月を見た所であった。水の底には町が沈んでいる。しかし、その町は前に一護が見た時より確実に古びていた。そして辺りを見渡すと、そこには白いもう一人の自分が居た。

「よう一護。久しぶりだな」

再び力を（後書き）

すいません。縛道の詠唱文の『榮』と瀨霊廷の『瀨』の字が違います。なんか文字種変換で変換できなかったんです。

それと、更新が遅くなっています。

感想を待っています。

再び力を・2

「よう一護、久しぶりだな」

挑発するように話す白一護。しかしそれに対して一護は冷静を保ちながら疑問に思った事をそのまま口にした。

「てめえなんで居やがんだ」

「は？」

「だからなんで居るんだって聞いてんだよ。お前と斬月は二人で一人だった筈だ。それなら斬月だけ消えてお前だけ残ってるなんておかしいだろ？」

「あのなあ、なんか勘違いしてるようだが斬月は消えちゃいねえ。弱ってるだけだ。簡単に言うと一年前まで対等だった斬月と俺の力がお前に最後の月牙天衝を教え、使わせたために斬月は力のほとんどを失った。お前の斬魂刀である斬月が弱ってお前は死神の力を無くしたんだ。だから今この世界の王は俺だ。お前じゃねえ！」

「それは後で戦って決める事だ。その前にもう一つ、今斬月はどこに居るんだ」

「いちいち面倒な野郎だな。斬月は俺ん中だ、当たり前だろ。俺と斬月で一人だって最初にてめえが自分で言ってただろうが」

「じゃあ斬月はずっと一年間ずっと弱ったまんまなのかよ」

「そつだ。俺があいつを押さえつけてるからな」

「どづいつ事だ？」

「だからさっき言っただろうが、今はこの世界で俺が一番強いんだ。弱った斬月を押さえ込むなんざ雑作もねえ」

「そうかよ。って事はお前を倒せば万事解決ってわけだな」

「ああ、そうだ。あとこれ使え」

そう言つて白一護は一護に刀を投げ渡した。

「なんだ、これ？浅打じゃねえか」

「知ってんのか。お前はそれ使え。刀他に持ってないだろ」

「そうだな。サンキュ」

「じゃ、いくぜ」

そう言い放ち、白一護は背中に背負っていた白い斬月を構え猛スピードで一護に飛びかかってきた。

カキイイイン

一護はとつさに浅打を鞘から抜き白一護からの攻撃を受け止める。

カキン、カキン、カキン、カキイイン

凄い速さで刀を打ち込んで来る白一護。一護はそれに対応しきれず体のあちこちに大きな切り傷ができる。

「やべえ、このままじゃ負ける…。どうすれば?! 霊力は戻りかけてるのを感じる。だからなんかそれを使つて…?」

一護の焦りが募る頭に一つの考えが浮かんだ。

「鬼道……!! 俺、霊圧操作は苦手だが、やってみる価値はある!

!?

記憶を掘り起こし復唱する。

「縛道のの六十一・六杖光牢!!」

すると技は見事に成功した。急に動きの封じられた白一護は何が起きたのか分からず、動きが固まる。その隙をつき一護は白一護に刃を突き立て、胴に貫通させた。

「一護!! て、てめえ卑怯だぞ。鬼道なんか使いやがって。でも次は無えからな。気をつけろよな」

「そつだな…」

そつ言いながら白一護は消えていった。

「一護はまだなんか？」

「ハゲ真子! まだ10分しか経ってないやろ!!」

「なんやねん! もう10分やろが!!」

「二人とも落ち着いて」

ローズが宥め(なだめ)に入る

今は六車が虚化しかけている一護の相手をしている。

拳西の表情が険しくなり? そろそろ俺も虚化しねえと? と思ったそのとき一護の虚の仮面が剥けた。

「おお、一護そろそろやと思っと思ったわ」

調子良く言う平子

「ふう」一護はため息をつき、疲れたようなしかしどこかスッキリしたような顔をしていた。

そして、死覇装を着ていた。

「ま、これでめでたく死神に戻れたわけやな」とひよ里

「おう、でこれからどうすりゃいいんだ？」

「そうやな…、総隊長サンには俺らが報告しとくから、好きなようにしてきてええで。会いたい奴もおるんやろ？」

「悪いな。じゃあそうさせてもらっぜ。じゃあな」
シュッ

一護はそう言っつて瞬歩でその場を離れた。そして久しぶりの瞬歩、纏う霊圧、背中に斬月を背負う感覚を感じ、うれしく思うのであった。向かう先はルキアの所だ。

一護はルキアが今どこに居るかなんて知らないの、とりあえず朽木家の家へ向かった。

そこに着くと一隊程ではないものの、これまたおおきな門が一護を出迎えた。

しかし一護はその門をくぐらずにその脇の塀の上に瞬歩で登り朽木

邸の中の様子を見て中に入り込んだ。

中はとても広く、近くに白哉やルキアの気配はなかったため一護はあても無く朽木邸を彷徨い歩いた。数分歩いていると偶然にもルキアをみつける事が出来た。しかしルキアはまだこちらに気づいていない

「おつす、ルキア」

一護はルキアの後ろから声をかけた

「い、一護」

ルキアは死覇装を身に纏った一護を見て驚いた顔をした。まあ後ろから急に後ろから声をかけられた事も驚いた原因の一つではあるが。

「…一護、安心した」

ルキアは優しく笑いながらそう言った

「？、なんでだよ？」

「正直、死神の力を失ってからの貴様は見えていられるものではないぞ。」

「そうだったのか、悪いかつたな心配かけて」

「気にするな。それよりなんでこんな所に居るのだ？」

「ただお前に死神に戻れたって報告に来ただけだけど」

「ならば早めに帰った方がいいだろう。」

ルキアのこわばった表情を見て一護は勘づく

「…白哉だな」

「そつだ。さつき女性死神協会の朽木邸内の秘密基地がバレて……まあいりいろあったんだ。兄様に見つかる前に帰った方がいい。」
「護は白哉のキレた時の恐ろしさを知っているので速攻で返事をした。」

「そつさせてもらっぜ」

再び力を・2（後書き）

今回は夏梨が全然出てこなかったですね…。

現世からの訃報

朽木郎を出てから一護は行くあてもなく歩いてきた。

ルキアの他にも会いたい連中も居るが今は疲れてるせいか、気が向かない。それに今剣八に出会ってしまったら逃げきれぬ自信がない。うーむ、と少し考え込んでから一護は冬獅郎の所に行つてどうしたら帰れるか聞いてみる事にした。

「冬獅郎、居るか？」

十番隊に着いてまたもや中に無断で入り、気の抜けた声で冬獅郎を呼びながら探していた。すると廊下の奥の方に十番隊の執務室を見つけた一護はそこに駆け足で向かった。

一護はバンツと大きな音を立てて扉を開けた。

「冬獅郎ー、どうやったたら現世に帰れるんだ？」

見ると中では日番谷が窓側の机について、乱菊は日番谷のつく机の前に立っていた。そして一護が部屋に入つて来たのを見ると目を見開き、日番谷が言った。

「黒崎っ！今すぐ現世に帰れ！！」

「どづいづことだよ」

もともと一護も現世へ帰るため冬獅郎の所へ来たのだが帰るのを強制するような言い方に一護は何かあったのだと察す。

「ああ…、お前の妹が…夏梨が…死んだらしい。」

「い、意味わかんねえ事言うんじゃねえよ！」

一護は頭が真っ白になって訳が分からない、という感じで混乱して

いる。

日番谷も一度夏梨と会ってサッカーをした事がある。それが故に日番谷も似たような状態である。

「俺も詳しい事はわかんねんだ。ただ、空座町駐在担当の車谷から『霊圧のでかい黒髪の小学生の霊圧が今朝いきなり完全に消えた』と連絡が来たんだ。あいつがいくら霊圧操作が得意でも完全には無理だ。…だから……」

「憶測で喋んな！…わりい、現世に帰してくれ。」

「ああ」

一護が現世に戻ると浦原さんが夏梨は病院に搬送されたと教えてくれ、全力疾走でそこに向かった。到着すると泣いている遊子とつつむく一心の姿が目にはいった。

「親父…夏梨は……？」 恐る恐る聞く。

「お…おにいちゃ……」

一護の声を聞き遊子が顔を一護に向けた。その目は赤く腫れていてもう何時間も泣いていたのだとわかる。

一心はただ無言で下を向いていた。

「なんで夏梨がっ…どうしてだ」一護が言つと

「交通事故だ」と一心がつぶやくように重い口をあける。

11時、今サッカーボールを持ち、公園へ向かっていた。浦原さんに伝令神機からの虚反応がない時は自由にしていると言われていたからである。

今歩いているこの道もいつも登校で使う道だから見慣れた風景なのだが一週間ちよつと通らないだけで懐かしい感じがする。

と考えていると夏梨の前を歩いていたお母さんと5歳くらいの女の子の親子が何やら言い合っている。微かに聞こえて来る話の内容から女の子が買ってほしかったお菓子を買ってもらえず駄々をこねているといった感じだ。それを夏梨は微笑ましいなと思うが特に気には留めずに歩くスピードをあげて追い抜かそうとした。

しかしその時、トラックがこちらに向かって突っ込んで来た。止まる気配はない。すでに加速し始めてる自分は走れば逃げられるだろう。でもそうすればこの親子は……

夏梨はゴチャゴチャ考えるより体の方が勝手に動いていた。二人を後ろから思いつきり押す。するとその親子は転がりながらもトラックから離れた所に押し出す事ができた。でもあたしは自然とトラックの目の前で時間切れ。

トリックにはねられた。

一心はこの事を事実を夏梨が護った例の親子から聞いた。その時の話をするお母さんの姿は見えないような状態だった。きっと話す度に頭にその時の映像がフラッシュバックしたのだろう。

そして次は一心が一護にどういう最後だったか言う。すべてを話を一心が話し終わると一護は納得したように

「夏梨らしいな…」と言った。

一心も同じ事を思った。

流魂街（前書き）

今回は夏梨がきちんとメインです。

流魂街

あたしは今尸魂界に来た。たしかトラックにひかれて死んだんだ。んで、数人の死神にカードを渡されて機械的に魂魄達が各地区に振り分けられた。

それであたしもえっと…北流魂街80地区『更木』に送られた。ここは鉄の…血の匂いがする。

人のいる気配がない。民家と思われる平屋は古びていて人の住める感じではない。突っ立っていてもどうにもならないので歩きはじめる。

しばらくあてもなく歩いていると後ろからポタツ、ポタツと音がした。本能が非常ベルをならす。あせって振り向く。そこにいたのは、血が刃からぼたぼたと落ちる刃もボロボロの刀というより、包丁のようなものを持ったおじさん。

そして低い、ガラガラな声で言った。

「斬らせる」

その言葉を聞いた瞬間反射的に後ろを向き夏梨は逃げる。当たり前だ。

斬魂刀があれば対抗できるかもしれないが、今はそれが見当たらない。

森の中に逃げ込み下を見ると血の水たまりがそこら中にあつた。

死体も転がっている。

夏梨はそれを見て吐き気がしたがこらえて必死に走る。

そして夏梨はそこら中の惨状を見てやっと思いついた。

そういえば、浦原さんが言ってたっけ。

『更木』…。

ここは流魂街で治安の一番悪い所だ！

それに気づいて、そろそろ逃げ切ったかと後ろを振り抜いた。しかし、あるう事か、追って来る人は三人に増えていた。

やばいと思った。

夏梨は疲れてしまうのを承知で瞬歩を使ってこの場を乗り切った。

瞬歩を使ったので、追って来ていた奴らなど簡単に撒けたのだが、おかげで体力をかなり消費してしまった。

今どこに居るのかもわからない。お腹も減った。

？パタン

夏梨は土の上に倒れてしまった。

「……………い！大丈夫か、おい！」

「…ん」

「おい！…お、良かった。目が覚めたか」

夏梨が目覚めると、顔に3本の引っ掻き傷と68と描いてある男が

目に入った。

男とは檜佐木修兵の事である。

「どうしたんです？副隊長。急に走ってしちゃって」

「悪い。倒れている子供が目に入ったからな」

「あ、その子の事ですか？」

「ああ。身を覚ましたんだが、かなり衰弱している」

「夏梨…黒さ……」

「あーもういい。夏梨な。名字なんてどうでも。とりあえずこれ食べな。お前靈力あるから腹が減るんだな。…これ食べる」

檜佐木はおにぎりを背中にかけていた布から取り出し、夏梨に渡す。

夏梨はそれをほうばった。食べながらも日が出ている所を見るとあたしは一晚くらい寝てたのかな。と推測。すぐに食べ終わってしまった。

「しかしお前、かなり靈圧が高いな…」

檜佐木は下を向いて考え込んでから

「このままじゃ危ない…。死神になる気はないか？」と真剣な顔で言った。

「えっ？死神って誰でもなれるの?!」

死神になりたいとは思っていたが誰でもなれるのか分からなかった。夏梨は向こうから死神になる事を勧められて光が見えたといった気分だ。

「まあ、誰にもって訳じゃないがお前くらい靈力があればなれるぞ。

「そうなんだ。あたしなりたいの！死神に！！」

「そうか。それなら丁度いい。俺らと来るといい。霊術院まで連れてってやるよ。」

「本当に！？ありがとう」

「ああ、俺らは虚の討伐に來ただけだからな。明日帰る予定なんだ。いいよな？お前ら。」

「勿論です」

「いいですよ」

「当たり前です」

と隊士から次々に返事が返ってきた。

今、夏梨、檜佐木、平の隊士数名で霊術院に向かっていた。

「ところでお前、なんか使えんのか？鬼道とか瞬歩とか」

と檜佐木。夏梨を見つけ保護した時に瞬歩の霊圧の名残があったのでずっと気になっていたのだ。

「よくわかったな。それも使えるし、白打も少し…。あ、あと斬魂刀も持つてる。」

笑って答える夏梨。しかし周りの平団員の死神達はもちろん、檜佐木も信じられない事だった。

なぜなら普通流魂街の人々は霊圧が多少高くとも霊圧操作を習って

いないため、靈力を固めた球が作れるくらいで瞬歩などできる事はそうそうない。

「どうしたの？」

夏梨が周りの人たちの反応がおかしいのに気づいた。

「君、それ誰かに習ったの？」

一人の死神が聞く。

「そうだけど」

「誰に習ったんだ？」

今度はまた別の死神が聞く。

「夜一さんと浦原さんと鉄裁さんに」

全員聞き覚えのある人だった。鉄裁という人の詳細は分からないが聞き覚えがある名前だし、夜一は前の藍染との戦いの時に前線に出て戦って、浦原は崩玉を作った張本人であるので有名人だ。そんな人たちに習うなんて何者だ？ましてやあいつ11、12歳くらいじゃねえか。と隊士達がざわざわつとなる。

「おい、お前」

檜佐木も驚き夏梨に声をかけようとするが夏梨は走って先に行ってしまったため聞けなかった。

「早く行こうぜ。死神になってやりたい事が沢山あるんだ！」

無邪気に笑う夏梨を見ているとそんな深い事また今度聞けばいいという気にさせた。

流魂街（後書き）

なんか夏梨が少し子供っぽくなってしまいました。

進んだり(前書き)

更新遅くなって申し訳ありません

進んだり

「なあ、あとどれくらい歩くんのだ？」

と言いながらも疲れた顔ではない。

「そうだな、あと1回野宿すれば着くだろう」

「また野宿か。まあいいよ、あたし野宿嫌いじゃないし」

呑気に行っている夏梨を見て今ならと思いい、檜佐木は夏梨聞いた。

「おい、お前斬魂刀持つてるって言ってたな。名前は名前はなんていうんだ？」

「藍月……。藍月っていうの」

「そうか」

自分の斬魂刀の名前を知っている事から檜佐木は夏梨は始解ができるのだと予想する。

「そうだ！今で出してみる」

そう言っただけ夏梨は目を瞑り、藍月の名を呼ぶ。

するとすぐに藍月の声はかえって来た

「……なんだ？」

「いつでも誰かをすぐに護れるようににあんたを、刀を持っていたい。力を貸してくれ？」

「……そんな事か。お前はもう儂を握った事があるだろう。だから簡単だ。お前が儂を握りたいと望めばその願いは叶えられる。」

？

？なら、藍月っ、あたしに力を貸せ！！？

すると手元に刀が現れた。

「ほらな、これが藍月だ。」

その斬魂刀の柄は黄色と若竹色で編み込まれていて鐔は四角く枠どられていて枠のなかには龍が二匹暴回っているような感じである。

夏梨の様子を見て騒然とする隊士達と檜佐木。

誰かからの口から思わず言葉がでた。

「お前、何者だ？」

しかし何者と聞かれても夏梨は「何者って言われても……」としか答えられなかった。

そして夏梨は手に持っていた藍月を背中にかけた。（日番谷のような帯刀の仕方）

その会話からしばらく経った頃、

「おっし、今日はここら辺で寝るとするか」

その檜佐木の一声で数名の隊士達がテントを張り始めた。もちろん夏梨、檜佐木も張るのを手伝っている。

張り終わり、夕飯を食べ、寝にはいる。

「じゃ、おやすみー」

「おっ、おやすみ」

「おやすみなさい。副隊長」

「おっ」

夏梨は他の人がみんな寝てしまっても明日、霊術院に着くのだと思

うとなかなか寝れなかったのだった。

「おっはよー」

「おっす」

「おはようございませう」

夏梨、檜佐木、隊士達の順に声をかけ合う

「早く行こう」

「ああ、わかってる。てめえら準備できたか？」

「はい」

「んじゃ、行くとするか」

朝から歩き始めて今もう3時

「まだ？」

「もうすぐのはずだ」

「そっか」

「あ、ほら見えて来た。あれが霊術院だ」

「おおー」

夏梨が歓喜する

「もうここからは見た通りまっすぐ行くだけだ。それじゃ、俺らはあっちだから」

「うん、ありがとう、助かった」

「じゃあな、お前の霊圧がありやそのうち護艇隊で会うかもな。楽しみにしてるぜ」

「おう、檜佐木さんこそ副隊長頑張らないと」

「そっだな」

「じゃあ」

「おう」

「夏梨さん、また今度」

「さようなら」

二人の会話の後、隊士達が口々に別れの言葉を言う。

をして夏梨も隊士達に別れの言葉を言うと霊術院に向かつて走って行った。

（一兄待っててね、いつか必ず、そう遠くない日に現世に行くからね）

元気に駆け足で霊術院に向かう夏梨を見ながら一人の隊士が大事な事を思い出した。

「今、8月ですよね……。霊術院の入試試験は年に2回の4月と9月。一ヶ月以上もある……。」

「あっ、完つ全に忘れてた。ま、あいつならなんとかなるだろう。」と檜佐木。

「そうっすね」

檜佐木と隊士数名が夏梨と一緒に過ごしたのはほんの数週間だったがこいつなら何とかなるだろうと不思議にもそう思った。信頼ができた。

現世。

一護は今自分の部屋に居た。

夏梨が死んで五日。まだその事が信じられずにベットに横たわっていた。

石田、井上、チャドも初めの頃こそ慰めてくれていたのだが、一護の落ち込みぶりを見て、今何を言っても駄目だという石田の判断でここ3日くらい一護の所には来ていない。

しかし受け止められないのも無理は無い。今まで一緒に生活していた妹の一人が死んだのだ。

だから誰も一護の事はせめなかった。

尸魂界から現世に一護を送った時、冬獅郎は間近で一護の困惑した様子を見ていた事もあり心配していた。一護の様子が気になり冬獅郎は現世に行く事にした。もちろん、いない間にするべき仕事は終わらせて。

しかし、現世に行くためには許可が必要なため日番谷は今一番隊隊舎に来ていた。

「日番谷冬獅郎です。お時間をいただけませんか」

「入れ。」

「失礼します」

そう言いながら日番谷は扉を開けて総隊長のいる机を向いた。

「私用で現世に行きたいのですが、宜しいでしょうか」

「ふむ、駄目じゃ」

厳しい顔で言った…。ように見えたがすぐに笑う顔にかわる。

「…と普段なら言つのじゃが、今だ四十六室が回復しとらんため尸魂界の全ての決定権は儂にあるのじゃ。つまり今はそこまで尸魂界の頭も今は固くはない。行って来るが良い。」

「あ…ありがとうございます!」

日番谷はこれほどにも総隊長に全権が下りて来ている事をありがたく思った事はない。

「ならばすぐに行くがいいだろう。」

「はいでは今すぐ行ってきます。」

そう言って日番谷は瞬歩で穿界門まで行った。

進んだり（後書き）

更新遅くなつてすみません。

あともしかしたら気になつた人がいるかもしれませんが、夏梨の斬魂刀はと死後で斬魂刀が違います。

解放してない時

生前ー×（常時開放型だつたため始解していない時の斬魂刀の姿がどんな感じかわからない）

死後ー黄色と若竹色で編み込まれている柄。 鐔は四角い枠の中に2匹の龍が暴れ回つてゐるような感じ

始解状態

生前ー少し小さいが形は斬月と同じくらいで藤色と若竹色で編まれた布を巻いている。

死後ー？（まだ作中に出てきてません。どんなのが楽しみにしておいてください。）

こんな感じになっています。

感想待っています。

止まったり

日番谷が空座町の上空で穿界門から出るとすぐに一護の霊圧が感じられた。

「あの野郎、霊圧ぶらしやがって虚圏ウエコムンにひびいてるじゃねえか」
普段から多い眉間のシワをさらに増やしてつぶやいて一護の霊圧のする方へと走った。

「おい、黒崎、お前ちよつと来い」
ベッドでポーツとしていた一護は窓から声をかけられ飛び上がる。

「冬獅郎！お、お前、どうしてここに居るんだ？」

「そんなのどうでもいいだろ。着いて来いって言ってたんだ」
「どういう」

一護がまた聞こうとするのと窓に居た日番谷が瞬歩で消えた。一護は仕方なく代行証を手にして死神化して日番谷を追った。

日番谷を追って行くと浦原商店に着いた。

「冬獅郎、どうしてここに来たんだ？」

「いいから」

「どうすんだよ」

「あれだ」

「ん？」

日番谷が指を指した方を見ると見覚えのある黒い穴があった

ガルガンタ
「黒腔カクじゃねえか」

「そうだ。浦原に作れって頼んでおいたんだ。今から虚圏に行くぞ」
「なんでだよ？」

「あの戦いが終わって、藍染が消えたからといって破面が居なくな

つたわけじゃねえ。時々あいつらは暴走するから隊長格が討伐に行く事もあるくらいだ。それでも最近はだんだん数が減って来て虚圏に行く事も少なくなつた。だが、ここ数日は破面の暴走が目立つ。なんでか分かるか黒崎…。お前のせいだ。」

「…どうして俺の所為なんだよ」

日番谷はまったく自覚のない黒崎に呆れてため息をついた。

「夏梨が死んでからお前、霊圧乱し過ぎだ」

そこまで言われてやっと気づく一護

「そう…だったのか」

「分かつたらさっさと行くぞ」

「は？」

「体ならしだ」

またも頭にはてなマークを浮かべる一護。冬獅郎は面倒くさくなり「いいから着いて来い」と言つて黒腔に飛び込み、一護はまたそれをおつて飛び込んだ。

しばらく二人は黒腔おの中を無言で走り、虚圏に着いた。

そして着いてから10秒も経たないうちに一人の破面が一護と日番谷の前に現れた。

「よう、遊ぶのはひさしぶりだぜ」

破面はそう言うと刀を貸しから抜き、二人の方に走ってきた

冬獅郎は状況を読み取れず固まってしまった一護の背中をトンと叩いて言つた。

「任せたぞ」

「ちよつ、待て！」

そしてその一言を言い終わると日番谷は上空へ瞬歩で移動した。

そして冬獅郎が居なくなつた瞬間一護の上に破面の刀が振り下ろさ

れた。

「あん野郎……!!」

冬獅郎が上空に逃げたのと破面の所為でそれを文句を言いにいけないもどかしさで一護は大声で叫んだ。

しかし叫ぶだけでは殺られてしまうので一護は仕方なく破面に応戦する

相手は十刃エスパーダでないので1年前の一護なら簡単に倒せただろう。しかしその一年は大きく、体が鈍ってしまって倒すのに少しばかり時間がかかりそうな雰囲気である。

「月牙天衝!!」

一撃で倒そうと思いつきり攻撃する一護

「おっと危ねえ、擦っちまったじゃねえか」

(くそ、座標がさだまらねえ…。当たらねえ。こっになったら…!)

「卍解・天鎖斬月」

「うおっ、こいつ卍解ができんのか」

破面は一護が卍解ができる事を知り怯む。

そして一護は間髪入れずに攻撃

「月牙天衝!!」

今度は破面に直撃。

破面は消えていった。

戦闘が終わったのを見て日番谷が地面に下りて来た

「お前あんな倒すのに卍解するのか」

情けない奴だ。という顔で日番谷が一護を見上げている

「先に逃げて何言っただよ」

眉を引きつらせながら一護が言う

その様子を見てさらにため息を吐く

「本当分かってねえな。お前の場合はずっと悩んでるよりこっちの方が早いだろ」

「まあ、そうだな。悩んでるのは性に合わないかもな」

「それに夏梨が死んで動揺しているようだがよく考える。あいつは尸魂界に逝ったんだぞ？夏梨は現世で斬魂刀の夢を見る程霊圧が高いんだ。きつと死神になってお前ん所に会いに来るだろうよ」

「そうだな」

二人は虚圏から現世に戻る。

「じゃあ、俺は今日一日しか休暇がないからもう帰る。 解錠」

丸い障子だ現われる。穿界門だ。

「そうか。今回は迷惑かけたな。サンキユ、冬獅郎」

「冬獅郎じゃねえ日番谷隊長だ。」

そう言っただ番谷は障子の向こうに行った。

夏梨は今最高にショックを受けていた。

「なんで霊術院の入試が一ヶ月後なんだよー！ー！！これじゃあ死神になれないじゃん！」

それと同時になんであいつらはこの事教えてくれなかったんだ、と

いう怒りも。

あいつらというのは檜佐木達の事である。

夏梨が霊術院の前でブツブツ文句を言っていると隊長羽織のうえに桃色の着物を羽織った男と眼鏡をかけ、髪を一つにまとめている女が出て来た。

隊長である享楽春水とその副官、伊勢七緒だ。

この二人は霊術院に特別講師としてたまたまここに教えに来ていたのだ。

夏梨を見て享楽が言った。

「おやー、可愛い子だねえ。そう思わない？七緒ちゃん」

「まあ、それにかなり霊圧もあるようですね」

「…君、霊術院の入験受けに来たの？」

「そう。今その張り紙見て知っただけですけどそれって次の試験一ヶ月後なんですよ。」

「うん。そうだよ。入試に合格するために必要な事知ってるかい？」

「全然。」

「そうかい。もしかしてまだ死んでからあんまり経ってないの？」

「うん。こつち（尸魂界）に来たのは一週間くらい前」

享楽と七緒は目を見開いた。普通こんな早くここまで来れるものではないからだ。それでも享楽は夏梨にそれを察せられないように平然を保ち、また質問をした

「そかい、よく分かった。それじゃあ最後にもう一つ。死ぬ前はどこに住んでたかおぼえてる？あと尸魂界に来てから何地区に送られた？」

「生きてた時は空座町。んで、こつち来てからは北流魂街、八十地区の更木だ」

夏梨にとって空座町出身と言うのは誇りだったが、『生きてた時』と表現しなければならぬのはキツかった。一方、更木から来た、と言うのには躊躇いがあった。あそこはひどい地区だと自分で身をもって知っていたからだろう。

享楽と七緒はまたも驚いていた。あの藍染との戦いの舞台であった空座町出身で、しかも流魂街でも最低の更木出身なのだから。

「そうかい。答えてくれてありがとう。そうだ。いい事教えてあげるよ。この先に行くのと町の外れにでる。すると遠くの方に変わった家があるんだ。そこを訪ねてみなさい。きっとよくしてくれる。」

「ありがとう、助かった。これからどうしようかと思ってたの」

「ううん、気にしなくていいよ」

「あ、隊長大変です、時間が！」

「そんな時間なんてどうでもいいじゃない。七緒ちゃん、これから一緒に甘味処に行かない？」

「だめです。今時間がないって言ったじゃないですか。」

「え〜」

「駄々をこねないでください。行きますよ」

このまま行っちゃうのかな、と夏梨が思っていると享楽が振り返った。

「じゃ、そう言う事だからこれから頑張ってね、君」

「頑張ってください。あなた程の人なら将来、漕霊艇で会う事があるかもしれないですね」

「はい！」

夏梨は二人からの応援に笑顔で答えた。

止まったり（後書き）

ほんとあたしは更新が遅いですね。

これからは少なくとも一日に一話は書く事にします。

特徴的な家

「ここら辺かな？」

夏梨は享楽に言われた通り村はずれの所に来ていた。キヨロキヨロと辺りを見回していると

「あつ……」

大きな地面からでている両腕のオブジェを見つけた。どこからどう見ても変な家だ。しかもそのオブジェは『志波空鶴』というこれまた大きい布を掲げているのだ。

もし遊子が見たら喜ぶかもしれないが夏梨にとってその家に入るのは気が引けた。

「あんな家にあたしはこれから入るのか……」

と呟き、夏梨は？きつとあんな変なの作っちゃうから町中に住まわしてもらえないだけだ……？と頭の隅っこで考えていた。

突っ立っていてもどうしようもないので夏梨は仕方なくその家に近づいていった。

「すいませーん！誰かいますかー？」

夏梨は掲げられている布の下で声を張り上げて家に向かって言った。するとすぐに家の扉は開き、中から双子と見られるおじさんが二人出てきた。

「待てえい！！！」

「何者だ？貴様！」

「怪しい者であれば即刻立ち去ってもらおう。」

「何があるうとこの金彦（かねひこ）と銀彦（ぎんひこ）がこの家には通さぬ……！」
交互に息ぴったり言う金彦と銀彦。

夏梨は慌てて自己紹介をする。

「ま、待って、あたし黒崎夏梨っていうん……」
夏梨の言葉は金彦と銀彦によって途中で遮られる。

「「ええええええー!!」」

「「一護殿のご家族ですかー!!!!」」

声はもる。

「あ、そうだけど」

「すみません。そうだったとは」

「どうぞこちらへ」

「え、あ、うん、ありがとう」

夏梨は急に態度が変わった事に戸惑う。

あたしが黒崎つて名乗っただけでこんなに態度が変わるんて一兄は何を戸魂界でやったんだ？

しかし夏梨のそんな疑問はすぐに消えた。なぜなら、またもやこの家は変なで玄関に入るなり下り階段になっているのだ。どんな作りなのか気になる場所である。

階段を下り終えると金彦と銀彦はすぐ近くのある部屋の襖ふすまの前で止まった。

「空鶴殿、お客です。」

「おう、入れてやれ」

「はい」

襖は金彦と銀彦によって開けられ夏梨はその二人に前へ押し出される。

「ども、黒崎夏梨です。よろしく」

「よう、俺は志波空鶴。お前は一護の妹かなんかか？」

「ああ、そうだけど」

「ほー、おい、岩鷲！黒崎の妹が来たぞ」

空鶴が大きな声で呼ぶと夏梨が入って来た空鶴の目の前の襖とは別の空鶴の右側の襖が勢いよく開いた。

「本当か、姉ちゃん！！」

「おう」と空鶴は言いながら夏梨を指差す。

すると岩鷲は空鶴に指差された夏梨の方へ近づいて来た。

「お前が一護の妹か。一護の奴、ここ一年くらい元気にしてるか？俺は現世行かねえから分かんねえんだ。あ、いや、あいつの心配してんじゃなくて一護の調子が悪いと張り合いがねえからな。そう言えばお前名前は何てんだ？俺様は岩鷲ってんだ。ちなみに自称・『西流魂街の深紅の弾丸』にして、自称・『西流魂街の兄貴と呼ばれた人』 14年間連続ナンバ・ワン！！そして…」

「うるせえー！！！」空鶴はあまりにも岩鷲がペラペラと喋り続けるのでついにキレた。

そしてその怒鳴り声とともに夏梨と岩鷲の頭に激痛が走った。

空鶴が二人の頭を力一杯ゲンコツをいれたのだ。

夏梨は心の中でなんであたしまで…と思いつつも続く空鶴の説教を聞いた。

「いいか！ここは俺の家だ！勝手な事するなら出てってもらってから

な！！！」

空鶴の迫力と頭の激痛で涙目になりながら、こくッこくッこくッ、と凄いスピードで何度も頷く夏梨と岩鷲。

その二人の様子を見て空鶴はふう、とため息を吐いて自分の座布団に戻っていった。

夏梨は空鶴の隙をみて岩鷲に小声で話しかけた。

「おい、岩鷲、お前の姉ちゃんすごい怖いな」

「だろ」

「第一『俺の家』って空鶴さんが行ってたけど、お前もここに住んでんじゃないのか？」

「あ、いや、姉ちゃんが今この家の当主だからその場合俺がこの家から追い出されるって事に……」

「あー、あんたも大変だな。」

空鶴が振り向いたのでここで二人は会話をやめた。

「ところで夏梨、なんでここに来たんだ？」

空鶴がキセルをくわえながら聞いて来た。

「あ、うん。用事って言うんじゃない？あたしの事ここで一ヶ月くらい預かってくれない？霊術院の入試の直前の日まで。あたし、死神になりたいんだ」

「ふーん」

岩鷲はあーあ、と言う顔をしていて空鶴はを試すような顔をして冷たく返事をし、続けてこう言った。

「死神になる？お前がか？なめるなよ。そんな簡単になれると思うか。」
しかし夏梨は動揺した素振りは一切見せず、まっすぐな目で空鶴を見ていた。

「そんな簡単じゃないって事くらい分かってる。でも何なきゃなんないんだ」
と強い声で言う夏梨。

その夏梨の様子を見て空鶴は口の端をあげてニツと笑った。

「そうか、まあいいだろ、お前はここに置いといてやる。でも居候の身分だからな。この家の家事をやってる金彦と銀彦の手伝いをやれ。岩鷲、お前もだ。それと夏梨、家事が無くて暇なときは俺が鬼道を教えてやる。」

「えー、姉ちゃんなんで俺もなんだよ」と文句を言う岩鷲。しかし空鶴はそれを無視した。

「ありがとうございます！」

夏梨はここまで良くしてもらえとは思ってなかったし、時間が空いた時は鬼道を教えてもらえるのはとても有り難かった。

「おし、それじゃお前ら今から金彦と銀彦の夕飯作りの手伝いしてきな。」

「はいっ」

「本当かよ」

夏梨と岩鷲の二人の返事の態度は対照的だった。

特徴的な家（後書き）

本当すんません。

今から書いて今日のうちにもう1、2話更新します。
しばらくお待ちを。

夕飯（前書き）

夏梨が空鶴の家に居候し始めて数日後の話です。

夕飯

トントントン（包丁でネギを切る音）

ブクブクブク（水が沸騰する音）

ジャーラーツ（冷水で大量の蕎麦を冷やす音）

ジュツ（岩鷲がフライパンに触って火傷する音）

「あっちーラーツ」

「あーあ」

「てめつ、夏梨！！少しは心配しろ！！！」

「えーと、大丈夫ですか」

「棒読み過ぎだろ！」

「いや、だつてあんたさ、ここ数日金彦と銀彦の手伝い始めて何回へマした？井戸水を上げさせたら、したら自分が井戸ん中落ちるし、お風呂掃除させたら滑って顔面からスライディング。あと料理中の火傷なんて毎手で数えきれないし」

「…てんめえ凄いい勢いで人の事馬鹿にしゃがって」

「あの、夏梨殿、岩鷲殿？きちんとやってもらえますか？」

「ナベはひっくり返って中身なくなっていて、冷やしてた蕎麦は水の勢いですべて流れていって一本もザルに残っておらぬではないか…。」

「はっ」

冷や汗をかきながら二人はゆっくりと手元に視線を移す。

「？」

金彦と銀彦に言われてやつとその事態に気づいた岩鷲と夏梨。

夏梨の持っていたいたザルの中には金彦が言った通り蕎麦は一本も残っておらず、岩鷲の持っていたナベも金彦が言った通りひっくり返って蕎麦どころか水すら入っていない。

「また一から作り直さないといけないではないか！何時間かければ完成するか!？」

「岩鷲殿はもう少し行動を慎重に、夏梨殿は小さい事で興奮し過ぎではないか」

「……」

金彦と銀彦にもっともな事を言われて押し黙る二人。そしてここで金彦と銀彦は目を合わせて頷き合い、ある手を討つ事に同意した。

「ふー、あと10分で7時。早くしないと空鶴殿が腹を空かせて怒り狂ってしま…おっ！」
見事にハモリながら言う二人。確信犯である。この一言で何回助かったかわからない。

トントントントツ（もの凄い早さで夏梨がネギを切る音）

パタパタパタツ（もの凄い勢いで岩鷲が火をうちわで扇ぐ音）

ブクブクブクツ（あつという間に沸騰した水の音）

バチャバチャバチャツ（お湯の中に蕎麦を突っ込む音）

ジャー……ツ（一瞬でゆで上がった蕎麦をお湯からザルへ移し、

冷水で冷やす音）

ザツザツバツ（蕎麦の水をきり、それを皿に移しネギを盛る音）

「ふー、で、出来た」

「おう」

「夏梨殿、岩鷺殿…。まさか5分で出来るとは予想外…。」

「そうだな」

早く作ってもらったのを狙って金彦と銀彦は空鶴が怒る…と言ったのだがここまで早くできるとは思っていなかった。

「そんじゃ、食卓の方に持ってくか」

「そうだな」

「あ、飲み物！岩鷺、あたし蕎麦持つてくからあんたは飲み物いれて持つて来て」

「嫌だね。」

「なんでだよ。さっさとしないと空鶴姉ちゃんに怒られるじゃん」

「そう。姉ちゃんに怒られる。もし俺がお茶を入れてくれればきつと俺は7時には間に合わないだろう。そして怒られて…。そんなの絶対嫌だー！！それよこせ！俺が蕎麦運ぶー！！」

「嫌だ！あたしだって怒られんのは嫌だー！！」

言い合いになり蕎麦の乗ったお盆を引っぱり合う二人。
そして……

ガッチャーン

お盆はひっくり返りながら地面に向かって落ちていった。

「……」

青ざめていく二人。

「てめーら、夕飯まだかー？」

空鶴の声が聞こえて来る

「お、おおう、ちちちちよつと待っててくれ」

すごい動揺した声で岩鷲が空鶴に答える。

それに拍車をかけるように時計が夕飯の時間である7時を伝える鐘をならす。

夏梨と岩鷲の顔はさらに青くなり嫌な汗が止まらない。

金彦と銀彦はというと、二人の数メートル後ろであーあ、という顔をしている。

「おーい、なんかあったのかー？」

岩鷲の変な声をを不審に思ってたか、こっちに向かってペタペタという足音が聞こえてくる。

その足音が二人のいる調理場の入り口の襖の前で止まった。

「入るぞー」

その声はもはや二人にとって死刑宣告のようなものだった。

空鶴は調理場に入ると青ざめてピシッと立っている夏梨と岩鷲、それと床に落ちている蕎麦が目に入った。

そこで状況を把握した空鶴は怒鳴った。

「てめええらあああ！！なにしてんだあああ！！！！」

ゴンッ！

二人の恐れていたものが頭に打ち込まれる。

「「っ……」」

声にならない痛みが夏梨と岩鷲の頭に走る。

「これは今夜の飯だな。ふたりで喧嘩して落としたのか？」

「ごめん姉ちゃん!!その通りだ」

「うん、本当ごめん」

「夏梨の所為で……」

「岩鷲の所為で……」

「お前ら!! 晩ご飯落としたのはまだいい。でも自分のやった事を人の所為にして逃げるような腑抜けは許さねえ! 正直に謝らねえか!!」

2発目のゲンコツが二人の頭に叩き込まれた。

二人はその痛みに涙目になりながら空鶴の行った事を確かに悪かったかも、と考え直して素直に謝る事にした。

「ごめん、姉ちゃん。夕飯無くなっちゃった。夏梨も悪かったな」

「い、いや、こっちの方が悪かったな」

空鶴は満足したような顔をしてから岩鷲と夏梨に言った。

「今晚はうな井だ。本当は明日の昼にでも、と思ってたんだがな。仕方ない今日食べちまうか」

「「おう!!」」

一気に笑顔になる夏梨と岩鷲。

「ほら金彦、銀彦も来い」

「はい」

金彦と銀彦の表情も明るくなった。

夕飯（後書き）

夏梨の来た志波家でのちょっとした日常です。

鬼道と出発

「破道の三十三・蒼火墜！！」

ボンツ

「ほー、やるじゃねえか夏梨」
「まあな」

夏梨が志波家に来て八日が経った。雑用には慣れて時間に余裕ができたので空鶴に鬼道を教えてもらえる事になった。

（にしても、夜一と喜助と鉄裁はここまでお前を鍛えんのに2週間もかけなかったんだよな。三人がかりだとしても並みじゃねえ。まあ、こいつの呑み込みの早さも異常なんだろうが…。瞬歩に鬼道、斬魂刀とは…）と考える空鶴

「んじゃ縛道はどうなんだ？」

「あゝ、それは教えてもらってない。あの時はとりあえず虚を倒せるように力をつけて事で修行つけてもらってたから縛道とかより直接攻撃できるようなのを先に習ったんだよね。んで、そろそろ縛道も、つてとこであたしが死んじやってさ」

あはは、と笑いながら言う夏梨。

「あっそ、だったら縛道から教えっかな。まずは『縛道の1・塞』からだ」

「おう！」

「手は指を二本立てて、まあお前なら最初っから詠唱破棄でできっかな。適当なああの辺の木とか狙ってこう言え《縛道の一・塞》」

「わかった。縛道の一・塞！」

「うお?!」

適当な木と言われ夏梨の放った縛道の方向は、自分の舎弟と話していた岩鷲の方であった。急に手足が拘束されあゝ岩鷲は驚いて大きい声をだした。

「何しやがんだ!夏梨!!」

「いや、ごめん。まさか一発目から成功するとは思わなかったからな」

「縛道の練習してんなら俺じゃなく、木とか狙えよ!？」

「別に良くない縛道は破道と違って痛くないんだし」

「ブツ刺さる痛い縛道もあんだよ!お前そんな事も知らねえのかよ。だから馬鹿なんだよ」

「てめえ、人が下手に出て謝ってれば調子に乗りやがって!」

「ああん!?やんのか!」

「望む所だ!」

「うるせえええええ!!!!」

ボツカーン空鶴のゲンコツが二人の頭に落とされた。

「す、すみません」「

「わかつたら、岩鷲はどっか行け！夏梨は次の縛道いくぞ」

頭を擦りながら謝る岩鷲と夏梨、それを見下ろしながら怒鳴る空鶴、という様子は今や志波家では日常であった。

「姉ちゃん…実の弟にどっか行かって…ひどすぎじゃねえか…?」
と小声で呟きながら岩鷲は舎弟とイノシシに乗ってどこかに行ってしまった。

「それじゃあ夏梨、《縛道の四・這縄》って言いながら縛道の一みに指を二本立てるんだ」

「えっと、縛道の四・這縄」

夏梨が木に向かって撃った。すると木に黄色い霊子の縄が巻き付いた

「ふーん。これもできるな。でも次からは詠唱するぞ夏梨」

「おう」

「…とまあ今日はこんな感じだ。お前一護と違って霊圧操作がうまいんだな。詠唱ありとはいえ二十一まで完成 するとはな。てつきりもつと時間かかると思ったぜ。」

「あ、それ前にも誰かに言われた気がする」

「まあ、お前の兄貴はそういうのすげえ下手だったからな」

「一兄そんなに下手だったの？鬼道とか」

「それはもう…。鬼道の基本も出来なかったわ」

「ふーん」

夏梨はそんなこんなで志波家にいる間、順調に鬼道を憶えていった。

「それじゃあ夏梨、気をつけるよ」と空鶴
「おう」元気よく返事する夏梨

霊術院の入試まであと3日まで迫ってきたこの日、夏梨は空鶴の家を出発する事になった。

「ちょっと待てよ!!」

夏梨が行こうとした時、後ろから声が聞こえた。
声の主は岩鷲だった。

「姉ちゃん、俺、死神になる。勝手に決めてわりいけど、兄貴は死神になって幸せそうだった。俺も…」

「あー、もういい。行って来い。行って兄貴の見た景色を見て来い！」

「ありがとう！姉ちゃん！！」

「それじゃあ、岩鷲行くぞ。ここから急いで行かないと3日じゃ着かないんだかな？空鶴姉ちゃん、一ヶ月ありがとう。さようなら！」

「おう。…それじゃあ姉ちゃん、行って来る。」

「行って来い！！元気にやれよ岩鷲！夏梨！！」

試験

「夏梨、俺よく考えてみたら斬魂刀だせてねえから、まだ鬼道しか使えないじゃねえか」

「それがなんだよ？」

「斬魂刀なしで霊術院は入れんのか？」

「どうなんだろうな。あたしも詳しく知らないからさ」

「どうしよう。もし霊術院に入れなかったら姉ちゃんが…」

「そんな気にする事ないと思うけど。…あ、見えて来た。」

「お、あれか？」

「そ。あ、岩鷲、今何時？」

「え〜と、1時15分」

「ウソ！？ やばい急げ！！入試の開始時間は2時からだから！！」

「まじかよ」

目に見えてるとはいえ、かなり遠い真央霊術院までもの凄い速さで走った。

「ふあああ、今年の入院生はきつとつままないな。どいつもこいつも並みの貴族。」

パラパラと受験生リストをめくりながら男の死神が言った。

「そうね。面白そうなのがいないわ。」

今度は男の隣に座っていた女の死神が言う。

この二人は開放された霊術院の門のすぐそばで当日受験の受付をしているのだ。

基本入試の準備や警備をするのは十三隊に入隊してすぐの新人であるのでこの二人もそうである。

「大貴族もいなければ悪い地区から来た奴もいない。」

「まあ、これから来る子達に期待するとするわ。」

「でももう1時半だぜ?」

「もう誰も来ないかしらね」

そのとき、ドタドタドタ!!!

「はあ、はあ、はあ……」

黒髪の少女とゴツイ男が受付の方に駆け込んで来た。

「あのおく、大丈夫ですか？」

二人のあまりの息の上がりように声をかける受付をやっていた女死神が声をかける。

「あ、大、大丈夫。気に、しないで…はあ、はあ」
途切れ途切れに少女、夏梨が答える。

「受験しに来たんですか？それとも迷い込んだんですか？」
きつい口調で受付をやっていた男死神が言った。

「ここに来たら受験に決まってるっ！…はあ、はあ」
ゴツい男、岩鷲が言った。

「分かった。じゃあここに名前、出身地区を書いて」
男死神が差し出したのは受験票だ。

カリカリカリ…

「ん。書いたよ」

「書き終わったぜ」

「それでは急いで試験会場に向かってください。」

二人は女死神の指差した方に走って行った。

二人の姿が見えなくなり受付が落ち着いた頃、男死神が受験票を確認すると

「おい、あいつらすごいコンビだ。」

「なんで？」

「受験票見てみるよ。男の方は志波家の奴でもう一人は北流魂街・

更木出身だ」

「え、それ本当？」

「ウソな訳無いだろ」

「まあそうだけど。面白そうね」

「だろ？」

「皆さんご存知だと思いますが、真央霊術院の受験では筆記と実技があります。今年はずまず筆記試験から行います。30分後に解答用紙を集めます。では開始です!!」

ビラッ!!

アナウンスと同時に大勢の受験者が裏にしてあった問題用紙と解答用紙を表にする。

夏梨と岩鷲は何とか時間に間に合い、今まさにテストに取りかかっている所だ。

カリカリカリカリ……………ッ

字を書く音だけが会場に響く。

130分経過1

「はい、鉛筆を置いてください。解答用紙を前に持って来たら順に野外の演習場へ移動してください。」

夏梨はこんな集め方してたら絶対カンニングとかしてる奴がいるだろ…と思いつつ岩鷲の所へ行つた。

「おい、岩鷲」

「お、夏梨。テスト出来たか？」

「ん〜、まあまあかな。あんたは？」

「出来たぜ。夏梨よりは出来たな」

「いやいや、それはない。」

「そんな事があるんだな。だつてお前尸魂界来て一ヶ月とかだろ？」

「まあそうなんだけど、あたし現世で浦原さんに色々教えてもらつてるから」

「チツ…」

「今舌打ちしただろ！」

「してない。してない。」

「はい、実技の試験を受ける人はこっちに来てくださいーい」
10人くらいの死神が演習場で待っていた。

見た目からして新人ではない。

受験生の死神としての素質を見極めるテストだからだろう。

「ではこれから皆さんに五班に別れてもらいます。」

そう言つて死神達は受験生達を手際よく五班に分けた。

では一班はこっちに、二班はこっち、と班ごとに違う演習場に連れて行かれた。

夏梨と岩鷲は五班になったので一番近い演習場を使いえた。演習場は弓道をする道場に似ていた。

「これから皆さんに霊圧を手に込めて全力で撃って、向こうにある的を狙ってもらいます。えーとでは河村さん、撃ってください。」

「はい」

ふよふよふよ、ポン

一人目の人は小さい球が掌からでたものの、小さくてスピードもななく、的に当たる前に地面に落ちてしまった。

「次、神崎さん」

「はい」

流れ作業のように順番が夏梨達に近づいて来る。

「次、志波さん。」

「はい」

岩鷲は右手を前に出し、霊圧で作った球を打ち出した。すると形がきれいなのが的の真ん中に当たった。

他の受験生からすごいね、そうだね、といった会話が耳に入り、にやけ顔になる岩鷲。

「では最後に、黒崎さん」

「はい」

夏梨は前に出て両手を前に出し、ありったけの霊力をこめて撃った。するととても巨大な霊力の塊が出来て的はもちろん、演習場の屋根が吹っ飛んだ。

結果と掲示板

「えつと〜、大丈夫ですか〜」
夏梨の周りには崩れた演習場の瓦礫がれきが散乱し、5班の受験生も倒れていた。

「黒崎さん！何をしてくれてるのですか！〜」
一人結界に入って無事だった5班の実技監督をしていた死神が結界を外し、夏梨の方に近づいて来た。

「えっ！いや悪気はなかったんだ。ただ…」
「ただ？」

「いやなんでもない。っていうか、自分だけ結界を張って他の受験生を見捨てんなよ。」

「なっ…、演習場を壊した張本人が言うな」
「そりゃそうなんだけど…」

『なんだ?! 爆発音がしたぞ!!』

『こつちだの方だ』
野次馬が集まって来た。

「これは君がやったのかね？」

集まって来た人達をわけて一人の歳をとった死神が近づいてきて夏梨を見てそう言った。

瓦礫の中で立っているのは二人だけだからとても目立つのだ。

「はい。すみませんでした。」

「そうか。こっちに来なさい。」

「はい…。」

その死神に着いて行くと現世の学校で言う校長室の様な所につき、そこにはその年寄りの死神以外に3人がいた。

つまりその部屋の中には夏梨と死神が4人居るといふ事だ。

「ではあれは君一人でやって、悪気も無かったと？」

「そうです。」

「わかった、もういい。下がってくれ」

「はい」

ガチャンッ

夏梨は一礼して部屋を出た。

外に出ると岩鷲が壁に凭もたれて待っていた。

「よお」

「おっ、岩鷲」

「どうなった？」

「わかんない。でもきつと霊術院には入れないだろうな」

「何言つてんだ。？黒崎夏梨は入学決定だ？つて受験生とか霊術院の生徒の中で噂だぜ」

「は？なんでだよ」

「あのな、実技の試験じゃ霊力を見せつけてなんぼなんだよ。それでお前は演習場を壊す程の霊力を見せられたんだ。当たり前だろ。」

「そ、そっか」

「にやけんな。」

「いや、だって嬉しいじゃん」

「はいはい。いいご身分で」

受験生合否会議

「凄いですね。黒崎夏梨とかいう子は。」

「ええ、そうね。霊圧を放出しただけで演習場を壊してしまうんだもの。」

「それにあの子、腰に刀をさしてたぞ」

「斬魂刀かもしれないですね。霊圧があんなにあるんだしあり得ない事ではありません。」

「では、黒崎夏梨は当然合格でいいですね？」
若い衆が次々に言う。しかし、

「いや不合格だ。」

その会議の中で一番の権力を持つ人がそう言った。

「何ですか！？あれだけ死神としての素質があるのに」

「それでも黒崎夏梨の不合格は決定だ。」

「しかしっ……」

「五月蠅いぞ、不合格はもう決定なのだ。変わる事は無い。まあ、来期の受験でどうなるかはわからんがな」

「…わかりました。」

「受験から一週間後」

「ついに合格発表だな」

「そうだな」

「なんだ夏梨。その顔は」

「ちよつと緊張してきただけ。」

「そーかい」

「そう言う岩鷲こそ変な汗かいてるじゃん」

「これはさっきからあついからだ！」

「あつそ」

「お、あれだ。合格発表の掲示板だ。」

「あ、本当だ。」

無意識に早足で掲示板に向かう二人

「よし、自分の名前探すぞ。出席番号になってっから、えーとッ…」

志波岩鷲、志波岩鷲…志波岩鷲………」

「あ、待て、あたしも、黒崎夏梨…黒崎夏梨………」

「お、あつたぞ！志波岩鷲！！」

「……………」

「夏梨お前はど……………」

「…ない。」

「え？」

「…ない。あたしの名前……………不合格だ」

結果と掲示板（後書き）

短いですがご勘弁を。

実は私、来年度から受験生なんです。塾にも通っています。

なのでこれから更新が遅くなると思います。

でもこの「jump up」はまだまだ続きますので最後までお付き合ってください。

そして感想沢山ください。

存在の否定（前書き）

夏梨の視点で書いてみました。

……どうですか？

存在の否定

あたしは今、流魂界の一地区の端の方の崖に座っている。

さっきまで岩鷲が隣にいたけどあたしが一人にしてって頼んだんだ。あ、いや飛び降りとかそんなんじゃないよ？

そこまで思い詰めてないし

でも、早く死神になりたい。

大切な人達を護れるようになって、それで、一兄とか遊子とか親父とかにも会いたいな。

うーん、いつまでもここで悩んでらんない。

よし、空鶴姉ちゃんの所に行くかな。きつとあの人なら霊術院を卒業する以外に死神になる方法を知ってるかもしれないし。だってまだ9月なのに次の入試のある4月までなんて待ってらんないもん。

コンコンと戸を叩いて名前を呼ぶ

「金彦く、銀彦く？」

「はいはいッ」

勢いよく二人が飛び出して来た

「やや？夏梨殿」

「ささ、入ってください。」

「うんありがと。空鶴姉ちゃんいる？」

「確か居間にいた筈……」

「分かった。行ってみるね」

階段を駆け下りて居間へ向かう。

ガラリッ

襖を開けるといつも定位置に空鶴姉ちゃんは座っていた。

「よう、夏梨なんで帰って来た？」

初めの一言から喧嘩を売っているとしか考えられないような口ぶりだ。でもまあここで『夏梨、惜しかったな、次頑張ろう』とでも言われたら気味が悪いけどさ。

「違うんだ、聞いてくれ。ここに逃げ帰ってきたわけじゃないんだ」

「ほう、じゃ何しにきたんだ？」

「うん……。たしかに受験で落ちた。でもだからって死神になるのを諦める訳ない。」

「だろうな、諦めるとか言ったらぶん殴るところだ」

「あたしは少しでも早く死神になりたいんだ。そんな時に次の入試のある4月まで待つなんて時間がもったいないだけだ。そこで空鶴姉ちゃん、霊術院を卒業以外に死神になれる方法を知らないか？」

あたしの言葉を聞き終ると空鶴姉ちゃんは考えるそぶりをしてから「着いて来い」一言言って部屋を出て行ったからあたしは言われた通りについて行った。

着いた先は地下の小さい部屋だった。
そして気持ち悪い枠で固定された大きな画面が設置してある。

「ここ何の部屋？」

「待て、そろそろだ」

「？」

ビリビリ、ビヨン

変な音をたてて真つ黒だった画面が急に明るくなった。とつさに瞑つた目をゆっくり開き、画面を見ると、そこには久しぶりに見る面々の姿が映っていた。

「夜一さん、浦原さん、…親父、一兄」
「なんで？なんで皆が」

『驚いたじゃろ、夏梨。現世組からの通信じゃ』

「そりやもう…驚くよ」

『苦労だったンスよ？実はこれ尸魂界では現世との無許可の通信は違法なものなんスよ。だからひっそりその機械をそっちに送るのも大変大変』

「そうだんだんだ」

『夏梨、元気にやってるみたいだな。安心した』

「うん。元気。一兄も元気そうだね」

『まあな』

『カリン、父さん髪切ったんだけど気づいた？気づいた？』

「馬鹿親父、調子に乗るんじゃ…、ため、何でそんなカツコしてんだ…！？それ死覇装じゃん！！」

『そうぜ、似合ってるだろ？』

「そんな事聞いてんじゃねえんだよ」

『そうなんだよな、それが今回の問題の種なんだ』

ん？よく意味がわかんない。

「問題つてなんの事？親父」

「そこからはアタシが説明します。」

浦原さんが話に割り込んで来た

「一護サンは前の戦いで知っています。一心サンは死神です。そしてあなた方の母親である真咲サンは人間、つまり生きた魂魄です。その二人の子である一護サン、夏梨サン、遊子サンの三人は尸魂界ではその存在そのものが否定されるっす。しかし一護サンは大反逆の藍染惣右介を倒して世界を救った。もし一護サンが居なかったら世界は終わっていた」

浦原は一息ついてからまた話し始めた

「そこで四十六室も考えを改めました。しかしあの人達はどうにも頭が固くていけない。こう結論をだしました。？尸魂界にとって黒崎一護の存在は有益と判断し、その存在を認めるとする。しかし、その妹にあたる黒崎夏梨、黒崎遊子の存在は無益と判断。その存在を…否定する！？とね」

「！？ それつて…」

「そうっす。四十六室は夏梨サン達の生きている事を否定した。つまり、あなたと遊子サンを殺すという判断をしたんっす。既に四十六室は隠密機動に二人の暗殺命令を出しました。そして遊子サンは…連中に攫われてしまいました…。本当にすみません。」

「喜助一人の責任ではない。俺もあと少し早く気づく事が出来れば

…」

親父と一兄はさつきから下を向いてこつちを見ようとしなない。うそだ。遊子が連れていかれたなんてッ

「もう、…こ、殺されたの？」
ダメだ。声が震える。

『まだじゃ。完全に魂魄を消失させるためには双極が必要じゃ。しかし今、双極はルキア奪還の時に一護が破壊してくれたおかげでまだ修復しきれておらんのだ。まだ直すのに時間がかかる。短くとも3ヶ月は固いじゃろ』

「そうか…。」

『夏梨サン、確かにあなたは確かに強くなった。しかし今のあなたの力では平隊員は倒せても隊長クラスは疎か、上位席官を倒すのさえキツイでしょう。そこであなたには卍解と虚化を習得してもらいます。』

『浦原さん、それは…』

『そうだ。浦原。卍解はまだしも虚化は…』

『ではお二人は夏梨サンを死なせたいんですか？』

『……っ』

「待て、あたしの意見は無視か」
急に卍解とか虚化とか言われても頭がついていかない。

『無視しているわけじゃない。アタシらの方が今の状態を把握して

いる。…それだけの事だ。』

…浦原さんの言う通りだ。あたしは状態が呑み込めてない。

「そうだな。…でもあたしが強くなないと遊子を助けに行くどころかあたしまで捕まっちゃうんだろ？だったら強くなってやる。どんな方法を使ってもだ！」

『そうっすか。では本人の覚悟が決まった所で具体的な話をします。これから夏梨サンには志波家の穿開門を使って現世に来てもらいます。その後の事はこっちに来てからって事で。一護サン、一心サンは今から2ヶ月各自で修行してください。今出来る事はこれくらいっす。』

『そう言う事じゃ。夏梨、またの』

バチンッ

「そう言う事だ夏梨。この家にある穿開門に案内する」

「分かった。連れてって」

「ここだぜ。飛び込みな。きつと浦原商店の地下の勉強部屋につく筈だ」

「うん、行って来る」

飛び込むと拘流の壁がどんどん追いかけて来た。でも必死に走ってなんとか出口に駆け込んだ。

「おお、夏梨サンなかなか早かったつスね」

「あんたが急げって言ったんじゃないか」

「そうでした。」

「それでこれからどうすんだ？」

「虚化を出来るようになってもらいます。」

存在の否定（後書き）

？気持ち悪い枠で固定された画面？というのはbleachのコミックス・25巻の222話（アニメ・126話）で出て来るアレです。

あと今回は状態説明というか、ナレーション？というかお話を夏梨視点で書いてみました。

読みやすいか、どうか、感想をもらえると助かります。

進む方向

「で、虚化はいいけど、あたしどうすればいいの？」

「はい。今からあなたにはアタシが崩玉に似た成分で開発したこれを使って完全に虚化しきってもらおうっス」

そう言いながら浦原さんはポケットからビー玉のような物を取り出してあたしに見せた。

「わかった」

「言っときますけど…、甘く見ちゃいけませんよ？」

浦原さんの声は低く、冷たくて驚いた

「…はい」

「では行ってきましたください」

「え？どこに？」

「ヴァイザード仮面の軍勢とこへです」

浦原さんは『ここへ行ってください』と言ってあたしにヴァイザードが居る場所を記した地図と例のビー玉の様な崩玉擬きと一封の封筒を渡された。その封筒と崩玉擬きを平子真子と言う人に届けてほしいらしい。

「ふう、えーっとここら辺だと思っただけど」
そう呟いてすぐ、死神のような虚のような判断しづらい霊圧を感じた。

ゆっくりとその霊圧を感じる方へ向かい、その先にあった一つの廃墟のような建物に入る。

その建物の中には人が数人がいて

床はどの階も壊れていて最上階の天井までぬけていた

「ほう、お前が夏梨かい。オレは平子真子や。真子でええで」

「あたしのこと知ってたんだ？あんた達何者？」

「なんや喜助の奴説明してないのんか」

「うん」

「オレらはな、これや」

そう言い、真子は右手に仮面を出した。

「そつか。浦原さんの言ってた虚化を教えてくれる奴ってのはあんなたたの事か」

「そや。喜助も面倒な事押し付けてきたもんやなア」

（本当に面倒くさそうな顔で…。そんなんじゃ気分も悪くなるってんだ。）

夏梨は元からよって眉間のシワをさらに多くする。

「…まあいいや、これ浦原さんから」

？「ゴッ」

夏梨は浦原から言われた通りに封筒と崩玉擬きを真子の顔めがけて勢いよく投げ渡す

「うおっ。危ないやんけ！」
顔面ギリギリでキャッチする真子

「チっ」

「今舌打ちしたやろ！？こっち来い！大人の怖さ教え…」

「ムキになんな真子。相手はガキだぞ？」

左眉に一つ、耳に三つのピアスした銀髪の男が止めた

「まあ、せやな」

一息ついてまたしゃべり始めようとした真子をひよ里が蹴り飛ばした。

「夏梨、うちがメンバー紹介したる。まずコイツがラブでこっちがローズんであれがりサ、あのタンクトップが拳西で、その隣が白丸いのがハッチ。皆呼び捨てでええ。」

指をさして順々に名前をいってくひよ里。

「んで？あんたの名前は？」

「うちの事はひよ里さんて呼べ」

「うん、わった。えっとたしかラブ、ローズ、リサ、んで拳西、白ハッチ、最後にひよ里」

「ひよ里さんや！」

「えー、だつて見た目はあたしと同じくらいでしょ？」

「見た目はそうやったとしてもうちはあんたの十倍は生きてんで？」
「！」

「それくらいにしい、ひよ里、夏梨。手紙は読んだで。事情があんのなら仕方ないわア。虚化の仕方教えたる」

「本当か」

「ああ、でも、なめるんやないで」
「分かつてるつもりだ」
「そーかい」

ギツ、ギツ、ギツ、ギツ…

猿柿 「あー、なんかする事ないな。シンジ、なんかおもしろい事喋れ」

平子 「どんな無茶ブリや。暇や言っんなら寝てればええ」

ローズ「ラヴ、それ僕の買った漫画だよな？」

羅武 「お前これ読んだか？面白れえぞ。太郎が小太郎を倒してそんで」

ローズ「君、先に読んで内容言うのやめてくれない？」

白 「けんせーい、おはぎちょうだい。まわりにきな粉ついたやつ」

拳西 「今ある訳ねえだろ。自分で買って来い」

白 「えー、拳西のケチっ」

ハッチ「すいません。リサさん、背中かいてもらえなにですか？手が届かなくて…」

リサ 「今は無理や。忙しいのや。他の奴に頼みイ」

ハッチ「あなたエロ本読んでもだけじゃないですか…」

リサ 「ブーブー言うな。おじさんがそんな言っても可愛くもなんともあらへんよ」

ギツ、ギツ、ギツ、ギツ……

夏梨「ホッ、ホッ、ホッ、ホッ……つてなんだよこれ！」
猿「ええから黙ってこいどれ」

夏梨ははこの一日ボロい機械をこいでる。ひよ里達が『手始めにこれをこげ』と指示したからである。

「このボロい感じの機械なんだ？！手作り丸出しなんだよっ！」

「それはスーパーひよ里ウォーカーっていうんや！憶えとけ！！それにボロくなんかないわハゲ」

「別にハゲてないし」

「ひよ里の言う通りや。ごちゃごちゃ言わんと黙ってそのポンコツひよ里ウォーカーブツ倒れるまでこいでみイ」

「なんでこんなんやってんのかくらいわかってるよ。これ、触れるだけですごく霊圧を消費する作りになってる。それで何日間こぎ続けられるかあたしの最大霊力料はかるためにやってんでしょ？これくらいなら5、6日はこぎ続けられる。あたしは早く力つけなちやいけねえんだ。虚化の仕方教えてくれよ」

「だめや。お前の霊圧は今、霊圧が成長途中で、そんで、ものすつごい不安定なんや。低い時の夏梨の霊圧はひどいもんやけど高い時はお前の兄貴より上や。だからそのポンコツひよ里ウォーカーを使って平均値出そうとしとんのや。だからしばらくはおとなしくそれこぎ」

「シンジ！スーパーや！スーパーひよ里ウォーカー！！」

「…わあたよ」

「ほんじゃ、さっさとこぎイ」

志波家

「姉ちゃん！夏梨の家がヤベエって本当か?!」

「…ああ。そうだが、なんでお前が帰ってきてんだ?」

「当たり前だろう！仲間がピンチなのに一人でのほほんとしてられるかよ?!」

「確かにそうだな。でも、オレがそう言う意味じゃねえ。お前靈術院やめたな?」

「もう連絡きてんのかよ…。やめたのは『夏梨がやめたから俺も』とかそういうわけじゃなくて、ただ、冷静に考えたらよお。今は姉ちゃんが当主やってるけどそのうちは俺が当主になるんだ。数週間だけが靈術院に通って思ったんだ。もし死神になったらきつと俺はきつと…ここには帰ってこない気がすんだよ。」

「……」

「そんなのは姉ちゃんに甘え過ぎってやつだ。だから、帰って来た」

「あの人…、お前は人を甘く見過ぎだ!!」『帰ってこない気がする?！だったら生き延びれるくらい強くなりやい!』『甘え過ぎ』?! 確かにそうかもしれないねえ!でも弟つてのは姉ちゃんに甘えてもいいんだよ!!!」

「…悪い、姉ちゃん」

「でも今回の事はオレの事を思つての事だったんならオレが頼りねえつてのも原因の一つだ。だから、もういい」

「……………悪い、姉ちゃん…ありがとう」

黒崎家

「親父、なんでだよ。…やっぱり納得できねえ。存在しちゃう行けな
いってなんだよ」

「…当たり前だ。だから助けに行くんだろっ？」

「そうなんだけどよ」

「そうだけど、なんだ？」

「今の護艇十三隊の隊長格クラスの連中とは…俺の中では既に仲
間のつもりだったんだ…」

「ああ、そうだな。でもその考えは間違ってないぜ？おめえの妹が
消されると知って、朽木ルキア、阿散井恋次、浮竹十四郎、日番谷
冬獅郎、他7名の隊長格および、上位席官者がその取り消しを申し
出たんだが…中には総隊長に刀を向けた者もいたらしく、」

「！！…そうだったのか。だめだな俺一瞬喜んじまった。って事は
向けた奴はただじゃ済まねえな。」

「だろっな」

「はあ、情けねえ。」

「そんな事言ってもどうにもなんねえんだ。そう思い詰めるな」

「そんな事言ったってな…。無理だろ」

「これから父さんと一緒に修行に行かないか？」

「ん？まあそうだな。」

「よし、決まりだ。着いて来い。父さんの秘密の修行場だ」

修行の場へ

「ホッ、ホッ、ホッ…」

汗だくになりながらもスーパーひよ里ウォーカーをこぎ続ける夏梨

「夏梨の奴、思ったたよりやるやんけ…。そう思うやろ？ひよ里

「こんなん、まだまだや。」

「…そうかい」

ニヤけながら横目でひよ里をみる真子。

でもまあ、夏梨の霊力は予想以上や。このまま完全に虚化しても内なる虚を倒せるかもしれん。せやけど、今でも霊圧の上下は激しいままや。確実に倒せるとは言いきれへん。

「ふあゝあ…、面倒なこつちやなア」

真子は小さく呟いた。

外に出て携帯電話に耳をあてる

「もしもしイ、平子やけど」

「あつれゝ、平子サン。なんスか？」

「夏梨の事や」

「ほお、その事ですか」

かけた先は喜助の所だ

「…はつきり言ってアイツの潜在能力は…一護より上かもしれへん。せやけど霊圧がまったく安定せえへんのや。今の夏梨の実力じや、虚に呑み込まれる。…あいつに虚化を教えんのは反対や」

「まあ、難しいかもしれなかつスね」

「どうしてもや、って言うんやつたら、先にお前の方で夏梨に正解習得させエ」

『確かにそうなんスよね。：わかりました。では切りのいい所で夏梨サンをこっちに帰してください。』

「ほな、そうさせてもらうで？ピッ

携帯を切り、真子が中に戻りあたりを見回すと夏梨が床でバテていた。

「あれ、もうバテたんか。もう少しいけると思ったんやけどなア」

「そうか？あれでも頑張った方やないの？」とりサ

「こんなもんや思っとったわ」とひよ里

「まあ、八日もこぎ続けたんや。出来たほうやろ。んじゃ、オレが夏梨を喜助んとこ届けるわ」

「なんでや？」

「なんでって、ひよ里、見ててわからんか？こいつの霊圧不安定すぎるやろ。このままやったら虚に呑み込まれるやろが」

「そうか」

「そや、喜助んとこ行ってくるわ」

夏梨を脇に抱えると真子は瞬歩でその場から消えた。

「喜助、連れてきたでえ」

「早かったスねえ。もう少しかかると思ってたんスけどね」

「残念やったな」

「やだなあ、それじゃあアタシが夏梨サンをあなたに押し付けてたみたいじゃないっスか」

「は、あ、そんなんどうでもいいわ。さっさとコイツ受け取りイ」

「あれ？なんで夏梨サン気イ失ってるんです？」

「こいつ、ポンコツひよ里ウォーカーを倒れるまで粘り強くこいどつたんや。んゝ七日間くらいやったな」

「はゝ、なるほど、だから夏梨サンの霊圧今こんなに弱いんスね」

「そーや。…せやからさつさとコイツ受け取りイ」

「わかりましたよ。鉄裁ゝ、雨ゝ、ジン太ゝ。夏梨サンを布団に寝かせてあげてください。」

「…はい」「」

店の中の方に向かって呼びかけると、三人の返事が帰って来た

雨とジン太が布団の用意をし、鉄裁が夏梨を肩にせおい、部屋に連れてった。

「ほなな」

「はい」

真子は喜助に背を向け、数歩あるくとまた瞬歩で消えた。

「じゃ、アタシはアタシの仕事をしますかね」

「ん……あつたか……え……ぎゃー……」

「お、いい反応ですな」

夏梨が目を覚ますと、目の前に鉄裁の顔があった。

「は、はなして！！っていうか苦しい！」

力いっぱい鉄裁の腕を押しつけようとする夏梨

「これはすみません」

苦しがつてるのに気づき、よっこらせと立ち上がる鉄哉

「ふー、…あれ、そういえば何であたしここにいるんだ？」

「それはですね…」

鉄哉が答えようとした時、部屋の襖が開き放たれた。

「か、夏梨ちゃん、目え覚めたんだ！良かった〜」

雨が駆け寄って来た。本当に心配していたようで少し涙目になっている。

「そんな心配する事ないぜ？ほら、霊力が少し弱まってるだけさ」

「そっか。あ、そうだお粥持って来るね。あと夏梨ちゃん用の義骸もね。」

「あたし用のなんてあるの?!あ、それともう一つ、浦原さんよんでもらっていい？」

「うん。ちょっと待っててね」

「お〜、夏梨さん、目覚めたんですか。」

「おう。そんでなんであたしここに居るの？」

「それはですね。……（事情説明中）……というわけっス」

「ふーん、簡単に言うとなあたしの力が足んかったって事…か」

「そう言う事っスね」

「わかった。じゃあ虚化習得する前に霊圧とか、剣術とかの基本を鍛え直せばいいってわけか」

「そうっスね」

「それなら今から勉強部屋貸してくれよ。修行すっからさ」

「待つてください。今更なんっすけど夏梨サンに虚化は良くない。それこそ力のために大反逆をした監染と変わりがない。…そこで！今や破面がほとんど消え、安全になりつつある虚圏で修行つてのはどうです？」

「！それいいかも」

「それでは既に黒腔の用意はしてあるので地下へ行きましょう。」

「我が右手に境界を繋ぐ石　我が左手に実存を縛る刃　黒髪の羊飼
い　縛り首の椅子叢雲来たりて我・月を打つ」
？ゴブア

「これが黒腔っす。中に道はないんで霊子で足場を固めて進んでください暗い方へ向かえば虚圏に着きます。」

「わかった。んじゃ行って来る」

夏梨が黒腔へ向かって飛び上がるうとした時、

「ちよつと待つてくれ。」

声を聞いて夏梨が振り返ると

雨竜、織姫、チャドが立っていた。どうやら声を上げたのは雨竜らしい。

「浦原さん！夏梨ちゃん一人で虚圏に行かせるなんて何考えてるんだ？！」

「そうですね。まだ12歳でしょ？」

「…ムウ」

雨竜と織姫、チャドと順々に喜助を責めるように言う。

三人の顔を見て面倒くさそうな顔をする喜助。

「しかしですねえ、夏梨サンの修行なんスよ？甘やかしちゃ…」

「虚を倒す手伝いをするという訳じゃない。怪我したら井上さんうあ僕が直してあげたりできる。茶渡君だっていたら心強いはずだ。」

「ダメなんスよ、あつちで夏梨さんに頼れる物を作ってしまうのは命の危機を味わって力が開花する事が多い。でもそこに誰かが助けてくれるだろう、という甘えがあつては台無しっス」

喜助に最もな事を言われ、押し黙る面々。自分たちもその事は十分理解できていたから。甘えは…死につながると。

「…わかった。」

最初に意見をのんだのは以外にもチャドだった。

「でも、井上だけは虚圏に行かせてやってくれないか」

「え？」

チャドの予想していなかった否定に少し目を大きくする喜助。そして指名された織姫も驚いて抜けた声をだす。しかし喜助はすぐに目を薄くし聞き返す。

「なぜです？」

「井上には回復がある。あつちで役にたつ筈だ。より多くの虚を倒すためにも回復時間の短縮は必要だろう」

普段はそうそう喋らないチャドが喜助の説得に試みる。

「確かに…分かりました。着いていってもいいでしょう。どうっスか？夏梨サン」

「そりゃ、その方が修行としてもいいし、心強い…！」

「うん。あたし着いていくわ」

「ありがとう、織姫ちゃん」

「では、二人とも黒腔に飛び込んでください。」

「はい！」

「おう！」

「気をつけてね」

「…む」

「うん、じゃあね」

チャドと兩竜の見送りの言葉に夏梨は元気よく返事してそれに合わせて織姫も手をふった。

「うお…、あッ 結構難しい……」

「夏梨ちゃん大丈夫？前変わるうか？」

「いや、平気」

普段、鬼道を三十番代まで使いこなす、つまり、霊圧操作がうまい夏梨が足場をきれいに作れていないのだ。

「うっ」

「やっぱ変わるよ。ほら、ね？」

そう言いながら夏梨を追い抜かす

ピッカーッ

「うおっ…：すごーきれい！」

「あはは、これくらいなら」

「最初っから織姫ちゃんにやってもらえば良かった。あたしが作ったのあんなボロボロ、恥ずかしい」

「そんな事無いよ」

そんな事を話をしていると出口らしいものが見えて来た

「ん…？あれだ。虚圏」

「そうみたいだね」

「よしっ」

「うん」

？ダンッ

「…え？う、ああー！っ！！」

虚圏で着いた先は空中だった。

？ドンッ

着地した下は砂であったため傷こそ出来なかったが、かなり高い所から落ちたのだ痛い。

「っ…」

「いたた」

「あ、織姫ちゃん大丈夫？」

「うん、だいじょう…?!」

「うお、空から降って来たでヤンス」

「さて、キミ達は何者だ？」

「面白そうっス。一緒に遊ぶっス！」

修行の場へ（後書き）

さてさて、どうですか？

今話の最後にでてきたあのキャラが次回から大活躍？！

って感じですよ。

虚圏と虚

「あんたらだ」

「ネルちゃん!!」

「? なんスか?」

「あたしだよ、井上織姫!」

「おお、織姫っスか!久しぶりっスね」

「え? 織姫ちゃんコイツらと知り合いなのか?」

「うん、あたしが虚圏に連れ去られた時黒崎君に懐いててあたしを助けに来てくれたの。それでね、黒崎君が敵に倒されかけた時にネルちゃんが綺麗な大人に変身して敵を倒すの。でね、実はネルちゃんは十刃の3番目の人で、すごい強くて……」

「織姫……ッ、今のネルはその事を覚えていないんだっ、秘密なんですよ!!」

ベラベラと喋っていた織姫の口を抑えペッシエが小声で叫ぶ。

そして織姫がコクコク頷いたのを見て手を離す

「も、もう思い出したんじゃないの?」

ペッシエとドントチャツカと織姫は丸くなって小声で話す

「いや、あの後ネルは子供の姿に戻ると、十刃だった記憶はもちろん、一護を助けようとノイトラと戦った事さえわすれてたでヤンス」

「そうだったんだ。」

「そうなんだ。だからその事はあんみつに……」

「……」

ペッシエの言った寒い、滑りまくりのギャグに静ける二人。

「そ、それを言うなら内密でしょー、ペ、ペツシエ君だったら…もう、あははは」

「あはあはー…でヤンス…」

困った顔で棒読みな返事をする

「参ったな〜こんなにウケるとは〜！次のネタも考えなくてはな！」

思いつきりウケたと思ってしまったペツシエは調子に乗りまくってる

「ねえ、なんの話してんの？」

「そうっす。ネルただけ仲間はずれにするなんてひどいっす！」

「いや、仲間はずれの事じゃなくてさ、織姫ちゃんが攫われたとか一兄が助けるとか…」

「あゝ、ごめん、それあたしの想像。ほ、ほら、あたし多いでしょ？そういうの。だから気にしないで、ね？」

「ふーん、まあいいや」

織姫の言った事を信じた感じた様な顔ではないが深く問いつめようとしないう夏梨の様子を見て一息つく。

「それは、後でいい。でも、アンタらが誰かは教えてもらおうか？」
夏梨はペツシエ、ドントチャツカ、ネルを指してビシツと言う

「おお、よくぞ聞いてくれた。私の名前はペツシエ・ガティーシエだ。そしてネルの兄だ」

「そしてその兄のドントチャツカ・ピルスタンでヤンス」

「んで、ネルが一番下のネル・トゥッス」

「…いくぞ……せーの」（小声）

「 怪盗ネルドンペツツ！

グレート・デザート・ブラザーズ （同時に言った）

ウエコムンド最強三兄弟

「揃ってねえし。何言ってるかわかんねえし…」

「何をう?! ネル! ペッシェ! 前々から? グレート・デザート・ブラザーズ? がいいと言ってるではないかー!!」

「ネルの意見は無視っスか! 三人の名前を入れて怪盗っていうカッコイイ? 怪盗ネルドンペ? がいいっス!!」

「三兄弟は絶対必要でヤンス〜!」

「あのさ、そういうのはまた今度勝手にやっててくれ。んでさ、あたし達こっちに修行しに来たんだけど、いい場所知らない?」

「そうっスね〜、憶えてねっス。あ! そうっスネルたつと一緒に来るといいスよ〜、ネルたつは虚圏をフラフラしてるっスからきつといい場所も見つけられるっス」

「うーん、分かった、そうしよう」

「え、夏梨ちゃん、いいの?」

「うん。だってここで修行にいい場所なんて織姫ちゃんもあんまり知らないだろ? だったらコイツらに着いてった方が効率いいんじゃないかねえかって…な?」

「確かにそうかもね」

「だろ?」

「って事でよろしくな。ネル」

「ま、まあいいっスけど…」

照れ隠しのような素振りをするネル。

「サンキュ、助かるぜ」

「うん。ありがとね」

「じゃあ、バワバワに乗るっス」

？バワバワに乗って移動中！

「えー、夏梨は一護の妹だったっすか！！」

「うん、言っただけだったっけ？」

「言っただけで、夏梨！ひ、秘密にするなんてひどいじゃないか！友達だと思っただけにー！！」

「始めて会ってからまだ10分くらいしか経ってないんだから知らない事があったら当たり前じゃねえか？」

「そんな事はないでヤンス！オラの顔を見て怖がらないなんていい人に決まってるでヤンス」

「うん、そこまで言われると悪い気しないけどさ」

すぐに仲良くなってしまった夏梨達を見て織姫は微笑ましく思い、笑っていた。

そんな気の抜ける話をしていると、ずっと遠くから2、30くらいの虚がこっちに向かってい走っているのが目に入った。まだ目には豆粒の大きさでしか見えないからそう近くはないが、5分もしないでぶつかる事になりそうだ。

「おっと、やっと来やがったか！あたしがいくぜ？」

「も、もちろんだ、任せたぞ……」

「そ、それでヤンス、夏梨の修行の邪魔しないように遠くに行ってるでヤンス……」

「そうっす、遠くで応援してるっす……」

「夏梨ちゃん一人で大丈夫？」

「おう、元々あたしの修行でこっちに来たんだ。助けなんているわけないだろ？」

「そっか、そうだね。じゃ、頑張って」

「任せとけ……！」

バワバワは4人を乗せて夏梨から少し離れた岩陰に隠れた

ギャオーッ！

ウバオーッ！！

「ふう……」

背中にかけてる刀に手をかける。

？チャキ

そして構えた。

しかし、違和感

夏梨はその違和感の原因がすぐ分かった

鐔こそ変わってないものの、柄の色が黄色と黄緑から冷たい青に変化した。

背中に背負っていたからいつ変わったのかは分かんないけど、鞘の色も違う。

そんな事で悩んでいられるのも一瞬。気がつくとも目の前に虚の爪が見えていた。

？シュッ

反応が遅れ、頬から血が垂れる。

（っち、一旦刀の事は置いてこう。今は虚を倒す事に集中しなきゃ、一匹一匹は雑魚だけど、この数じゃ危ない）

ジュサッ

グサッ

ジャバーッ！

瞬歩を使いながら確実に数を倒していく。

（よし、この調子でいけば…）

その油断がいけなかった

?ドシヤーツ!

背中に鋭い痛みが走る

「ちツくしよ…!なめんな!」

?ブシヤツ

すかさず振り返って虚の仮面に向かって刀を振り上げ、切り返す。

「はあ、はあ、はあ…」

(やばいな、息が上がってきやがった。虚の数は…ざっと数えて10匹くらいか…ふう)

「一気に行くぜっ」

?ズシヤーツ!

?ブシヤツ

?シユツ

ーガツ

「残り3匹…。」

?クラツ

「う、わ…」

(視界が…歪んで…クソツ)

?ジュザツ

(あと一匹…)

?ブシヤーツ!!

「終わった…！織姫ちゃん！勝てたよ！！」
ネル達の隠れていた岩の方を見て叫ぶ夏梨

「うん！良かった、よく頑張ったね。でも見ててヒヤヒヤしちゃっ
よ」

「えへへ」

？フラッ

「わわ、大丈夫？」

「大丈夫だけど、まあ手当よろしく…」
倒れはしなかったが夏梨の足下は不安定だ

「あ、すぐするね。それじゃあそこ座って…うん、じゃ、」
『双天帰
盾 私は拒絶する』

？キユウウウ

「ちょっと待っててね、きつとすぐだから。」
「うん。」

「カツリンーッ」

「うごほっ！？」

「大丈夫っスか？」

「うん、心配すんなよ」

すごい速さで飛びかかって来たネルは心配そうな顔をしていた

「そうっスか、良かった」

「ああ」

「じゃあ、遊ぶっス！」

「え?!」

「来るっス、これから夏梨に無限追跡ごっこの仕方を教えてあげるっスウ！」

「や、待て。それは傷が治ってからだ」

「さっき大丈夫って言ったじゃないっスか」

「ほら、あと数分だから、な？」

「今すぐっス〜!!」

「あーっッ」

「止めてあげてネルちゃん、そんな事したら」

「ネルの言う通りだぞ、子供は風の子、元気の子!!さて遊ぶぞ〜」

「楽しいでヤンス」

「あ、割れるっ、割れるっ、まだ治療中だから!舜桜とあやめ叩かないであげて!!」

「こら、ネル、ペッシェもやめッ…」

これから夏梨は滯霊艇に乗り込むまでの一ヶ月、おかしな虚三匹と織姫と共に虚圏で過ごす。

十番隊隊舎・執務室

「くそっ、まだ行方が分からないのか」

「早く見つけないと大変ですね」

「ああ」

「黒崎、夏梨…どこ行ったんだ」

「……隊長……」

虚圏と虚（後書き）

本当申し訳ないです。

こんな遅い更新…

もし良ければ感想をください。

この作品を他人から見るとどう見えてるか知りたいです。

命令と考え（前書き）

織姫が夏梨の怪我を手当し始めた直後からです

命令と考え

織 「何も居ないね」

ペ 「そうだな、平和だな」

ド 「眠くなるでヤンス」

ネ 「Z、Z」

夏 「……」

ふんふわした空気のバワバワの背中の上では夏梨だけが眉をピクピクさせて下を向いている。

つまり、キレル寸前なのだ

ペ 「ふあ、あ、私も寝るとするかな、ドントチャツカも寝るのはどうだ？」

ど 「そうでヤンスね、あつたかくて丁度寝るには良い時間帯でヤンス」

織 「あ、そんなところで寝たら落ちちゃうよ？」

夏 「……（ムカツ）こうらああああ！何この和み様？！ネル達は仕方ないかもしれないけど織姫ちゃんまでコイツらのバカに流されてんじゃない！」

織 「ごめんね、なんかさ、ついつい」

夏 「はあ…本当にさあ、あたしはこつち修行に来たんだよ。だから一匹でも多くの虚を倒して強くななきゃ行けない訳。分かる？」

「それより、そこまでして夏梨が強くなりたいのはなんでっすか？」

目を覚ましたネルが聞いて来たので、夏梨は話聞けよ…とツツコン

でからため息をついてから話し始めた。

「助けたいのはあたしの双子の姉の遊子。…尸魂界には堅苦しい掟がいっぱいあって、その中に魂魄と生きてる人間は関係を深く持つては行けない、みたいなのもあんの。あたしの親は死神と人間だから…あたし達は…存在しちゃう行けない存在なんだ。」

「そんなのおかしいス！生きるかどうかなんて自由じゃないっすか！！」

いつの間にかペッシェもドントチャッカもネルも話しを真面目に聞いていた。

「あたしもおかしいと思うけどそういう掟だから。まあそれで、遊子が捕まっちゃって助けに行くために瀕霊艇に乗り込む事にした。んで今のあたしの力じゃ足りないからそのための修行にここに来た」

「夏梨ちゃん、助けたいのは凄く分かる。でもね？自分の事も考えなきゃダメだよ。今はまだ身体の傷が沢山残ってるでしょ。そのままじゃ遊子ちゃん助けに行く前に夏梨ちゃんが倒れちゃうよ」

「それでも早くつよ…」

「それもわかってる。でも焦っちゃダメ。…ね？」

ニコツと笑って優しく夏梨を落ち着かせる織姫。

「…わかった。」

「うん、それとごめんね？あたしの“拒絶”がうまく出来なくて（なんか、あの傷というより夏梨ちゃん自体からあたしの“拒絶”が反発されるような…こんな感覚どっかで…どこだっけ？）

「うっん、怪我できたのはあたしが弱いからなんだし」

「あ…」

「うおっ、びっくりした、何？」

「いや、夏梨ちゃん、虚との戦闘始める直前おかしくなかった？何かに気を取られてたっというか…」

「そうだ！すっかり忘れてた。これ見て」
そう言っつて背中から斬魂刀を下ろす。

「この斬魂刀、藍月らんげつっつて言っただけど、今は鞘ちんぱつが紺で柄が青でしょ？」

「そうだね」

「でも前見た時、だから昨日までは鞘は黒で柄は黄色と黄緑だったんだ」

「確かにおかしいね」真剣に頭を悩ます織姫。しかしネル達は言っつてる意味がわからないようで「はあ？」という顔をしている

「んーと、斬魂刀つてのは本人の魂から形が出来てるらしいんだ。

だからその形が、色がコロコロ変わるのはいり得ないんだ」

「そう言っつもんなのか？」とペツシエ

「そういっつもんなんだよ」

「そうっつつか、わかんないっつスね」

「そうだな、難しそうだな」

「なんででヤンスかね？」

「そうだ！夏梨ちゃん！浦原さんに聞いてみよう！」

「そうだな、少し先になるけど帰っつてから聞くとするかな」

「うっつん、今聞っくの」

「え？でもここからじゃ連絡とれないし…」

「じゃあーん！！」

誇らしげにポケットから何か取り出し掲げてみせる織姫

「何それ？伝令神機みたい」

『えつとですね、夏梨サン、虚とはもう戦闘はしましたか？』
「一応」

『ではその戦闘中その伝令神機はどこにありました？』

「ん、織姫ちゃんのポケットの中だから、あたしから50メートルくらい離れたところかな」

『そうですか、ではその時のもので良いっす。』

「だからどうやって送るのかわかんないだよ」

『霊圧記録はあなた達が黒腔を通ってる時からずっと録ってあります。って事はもちろん戦闘中のモノも。つまり夏梨サンの霊圧が一番が上昇してるところをメールに添付して送ってくれば良いっす』

「これメール機能とかあんのかよ」

『はい、ではメール待ってるんで』

「あたしに代わってもらっていい？」

夏梨が電話を切るうとした時、横から織姫が言った

「あ、うん。浦原さん、織姫ちゃんに代わる」

『井上サンっすか？はい、わかりました。』

「…もしもし、代わりました」

『なんスか？』

織姫は伝令神機を受け取ってから夏梨から、さりげなく距離をとった

「あの、夏梨ちゃんって虚化とか、できるんですか？」

『いや、それはできないっすけど、何かあったんスか？』

「傷の？拒絶？がうまくできないんです。まるで…虚化した黒崎君みたいなの…」

『虚化ですか…、鋭いですね。実は夏梨サンは七日ほど仮面の軍勢の皆さんの所で霊圧保持の訓練をしてたんす。きつとその時、虚の霊圧が身体に染み込んだんすね。でも、一応調べときますよ』

「おはよー……」

「あ、夏梨ちゃん起きた」

「あれ、みんな起きてたの？」

「まだネルちゃんは寝てるけどね」

「へー…あ、そうだ。昨日織姫ちゃんが電話してる時に思ってたんだけど、あの伝令神機つてやつは伝令神機なんだから虚のいる位置とかわかるんじゃない？」

「あ、そうだね、分かるかも……」

カチカチと伝令神機をいじくる織姫。

「ん、わかった……あー、分かんないや良かったかも……」

「ん？どういうこと？」

ヒョイツと画面を覗き込むと夏梨達の位置を示す記号の周りには虚を示す記号がぐるりと囲んでいた。数はおよそ50。

「げっ……」

「うおう、これは凄いでヤンス。あと5分でもすればここに来るでヤンス」

またまた織姫の持っている伝令神機を覗き込みながらドントチャツカが言う

「ドントチャツカ…、感心してる場合かよ。っていつか朝っぱらからなんなんだよー」

「ねえ夏梨ちゃん、今の怪我であの数はキツイでしょ？今回だけはあたしも加勢するよ」

「大丈夫…。でも、まあ危なくなったら、…その時はよろしく。あとネルは寝てるみたいだから、起こさないであげて」
ニツと笑って見せる

「分かったよ。気をつけてね、夏梨ちゃん」
「もちろん」

? チャキ

夏梨は刀を抜き、きじに来るであろう虚を待ち構えた

瀨霊艇・隊主会議

「事態は火急である！！黒崎夏梨を捕らえよ。…なお、この決定に不満のある者も多いだろう。儂かて納得した訳ではない。しかしこれは先日から本格的に始動し始めた四十六室の命令じゃ、反乱分子は反乱者のいる隊以外のすべての隊を使い、これを制圧するものとする！！」
一通りの事を重國が言い終わるとしばらくの沈黙がその場に流れ、重國は目を薄く開けて各隊長の顔を確認した。そして重い声で会議を終了させた。

「これにて解散」

それぞれの隊長がいろいろな想いを抱えながら一番隊舎をあとにし

た。

隊長達は副隊長集会が終り、隊首会が終わるのを待っていた副官を連れて隊舎に帰る。

十番隊

「隊首会でそんな決定が？」

「ああ、納得いかねえ。総隊長の言ってた事はようするに、各隊同士を監視し合うって事だろ？」

「そう言う事でしょうね」

「きつとあいつらはここに乗り込んで来るだろう、そのときは…」

6番隊

「つくそ、一護のヤツどこ行ってんだ。隊長、俺はこの命令に従う気はない。自分で決めて、自分で動く。」

「…好きにするが良い」

十三番隊

「は、やっと平穩が戻って来たと思ってたのにな。こんな事になるとは」

「つかの間でしたね」(小椿)

「朽木、井上に続いて妹さんまで…。あんなに頑張っているんなモノを護って、取り返して…なのに、なんでこうも…」

「日常を取り戻すためにどれだけ苦労しなきゃなんないんでしょうね?…彼」(清音)

「ああ」

八番隊

「こりやまた厄介なことになったねえ。どうしようか、七緒ちゃん」
「…隊長、自分で決めた事しかやらないじゃないですか」

四番隊

「では隊長はもし黒崎一護、夏梨が乗り込んで来た場合はどうするんですか？」

「たとえ侵入者が来ても私たちのする事に変わりはないでしょう？
怪我人を治療するだけです」

「はい」

二番隊

「たいちょう、どうするんすか？」

「どうするも何も命令だ。言われた通りにする他無いだろう」
「…そうっすね」

一番隊

「隊長…」

「確かに、今回の命令は少々難しいものじゃった。そして、護艇十三隊の席官以上の者にとってはかなり厳しいじゃろうな、しかし、仕方あるまい四十六室からの命令に儂らの意思は考慮されるものではない」

「はい」

浦原商店

「夜一サン、一心サン達がどこへ行ったか知ってますか？」
「知らんわ」

「そうつスカ、修行しにどこまで行ってしまったんでしようねえ」
「喜助」

「はい？」

「儂はこれから家に帰る。」

「え、本当ですか？百年ぶりくらいじゃないっスカ？あの平子サン達の事件以来帰ってないんでしよう？」

「ああ、そうじゃな」

「良い態度で迎えて貰えるとは……」

「あの家での儂の立場は良くはないじやろつが、何かできるかもしれん。」

「そうつスカ、それなら気をつけてくださいね」

？
シユッ

夜一は瞬歩で浦原商店から去った。

命令と考え（後書き）

感想をお願いします。

ターゲット（前書き）

夏梨VS虚です。

ターゲット

織姫、ペッシェ、ドントチャツカは寝ているネルを連れて近くにあった本当に小さい洞窟に入り込み、息をひそめていた。ちなみにバワバワは大きすぎて洞窟には入りきれないのでドントチャツカがネルを起こさないように静かに、腹に入れた。

夏梨は織姫たちが洞窟に入りきつたのを確認すると頭をまわし始めた。

（それにしても50匹…、ちょっと多すぎじゃないか？昨日20匹できたところだったのに…
なんか…）

「親玉…！」

たどり着いた答えが思わず口から出た。

そう、偶然で二日連続こんな数の虚が来る筈が無い。この霊圧の虚に50匹もまとまって攻めてくる程の知能がある筈が無い。
どこかで指示を出している親玉がいるのだ！

考えているうちに夏梨を取り囲む虚はすぐ近くまで迫って来ていた。
あと半径18m、15m、11m、8m…
それでも目をつぶって動かない夏梨の様子に虚らはいいい気になって彼らの武器である爪や牙、腕を7匹が一齐に振り上げる。
その瞬間、キツと目を開けてその場から瞬歩で虚の円の一番外側へと移動した。

夏梨に向かって攻撃をしようとした円の中心の虚たちは、目の前から夏梨が消えた事で混乱していて動きが遅くなっている。

一方夏梨の瞬歩で移動した先である円の外側にいる虚は夏梨が後ろにきた事に気づいていない。これはチャンスとばかりに後ろから虚に斬り掛かる夏梨。

「うおおおおー!!」

? ジャキーン、シュバ、ズシャアアア

夏梨は一気に8匹も斬る捨てる事に成功した。しかし、50匹のうち8匹斬っただけではあまり相手にとって痛手にはならない

(悪いな、普段なら後ろから斬り掛かるなんて卑怯な手は使わないんだけど、今回は場合が場合だ。でも今の攻撃であたしの場所がはつきり分かれた。もう不意打ちは通じない。さて、どうするかな…?)

『『バウアアアア』』

虚たちが雄叫びを上げながら、また夏梨を囲もうとする。

しかしまたそんな事をされると厄介だ。今度は策略なしで真つすぐ戦うことにした。

「ツシャアアアア」

夏梨も叫びながら虚を迎え撃つ。

? カキイイインツ!

虚の爪と夏梨の斬魂刀がぶつかり高い音が鳴る

(こいつ、重い…)

虚が全体重を斬魂刀にかけてくる。夏梨は潰れそうになる。

「う、やばい…」

そんな時、夏梨の背中に鈍い痛みが走った。
「うぐ?!」

虚が夏梨の背中を腕で強く叩いたのだ。

(くそッ! どうすれば?...このままじゃ.....そうだ! 藍月!!)
頭に浮かんだ一つの光。

(藍月: 藍月、藍月藍月藍月!! 答えてくれ! おいつ!)
答えはな返ってこない

(...: そうだ、藍月だけに頼りきっちゃだめだ。自分でなんとかしなきゃ!)

? ガシャーン

夏梨は霊力をあげて斬魂刀で上にかつていた虚を投げ飛ばす。

「ウオオオオオ!!!」

? ... 夏梨... ?

? ... 藍月! ?

夏梨が虚に攻撃されそうになった瞬間、いつの間にか藍月のいる、斬魂刀の世界にいた。

? ... その覚悟が必要だったのだ?

? ? ! ?

? ... また怯むのか? 怖いかな??

？そんなわけない！今もこうして虚と戦ってるんじゃないか！？

？……そうか？心ではまだ怯えてるだろう？虚を斬る事に、躊躇いを感じているんだろう？？

？そんな筈無いだろ？！虚は斬魂刀で斬ると尸魂界に送られて幸せに……？

？………？

？…ああ、虚ういは………？

？……まあいい。お前はそのある事を心のどこかに引つ掛けていただろう。そんなもので儂を使えると思っっているのか?!？

？分かってる、分かってるんだ。そんな事！藍月おまえの色がころころ変わるのもそういうあたしの心の揺れが関係してんだろ？なんとなく気づいてんだよ、でも……？

？……それが駄目だと言っている！ほれ見ろ、虚がお前に攻撃しようとしているぞ!!!？

精神世界に入って止まっていた時間が急に動き出したのだ。何で急に？夏梨の頭には疑問が浮いたが、そんな事を気にしていられる程の時間はなく、虚と応戦していると頭に藍月の声が響いて来た。

？……怖いかな？斬るのは……？

？…怖くなんか、無い？

？――ああ、そうだな？

虚に応戦しながらも、続けて藍月の問いかけに答える。

？ふう、もう覚悟なんてのはとつくのとうに決まってるんだよ！大事なものを、護るってな！！？

？――分かってるではないか？

？当たり前だろ？？

？――やつとか…叫べ！さすれば儂が？

「切り裂け、藍月！！」

始解した藍月は斬月と同じ形だが、大きさは夏梨の体格のせいかな月より大きく見え、色は少し黒っぽかった。しかし、月の光に反射して鋭く、赤く、光っていた

『バオオオオオ』

夏梨の霊圧が上がった事によって虚らは2、3歩引き下がる。

「月牙…天衝！！」

一気に虚は9匹も吹き飛んだ

（よし、もう一発）

「月牙天衝！」

うまく撃つ事はできたが、まだかなりの数が残ってしまった。

（くそっ、この技、思ったより霊圧を喰いやがる。これ以上はキツ

いな。あと2、3発が限界だ。最初の1発目は霊圧の上がりに驚いて沢山倒せたけど仕方ない、こつからは威力も下がるだろうし)

チャキ:

刀を構え直す。

?ガンツ!

虚が勢いよく夏梨に体当たりをして来たのを斬魂刀で受け止めたが、この虚は皮膚が硬いらしく、それだけでは血は出なかった。

しかし夏梨にとってそんな事は問題ではなかった。

それどころか、口の端をあげて勝機を見たかのように笑った。

そして、虚らはまたもや斬魂刀で虚と押し合いをしていて両手が塞がっている夏梨の背中に攻撃しようわらわらと何匹もが夏梨のそばに集まって来て攻撃しようとしてきた。

それが、夏梨の狙いだった。

(よしっこの距離なら)

「月牙天衝!!」

夏梨の周りが白く光り、周りにいた虚はその攻撃、月牙天衝をもろにくらった。

「さーて、あと15、6匹か」

(もう一回!)

「月牙天衝!」

?ドオンン、ドツカアアアン

斬魂刀を2回振り、連続で虚に撃つ

あと10匹。

（連続で撃つてもこんなもんか…最後の一回でもあと2匹倒せるかどうか…）

「月牙…」

力を目一杯斬魂刀にこめる。

「…天衝!!!」

?ドオオオオオン

やはり推測通り、倒せたのはわずか2匹。しかしさっきまで一遍に8匹近くを倒せたのが奇跡だったくらいなのだから、この状況でさえなければ、これでも喜んで良い結果なのだが…

まだ6匹残っているのだ

しかも、この虚らの1匹1匹の力は恐れる程も無いのだが、1匹相手していると後ろからもう1匹が攻撃をしてくるからタチが悪い

夏梨は飛び上がり、1匹の虚に的を絞る。そして思いっきり振り下ろした

?カキイイイン、ブシャアア

虚は腕で受け止めたが夏梨はさらに体重をかけ、斬魂刀でそれを切り落とした。そしてもう一斬り

「ヴオオオオオ！」

斬られた虚は叫びながら地面に手をつく

しかしまだ動けたようで、とどめを刺しに来た夏梨の脚を斬りつけたのだ

夏梨は油断してたため思わぬ反撃に目を見開く
よろけそうになったが、ぐっと踏みとどまり、

?ズバツ

手をついているその虚に背中からとどめを刺した

そして夏梨は1匹倒し終わると目先をすぐ横にいる虚に移し、刀を横に大きく振る

すると刀はするりと虚の腹の位置に入り込み、その身体を二つに分けた。

?ブシャアアアア

「はぁ、はぁ、」

夏梨の息は上がってしまった。脚からは血が流れていて背中内出血を起こしているのかズキズキと痛む。

この状況を立て直すため、夏梨は瞬歩で一旦上空に退避した。

残すところあと4匹。幸い空を飛べる虚は残っていないよう得上空は安全だ。

血はとどまる事を知らない。鬼道で直そうというのが夏梨の頭をよぎったが、まだ完璧に治療できないし、治癒の類いの鬼道は失敗すると傷は悪化してしまう。それにそもそも今の霊力ではそれすらやれるかどうかすら怪しい

「…ふう」

血は今でも止まらないが息が落ち着いたのでを確認し、上から虚の様子をみてる

1匹は何か濁点のついた声で叫び、走り回る

1匹は怪我をしているようであまり動きが見られない
1匹は自分の身体についた血をなめていて
1匹は四つ足で夏梨の方を見上げていた

数秒、そんな様子を観察していると、なにか様子がおかしい
それぞれが自由な行動をとりだしたのだ

穴を掘っていたり、小さい虚を襲って食べ出したり。

(何でだ?)

そのまま様子を見続けていると、虚はそれぞれ、ばらばらの方向へと帰って行ってしまった

(どういうことだ?)

そこに最初夏梨の考えていたことがつながつた。

(そうか、あの虚たちは親玉に操られていただけ。最初にあたしが居た場所と今いる場所ではかなりの距離がある。きつとあたしと戦ってるうちにその親玉の縄張りから出ちゃったんだ!)
ちらっと地上を見ると、織姫たちが手を振っているのが見えた

夏梨は手を振り返して地上に降りる。

「よく頑張ったね、無事で良かった」

「そうだな夏梨、頑張った方なのではないか?ま、私ほどではないがな、わはははは」

「よおペッシェ、すごい上から目線だな、おい」

織姫は心配してくれていたが、ペッシェはいつもの調子である。

「んーッ、なんスか〜うるさいッスね〜」

目をこすりながらネルが起きようとする。

「っいっ」

「ド、ドントチャツカ、あの岩陰でバワバワを出すんだ。時間稼ぎは私がするー！」（小声）

「わ、わかったでヤンス！」（小声）

ダ、ダ、ダ、ダ、とドントチャツカは走って岩陰へと消えた

「あれ〜、ペツシエッスか」

「そうだ、ペツシエだ、ベロベロばあ」

「大丈夫ッスか？」

「あ、ああ、私は全然大丈夫だぞ？いつもからこんな感じだぞ？やつだなあ〜あつははっはっはー」

変な汗をかきながらネルの気を引こうとするペツシエ。それを置いて織姫は夏梨に目を移す。

「…あつ、夏梨ちゃんすごい血イでてる！」

「うん、そうなんだけどそれよりも背中の方が痛いかも…」

「どれ？見せて…うわ、ひどい…！」

「まあね、直してもらっていい？」

「もちろん、急いで直すね」

「よろしく」

「うん、じゃ、いくよ？双天帰盾…私は拒絶する？」

ーキユウウウン

（やっぱり、直しにくい…）

「ごめん、直しにくい？」

「え？そ、そんなことないよ」

「そう？顔が険しかったからさっ」

「大丈夫、あと1、2時間したらきつと全部治ってるよ」

「1、2時間で…」

「それも大丈夫、今までの戦いで長い時間の治療には慣れてるから…そうなんだ」

夏梨は時々感じる。織姫に対してだけではない、チャド、石田、そして一護と自分の間にある溝を。

藍染との戦いにおいて前線で戦った人達、ましてや世界のすべてを背負った兄とでは夏梨とはそれは比べ物にならないくらいの差があるのは当然なのに

それが夏梨には寂しく、辛く、とても悔しく感じたのだ。

「はい、治った」

「お、本当だ。傷の跡は無いし背中の色だってもうきれいさっぱり」
「ども、ども」

「そにに結局1時間ちよつとしかかかんかったじゃん」

「まあね」

「ふう…、あ、そうだ。戦ってる時に思ったんだ。最後の4匹が勝手に散ってったの見てた？」

「うん、見てたけど…」

「それで、考えたんだけどー考え説明ー」

「ああ、確かそうかも。それだったらあんないっぱいの虚が攻めて来た事も納得がいくし…」

バワバワを出し終えて落ち着いたドントチャツカとペツシエが話に入ってくる。そしてさらりとすごい情報を口にしたのだ。

「確かこの辺には破面の生き残りがいたな」

「そうでヤンス、すごい強いのが…」

「ええーッ！！そうだったのかよ、そう言う事ははじめに言っとけよ！」

「うん、大事な事だからね」

「いや、知ってるものかと」

「知ってるわけないだろ？！あたし達はここに二日前に来たばつかなんだから！」

「そ、そんな威張るんじゃない！教えてくださいだろっ！！」

「威張ってないし、第一なんでそんな場所を通ってんだよ?!」

「いや、修行とか言ってたからな、こついう場所が良いかと…な、な？ドントチャツカ」

「そうでヤンス」

「いいわけないだろうがああ！」

「か、夏梨ちゃんやめて、ペツシエ君があ」

「どついう事っスか？」

ネルは必死に口答えるペツシエ。そのペツシエに襲いかかろうとしている夏梨、そしてそれを止めようとしている織姫、ついていけないドントチャツカ、その様子にその4人から数メートル離れた所で眺めながら首を傾げていた。

ターゲット（後書き）

まず、すみません！

戦闘の様子を書くのは結構難しく、当初考えていたものより軽くさせていただきました。

藍月を始解させたい、というのがありまして今回はこういう感じになりました。どうだったでしょうか？感想お待ちしています。

再会

静霊艇・

「遊子殿、夕食をお持ちしました」

「ありがとうございます…でも今食欲ないから…そこに置いていただきます」

「はっ、では失礼します」

キイイイ、パタン

扉はゆっくりと閉じられ　　の中は再び薄暗くなる。

「尸魂界ってお腹空かないのかなあ」

ぼそりと呟いた遊子の声はやせていた

お腹がすかないのも尸魂界に来ただけが理由ではないだろう。やはりこの環境にある。

外の光は数10cmの隙間からだけ

言葉を交わすのも護衛の兵士の人がご飯を運んでくれるときだけ

何より辛いのはする事が何も無いと言うこと

暇がいやというわけじゃない

でも、何も考えてない時に思い出すのは家族の顔だから

何かすることがあれば紛らわすことが少しはできたかもしれない。

でもここではただ、ぼんやり過ごす以外、何もすることが無いのだ

初めこそは足掻いたりもした

兵士に喋りかけ、説得しようともしてみた

でも、その返答はいつも固く冷たい掟の内容を長々と聞かされるののみ心が、凍えかけていた

（お父さん、お兄ちゃん…夏梨ちゃん…会いたいよう…）

空を見ても、座っただけでも、寝ようとしても、頭に3人の顔が浮かび、声が聞こえてくる気がする。そして大粒の涙が目からこぼれ落ちるのだ。声を押し殺しながら、泣くのだ。

扉の外で護衛をしてる兵士にもその音は聞こえる。

護衛の仕事し受けない自分たちに教えてもらえるものではないからわからない。

なぜこんな女の子を閉じ込めているのか。

哀れだと思わない事も無い。むしろ

今すぐここから出してやりたいと思う。

でもできない。深入りしてはいけない。

命令は絶対だから

四楓院家・門前

夜一は重い足取りでたどり着いた家の門についた。初めは裏門から入ろうという事も考えていたのだが、百年以上も姿をくらましていた当主がいきなり屋敷の中に現れたとなれば大騒ぎになるだろう。ならば堂々と正面の門から入ったほうがすんなり行けるのではないかとこの結論でこちら側へやって来た。

久しぶりに見る自分の家の門はとて大きく見えた。

その門の前には二人の門番が立っており、夜一に気づくや否や深くお辞儀をした。

夜一はその態度に驚いた。

なぜなら夜一はこの家を裏切ったと同等のことをしたのだ。気持ちよく迎え入れてくれる筈がない

一瞬で色々な考えが回るが門番の声ではっとする。

「夜一様、お帰りになられたのですか。今門を開けますのでしばしお待ちを」

「ああ、すまぬな」

きいい、と音を立てながら大きな門が開く

「どうぞ入ってください」

「ありがとうございます」

「はっ」

建物は大きな平屋で一見古くとも床はミシとも言わず縁側の手すりにも埃も見当たらない。とても良く手入れが行き届いている

とんとんとん、と足音を鳴らしながら屋敷の奥へと進む。

その途中、数人の使用人とすれ違った。そして皆、夜一に笑顔で声をかけてくるのだ

思っていたのと違う反応でまたもや驚いたが、そんな事に気を取られてる時間がない。夜一の頭には他のある事でいっぱいだった

ある事とは、今向かっている先にいる人物。実質的に今の四楓院家をまとめあげている、夜一の姉の所。

名は千棘ちとげ

彼女に会うからだ

彼女はもう既に他の家に嫁いだのだが、夜一が消えてからは四楓院家に戻って来たのだ。

夜一もそのことは風の噂で聞いていた

一番奥の襖の前に着き、一息ついて手を襖に掛ける。開けようと
したその一瞬前

「夜一?…」

中から若い女、千棘の声が聞こえた

「はい。今、帰ってまいりました」

「そう…入って」

今度こそ音を立てないようにそつと襖を開けた

「姉上」

「夜一…」

沈黙に耐えられず夜一が口を開こうとすると、千棘に遮られた

「どうだったの?この百年」

「…楽しいものばかりではなかったのじゃが、無かった方が良かった
たちは思いませぬ…」

「そう、それは良かったわね」

会話だけを聞いていると優しい姉であり、口元も微笑んでいる。

しかし目は笑っていないかった

その顔に夜一は嫌な汗をかき

「でもねえ周りの事も考えないといけないわよ?どれだけ私たちに
迷惑かけたと思ってるの?」

千棘の言う?私たち?というのは使用人たちの事を含んでいって
いるのだろう

そう言う人なのだ。本来、身分も何も気にしない優しい人柄である
し…

しかし、だからこそ人に迷惑をかけてしまった人には容赦なかった

「……………」

夜一がめずらしく大人しく黙っている

「黙っていたらいいとでも思ってるの？」

「その、反省しておる……」

「あら、聞こえないわよ？」

「す、すまなかつた！」

「……ふう……、まあいいわ。今回はこれくらいにしておいてあげる。堅苦しいのはここまでよ、でも喜助が帰って来たらもっとキツく言うてあげないとね。あの子があゝの反乱の原拠を作ったみたいだし」

話に一区切りがつき、千棘はお茶を少し飲み、また話し始めた

「で、今度はきちんと話してよ。何で百年前、急にいなくなったの？」

「それはじゃな……」

夜一はほっとした表情で語り始めた。

崩玉のこと、バアイザードのこと、失踪していた訳を

「……そうだったの…… 大変だったわね。でも少しくらい相談してくれてもいいのに」

「すまぬ、時間がなかったのな」

「それじゃ今夜は宴会よ。夜一が帰って来たから」

「おおっ！」

「調理場にそう伝えてくるわ」

「いや、儂が行く。今まで散々迷惑かけたのじゃ。これくらいは……の？」

「……わかった。よろしくね」

「任せるのじゃ」

今度こそ千棘は優しく笑った。妹の成長を喜ぶように。

どこか寂しげに……

「くあく、うまいのう」

「そうね、眠くなつて来ちゃったわ」

宴会は四楓院家のおおきな中庭で使用人も含め行われた。

もう飲み始めてから3時間程経った頃

千棘は夜一の横で寝てしまった

夜一は気になつていた事を聞くために近くにいた、酒を飲んでいた使用人のところへ行つた。

「のう、儂がなんで百年間おらんかったのか知っておるか？」

「ええ、知つてますよ。どこだか遠くの方へ遠征に行つておられたのしょう？」

「…?!」

驚いた。誰かによつて夜一が失踪していたのではなく、遠征へ行つていた事になつている

このあと潰れてない何人かにも聞いたが同じ答えが返つて来た。

最後に夜一が最後にその事を尋ねたのは吉原よしはらという使用人の所だった。彼は夜一が幼かった頃から四楓院家において、今や使用人の責任者となつているらしい。

「吉原、儂がなんで百年間ここにおらんかったのか知っておるか？」

「遠くへ遠征に行つていた…」

やはりこいつもか、と思つた。が

「…という事になつております」

「どういふことじゃ？」

「千棘様です。あなたが失踪してしまつたと聞き、千棘様はすぐに

嫁いだ家からすぐに四楓院家に帰って来たのです。そして使用人たちの？夜一様が裏切った？などの噂を耳にされ、すぐに手を打ちました。こう言って…？夜一は護艇隊の任務で遠征へ出たのです。急な命令だったので、夜一は私にだけ連絡をしてすぐに発ってしまいました。安心してください。彼女はまたここへ帰ってきます。？と言…。誤魔化したのです。その事を知っているのは私だけです。どこへ行っていたのか、何をしていたのか、本当の理由を私どもは知りません。」

「そう、じゃったのか」

「あと…もう一つ…千棘様の嫁いだ家が戒律の厳しい家だと言つのは知っていますね？」

「ああ」

「こんな百年間もその家を開けているところを許す御家だとも？」

「そうじゃった…姉上の嫁いだ家は…！」

「条件があつたのです。？現当主、夜一が帰ってくるまで四楓院家にいても良い。その代わり、当主が帰って来た場合、即刻帰って来て、もう二度と、四楓院家には行かない？…と」

「…！！」

千棘は今、すぐそこで寝ている。夜一はしばらくその顔を見ていると、千棘の目から涙がこぼれた。

「…夜一…良かった、元気で……ごめんね…」

そんな寝言を言っ

て夜一も泣きそうになった。その涙を上を向いて堪えた。後悔が押し寄せる。姉に重いものを背負わせて自分は今まで何をしていた、と。

翌日の朝・8時

「姉上、あと五日待てぬか？」

「あらなんで？」

「頼む……」

「分かったわ。きつと五日くらいなら……」

「ありがとうございます！」

「夜一殿、もう出てしまおうのですか？」

「いや、二日程で帰ってくる。」

「わかりました。お氣をつけて」

「おう」

門番に見送られ穿界門へと向かった

同日・16時

「喜助ーっ、鉄裁ーっ、おらぬかー？」

夜一が現世に着き、向かった先は浦原商店だった

「あれ？夜一サン、どうしたんスか？確か帰った筈じゃ……」

「おお、喜助。うちに来い」

「ええ？いやっスよ〜だって千棘サンがいるんでしょ？」

「だからこそ行くのじゃ。事情は行きながら話す」

夜一の真剣な顔を見て喜助は仕方なく了承した

「…分かりました。すぐ行きましょう。鉄裁、四楓院家に行くよ」

店の中に向かって言うと、声が返って来た

「四楓院家ですか。ちょっと待っててください」

すぐに鉄裁は出てきた

「雨、ジン太、じゃあ留守は頼んだよ」

「はい、喜助さん」

「へいへーい」

「ちよつと、あたしたちの事忘れてんじやないわよ」
りりん達がばたばたとかけてくる。

「じゃ、りりん達もじゃ。きちんと家を守るんじやよ」

「了解！」

「もちろんです」

「問題ない」

「行ってくるからの」

「四日くらいで帰ってくるから」

「行ってきますぞ。」

夜一、喜助、鉄裁の順で別れを言うと穿界門に入っていた

どういたしまして(前書き)

前話では出てきませんでしたが、千棘の嫁いだ家は小野平おのひらといひます。

どういたしまして

夜一は断界を走りながら一通りの事情説明を終えて自分の後ろを歩いて走る二人に目をやる

「そうっすか、あの千棘さんが帰ってきてるんすか。こわいなぐきつと怒られる」

「どっじゃろっのう。わしも絞られたが大したことなかった。しかし喜助えお前は少しキツク言われるかもしれんのう。藍染の反乱の元凶を作ったのがお主だとばれておったわ」

「そりゃ怖そうだ」

「あっはっはっは、……しかし、これで姉上に叱られるのも最後かもしれんからな……」

「寂しいですな……」

「鉄裁は昔から叱られ役ではなからう？」

「まあ基本怒られるのは悪戯好きだった夜一さんと喜助さんだけだったじゃないですか」

「確かにそれもそうじゃの」

今に物足りなさ感じてるわけではない。しかし夜一にとって喜助や鉄裁、自分が幼かったあの頃のことはいっ思い出しても本当に、心から幸せだったといえる時間だった

「しかし夜一サン、」
声のトーンを下げて喜助が確認する

「今回アタシたちが千棘サンの家の事情を知っている事がばれてはいけなんスよ？きちんとやり通せますか」

「…当たり前じゃろうが。それにもしきちんと姉上との別れを覚悟しておらんかったら巳魂界出入り禁止の御主を連れてきたりはしま
い」

「それもそうっスね」

軽く返事をする。でも本当に千棘にはバレてはいけないと思った。
なぜなら変なことが起きているからだ。

千棘の嫁いだ小野平家は確かに戒律の厳しい家柄だが、上級貴族だ。それに対して四楓院家は四大貴族のひとつであり少し名落ちしたくらいで崩れるような家ではないのだ。なのになぜそんな名家が、たかが上級貴族とこんな不利益な婚約を結ばなくてはならなかったのか。しかも四楓院家からもらった嫁である千棘も小野平家でいい扱いを受けているようにも見えない。なぜ小野平家が大きな顔をしているのか。喜助は前々からそのことに違和感があったのだが今回の千棘の話聞いてそれが確信になった。

必ず、小野平家と四楓院家にはなにかあると

「ちっくしょー、あれから一匹も虚がでてこねえ」

「まあまあ夏梨ちゃん、傷も癒えきつてないんだから」
「そうだぞ夏梨！私のようにがっしり構えていればいいんだ。ファ
ッアッアッアー！いつなんどきでも攻めてくるがいい！私の家臣
が成敗してくれる！！」

バコンッ！！

夏梨が容赦なくペッシェの頭に拳骨をいれた

「な、何をするんだ夏梨！痛いではないか！！」

「ああー！そのテンション疲れるからやめて」

「な、夏梨お前にそんなことを言われる筋合いはない！！」

「あーもう分かったから黙ってくれる？」

「……なあドントチャツカ、最近夏梨が冷たいんだが……」

「ペッシェ、安心していいでヤンス。あれはきつと照れ隠しでヤ
ンス」

「ドントチャツカ！それは凄い勘違いだ！」

「そっか！それなら私も大歓迎だ！ほら夏梨、私の胸にとび……」

バシンッ！！

夏梨が自分の履いていた草履をペッシェの頭に投げつけた

「ペッシェ、今の話聞いてた？ たった今ドントチャツカに言ったば
っかなんだけど？」

「か、夏梨何でもかんでも暴力に訴えるのはよくないと思うぞ！」

「っち、ノーダメージか」

「っち、とはなんだ、っちとは」

「はいはい分かったからホント静かにしてて」

「お、私の勝ちか！では仕方ない。私は心が広いからだまってや
るっ」

「そりやどーも」

「あれ？そういやネルは？」

夏梨に織姫が答える

「しー、今寝てるよ」

ネルは織姫の膝の上で寝ていた

「あ、そうだったんだ。さっきあたし達が騒いでたのに起きなかったんだ…」

「そうだね」

織姫がくすくすと笑うと膝が揺れたのかネルが目を覚ます

「あ、起きた」

「織姫…」

「なんかお前最近寝てるの多いよな」

「夏梨：ツスカ。…そんな失礼な！ネルは子供じゃないっス！だから寝る時間も短いんス！！」

覚醒したネルは夏梨の言葉を聞いて急に顔を赤くして怒り出した

「あ、いやそういう意味で言ったんじゃないんだけど」

（あーあ、このままじゃだめだ。これじゃあ…これからどうすっかな。）

夏梨達は虚が現れない虚圏をこんな雰囲気でもバワバワの上に乗りながら移動していた

「今日はこのクラスに転校入生がくることになった」

先生の一言でクラス中がざわめく

その雰囲気のまま先生は転入生を呼びいれる

「ほれ、入ってこい」

「はい」

転入生である彼女は髪型がショートカット、ちょっと強気そうな目、背は並より小さい

そしてすたすと黒板の前まで歩き、人懐っこい笑顔でクラスの方を向き自己紹介をした

「はじめまして！この度このクラスに転入しました、小野平優耶おのひらゆうやです。よろしくお願いします！」

「小野平さんだ。覚えるよ。えーっと…あそこ座れ、ほら一番後ろお列で裁縫してる眼鏡がいるだろう？そいつの隣の空いてる席い座れ」

「はい、わかりました」

優耶は言われた席に座り、隣に座っている眼鏡…いや石田に声をかけた

「よろしくね、お隣さん。さっき自己紹介したけど小野平っていうの。あなたの名前は？」

「…僕は石田雨竜だ」

「石田君かあ、これからよろしくね」

「ああ」

「姉上、姉上？どこの部屋におるんじゃ？」

「ここよ。なあに？」

夜一は千棘の声のする部屋の襖を開けて覗く

「おお、ここにおったのか。今帰ったんじゃ」

「そうだったの」

「それでなんじゃが…」

「ん？」

「喜助と鉄裁を連れてきたのじゃ！」

「ええ！？」

「ど、どーも」

「お久しぶりです、千棘さん」

夜一の後ろから喜助と鉄裁が顔を出し、挨拶する

「あら二人とも帰ってきたの？お帰りなさい」

鉄裁、特に喜助はこれから怒られるお分かっていてもそう言われたのは

“ 帰りなさい ”

あつたかい言葉だった…

「でも、言いたいことがあるのよね。こっちらっしやい」

「…はい」

「まずは鉄裁ちゃんからね。…なんで喜助ちゃんを止められなかったの？」

「知ってるとおり浦原さんは一度決めたことは曲げない人ですから…それならいつそ着付いて行った方がいいかと」

「まあ確かにね…じゃあ良しとするわ」

「じゃあ次は喜助ちゃん。あの騒動の根源をつくちやた人」

「すみません」

「あら、まだ何にも言っていないよ」

「…はい」

「でも謝ったってことはどこか悪いことをした自覚はあるのね？」

「はい」

「結構素直になのね。もっとひねくれた大人になってるのかと思っ
てたわ」

「そんなことはないっすけど」

「本当はもっと叱ってやろうって思ってたんだけど最初に謝られち
やこれ以上何も言えなくなっちゃうじゃない」

「あはは…」

「もういいわ。今日はここでゆっくりしていくといいわ」

「ありがとうございます。…千棘さん」

喜助の顔を見て棘はにこっと笑って言った

「どういたしまして」

別れと小野平優耶と虚（前書き）

久しぶりなのでキャラの現在状況を確認したいと思います。

夏梨―― 虚圏で修行中

遊子―― 穢罪宮で捕らえられてる

一護―― 「修行場に連れてってやる」と一心に連れてかれる。
どこに居るか不明

夜一―― 四楓院家で干棘と。

護艇十三隊 侵入者に備える体制をとっているが、各隊長格の考える事はバラバラ

小野平家―― 何考えてるか分からない

石田・チャド 現世で学校生活

小野平優耶 詳細不明

こんな所でしようか。

では、本編へどうぞ。

別れと小野平優耶と虚

夜一らの千棘との別れの日はあつという間にやってきて実感のないものとして過ぎていった

「夜一、喜助、鉄裁、元気だね」

「はい、姉上こそ」

「……」

千棘の呼びかけに答えたのは夜一だけで喜助と鉄裁は黙ったままだった。

それがなんでかはわからないが。

そんな様子に千棘は寂しそうにしながらも小野平家のかごに乗り込み、かごから顔を出す事なく消えていった。

その後、喜助と鉄裁はすぐに現世へと帰ることとなったが夜一だけは気になる事があると言って尸魂界に残った。

虚圏・夜中

ーブシヤアアア

「おし、終わった寝よ寝よ」

「ご苦労様。夏梨ちゃん」

織姫がそう言ってから視線を今日の寝床である洞窟の中へとやっ
てからこう続けた

「それにしてもネルちゃん達すごいよく寝てるね」

「ああ、そうだよな。爆睡してる。あたし達はあの虚の叫び声で起
きたつてのに」

「あははっうん。」

そう、夏梨と織姫は元々洞窟の中でネル、ペツシエ、ドントチャッ
カとともに眠っていたのだが虚が叫び散らしていた所為で寝てもい
られず、仕方なく起き上がり、ついさつき虚を倒したという所だっ
たのだ。

「まあ、あたし達もさっさと寝よ」

と織姫が洞窟の中へと入っていった。夏梨も織姫につづいて入る

中は5人全員が大の字で寝転んでもまだ余裕があるくらい広く、高
さもドントチャッカが立っても3m
程も余る。

二人はそこに寝転ぶ。

しかし夏梨はさっきまであんなに眠かったのになぜか眠れない。

それは織姫も同じなようで夏梨はその様子を見て話しかける。

「ねえ織姫ちゃん、そろそろ現世に帰らない？」

「え？」

「だって虚だってそんなに沢山出てこないでしょ？そんなんじや修
行になんないし、それなら現世に帰って浦原さんや夜一さんに相手

頼んで修行した方が効率いいと思って」

「あー、そっか。そう言う事。だったら夏梨ちゃんの思う通りにしていいんだよ。だってこれは夏梨ちゃんの修行なんだから。」

「…そうだな。じゃあできるだけ早く帰りたいから今のうちに浦原さんに連絡しとこうか。織姫ちゃん、伝令神機かしてくんない？」

「あ、うん、ちょっと待っててね…」

織姫がごそごとポケットを探って伝令神機を取り出し夏梨に渡したそれを受け取った夏梨は立ち上がり、洞窟の外に出てピッピッといじって耳に当てた

ブルルルル、ブルルルル、という電子音が鳴ってから浦原商っス〜と浦原が陽気な声ででてきた

「もしもし、浦原さん？」

『はい…、その声は夏梨サンっスね？なんの用っすか』

「うん、そろそろ現世に帰ろうかと」

『おお、それは丁度いいっスアタシもいつ夏梨サンに帰ってきてもらおうかと思ってたんス』

「そうだったの？じゃあどう帰ればいい？」

『…どうって黒腔通って帰ればいいんスよ？』

「それくらい分かってるよ！その黒腔はどこにあるんだ？」

『あれ？言ってなかったですっけ？今夏梨サンが使ってる伝令神機には黒腔を開く機能が付いてるんスよ』

「そうなんだ。分かった。明日には帰るから」

『分かりました』

「んじゃ」

『あ、そうだ、最近でかい霊圧の虚が虚圏をうろつろしてるん会わないように気をつけてくださいね』

「わかった」

『それでは』

「はい、ありがとうございます」
「ッー、ッー、ッー」

「なんだって？浦原さん」

「うん、黒腔はこれで開けるみたい」

伝令神機を片手でふりながら夏梨が答える

「あ、それと最近霊圧のでかい虚が動き回ってるから気をつけてって言うってたな」

「そうなんだ。浦原さんが言ってる事は相当なんだろうね」

「うん」

「…じゃ、今度こそ寝ようか」

と織姫は言いながらごろりと横になる。夏梨もこくと頷いて眠った

夏梨が眠りに落ちる直前、織姫が「あれ？今大きな霊圧が…」と言ったのだが、その言葉に反応する間もなく寝てしまった

まあ、その言葉を聞き流していなければ、この後に起きる惨状をましにする事ができていたかもしれないが。

現世・空座第一高校

屋上で一緒に食べてるのは佐渡泰虎、石田雨竜、小島水色、浅野啓吾、などのメンバー。そして2週間前にこのクラスにやってきた小

野平優耶。

なぜこのような状態になったのかと言うと、それは優耶が転入してきてすぐの話になる

小野平優耶転入から2日目

「おい、石田、小野平を学校の中を案内してやってくれ」
これは担任の声

呼ばれた石田は雨竜は読んでいた本から目を離し、ちらりと小野平と担任の顔を見る。

しかしすぐにその目をまたも本に戻し

「でもそれなら僕より女子同士がいいんじゃないですか」
と一言

「いや、それが次の授業が体育だからってあいつらないんだよね。カネギ先生（体育の先生）には？石田は新入生に校内案内するからいないけど欠席はつけないでおけ？って言っとくからさ。」
別に雨竜は体育が苦手な訳ではないのだが、ちょうど出るのがめんどくさいと思っていた所だった

「わかりました。じゃあ小野平さん、まずは一番近い音楽室から行こうか」
「はい」

この出来事の後から優耶は雨竜にくっ付くようになり、そのうち啓

吾、水色、特にチャドによく喋るようになった。

どうしてこうなった。どうして…！！

夏梨が目を覚ますと顔の上に生暖かいぼたぼたと血が落ちてきていて血の落ちてきている元へ視線を移していくとそこには肩から血を流す織姫の姿があった

そして織姫が肩から血を流している原因はすぐに分かった
そこに爪を真つ赤に染めた虚が目に入ったからだ
織姫が上に倒れてくる。結果、夏梨はキレてしまった

即座に頭の横にあった斬魂刀を手に取り鞘から抜き出し虚の腹部に斬撃をあてる。周りを気にかけるなんて事をする程落ち着いていなかった。

洞窟の壁を突き破り外へと飛んでいった虚。その大きな音にさすがのネルたちも目を覚ます。

夏梨は虚を追って外へと飛び出る。その勢いで虚の仮面を一瞬で碎き割ってしまった。

夏梨の息はかなり上がっており、瞳孔は開きっぱなしだ。

一方洞窟の中のネル達は肩から血をながす織姫と夏梨の状態にただ驚き、対処に困っていた。

そんなときどこからか低い声が響いてきた

「やはりこんなものでは足りんか、ひゃっひゃっひゃっひゃ。よくも儂のかわいーかわいー僕どもを殺してくれたなあ。小娘え!!!」

そう言つて急に夏梨の背後に現れ背中を斬魂刀で切つてきた。

夏梨は瞬歩でその虚から距離をとる。

その虚は夏梨の見た事の無い、仮面は顔の一部にしかついでいなくおじいさんである事が分かる。人間と見間違えるような姿をしていた。

「お前、なんだよ?…」

迷つた末、夏梨は虚にそう喋りかける

「いや?儂のような破面を見るのは初めてかな?」

「……」

「まあどちらでも良い。…儂はただ御主をくraitただけじゃあ!

「!」

「ちっ」

破面は地面を一度蹴ると、それだけで10mはあつた間を無くしてしまった。

夏梨は応戦するが、さっき虚を倒した時に靈力を放出しぎてほとんど残っていない。

「く、そ…!」

しばらくは耐えきつていた夏梨だが、下から来た斬魂刀に吹き飛ばされてしまう。

とんだ先にあつた岩にぶつかり、口から血が出る。

「あつれ〜？これだけなの？もつと強えヤツかとおもったんだがなあ！」

ダンツと夏梨の腹は蹴りを入れる。

もうだめ…

夏梨がそう思ったとき、うしろから声が聞こえてきた

「待てえ！！それ以上やるな！」

破面はその声のした方を振り向く

そこにいたのはペツシエとドントチャツカだった。

「時間がない。急いで済まずぞ」

「分かつてでヤンス」

「いくぞ…一発だ」

「セロ・シンクレティコ！！！！」

油断しきっていた破面はその合体技であるセロを真正面から受け、消えた。

二人はそれを確認するとペツシエは夏梨に駆け寄った。

「大丈夫かあ？夏梨。情けないなあ。私に助けられるくらいじゃなあ。…立てるのか？」

「それくらい…できる」

「仕方ないなあ、肩を貸してやる。ほれ、ほれ！」
にやにやしながら言う。

「いいよっ、そんなん無くても歩けるし。…んつと」
岩に腕をついて立ち上がった。

よるよると夏梨は洞窟へと歩いていった。

ドントチャツカはというとバワバワの口の中に入っていたネルを外へ出してあげていた。

そもそも、なぜとネルがバワバワの口の中に入っていたのかというと先程の夏梨のピンチを目撃したペツシエとドントチャツカはすぐに駆けつけようとしたのだが、なんせネルに二人が戦う所を見せてはいけないためどうにかネルを…、と考えていた時にバワバワが洞窟の穴から顔を出してきたので、二人はバワバワにネルを預かってもらおうと考えて「危ないからそこ入って」とネルに言ってバワバワの口の中に入ってもらっていたのでした。

ネルは口から出ると、夏梨は！？織姫は！？といいながら織姫のそばへとよった。

そこに夏梨とペツシエが帰ってきた。

「あ、夏梨！」

ネルは走って夏梨に抱きつく。

「夏梨夏梨！大丈夫っすか？」

「うん」

ネルに抱きつかれた勢いが傷に響き、顔をしかめながらネルに笑いかける

「全然大丈夫じゃないっすか！！」

「そ、そう？」

「そこにうつ伏せで寝てくださいっす！」

「え、何？」

傷も痛むので横になりたかった夏梨は言われる通りにした

すると背中に暖かい、どろっとしたものが垂れてくる感覚があった

「うわぁっ！なにしてんの?!」

「何って消毒ツス」

「え!?!」

「ネルのよだれには治癒効果があるっス」

「よだれ…まあいいや。もう騒ぐ体力ないし。後よろしく」

夏梨はすぐに眠ってしまった。

別れと小野平優耶と虚（後書き）

戦闘は軽めに書いてみました。苦手なんです。戦闘シーン書くの。感想をお待ちしています。

滯靈艇と侵入経路

遊子の存在消去まで・あと20日

「ん…」

夏梨が目を覚ますと、お腹の上にネルが乗っていて足下にペツシエとドントチャツカが寝ていた。ネルを抱き上げて起き上がると背中に痛みが走る。夏梨の意識は覚醒し、昨日の事を思い出しながらネルを横に寝かしてあげると顔を歪める織姫の姿が目に入った。

織姫を見て昨日の事を思い出す。そういやペツシエとドントチャツカがすごく強かった。全然しらなかったなあ。

ただの頭悪いヤツだと思ってたけど、ちょっと失礼だったか…。そんな事を考えて座り直そうとしたら、足がペツシエに当たってしまった。

「お…夏梨…」

「悪い、起こしちゃって」

「…本当になあ！せっかくいい夢を見ていたというのに…！」

「悪かったって」

「…夏梨と一護と雨竜を家来にするという最高の…」

後ろを向いてぶつぶつ言う。夏梨は何かるくでもないことを言っているだろうという事は分かっていたが、あえてそこはつつこまず、話始める

「ペツシエ！」

「ん？なんだ夏梨」

不機嫌そうにペツシエが夏梨の方を見る

「あんたすごく強かったんだね！」

急に褒められたペツシエは一瞬ぽかんとしてから誇らしそうに笑った。

「そうだ。ネルには秘密なのだが、なんとこのペツシエ様とドントチャツカはエスパードで3番目だったネル様のフラシオンだったのだからな！」

「はあ？ネルには秘密？フラシオン？エスパード？」

「ふっふっふー。説明してやる。まずエスパードというのは……」
ペツシエは話した。藍染が虚圏に来てした事、ネルがエスパードだったこと、ネルのエスパード落ちした訳、一護と会った時の事。

「…へー、そうだったんだ。そんなことが。」

「そうだぞ！あの時私が破面を倒したんだ！」

…多少自分の活躍を誇張しながらも。

「うん、決心ついた。あたしもやる。一兄みたいには無理かもしれないけど…ま、頑張るから」

「？」

自分の兄がそんな大きなことに関わっていた事を誇りに思いながら、これから自分が戦いにいくという覚悟をくくった夏梨であった。

「あたし、今日現世に帰るから。ま、死んでるから正しくは現世によって尸魂界に帰る、なんだけどな」

「え？」

そんな時にネルが起きてきた。

「夏梨帰っちゃうっスか？」

ぶわつと泣き、夏梨に抱きついた

「イヤっス、ずっとここにいてほしいっス」

「あたしもネルと離れるのは寂しいけどさ、あっちに助けを待って
くれてるかもしれない人がいるからさ」

「…あっち？…ぐすっ」

夏梨に押しあてていた顔を離し、夏梨の顔を見上げる。

「そう、尸魂界に。あたしの双子のお姉ちゃんが捕まっちゃってる
の」

「…大切なものを守るために…？」

「そう！よく分かってるじゃん」

「一護も守ってたっス。いっぱい、いっぱい…」

「うん、そうだな。守ってた。強くなつて。きっとその一兄にとつ
ての？護るもの？にはあたしも入っちゃってるんだけど。…今すぐ
その部類から抜け出して、同等になるんだから！」

「……わかったっス。夏梨…頑張るんス！」

「おう！」

この後ドントチャッカも起きてきて同じように泣きついてきたのだ
がネルとは違い、重さも大きさも硬さもあるので、お腹に頭突きを
されたようなものであり、あげくの果て潰れかけた

そのあとは織姫に起きてもらい、伝令神機を使って黒腔を開いた。

「夏梨！また会おうっスー！」

「元気でなー！」

「いつでもまた虚圏に来るでヤンスー！」

三人に見送られながら夏梨は黒腔の中に入った。

夏梨が織姫の前を走り、足場を作っていくのだが不安定なものしか作れない。来る時も夏梨が先頭で足場を作っていたのだが、あの時は十分きれいなものが作れていた筈。

代わろうか？と織姫が提案してきたが、肩の傷がひどいため任せられる筈がない。

なんとか浦原商店の地下につく事ができた

「おつかれさまっス。夏梨サン、井上サン」

「おう…」夏梨は息を上げ膝に手を置き、息を整えようとすると織姫は霊力をつかったわけでもないのに夏梨の様子を見て心配そうな顔をしている。

「思ってたより帰ってくるのが遅かったっスね。そして夏梨さん、ちよつと失礼」

そう言うと喜助は夏梨に近づき、後ろの襟裳とを引っぱり背中をのぞいた

「な、なにすんだよ?!」

「やっぱり。背中ひどいじゃないっスか」

「…あー、まあ」

「夏梨ちゃん、そうだったの!?早く言ってくれば良かったのに。だから霊圧操作がうまくできてなかったんだ…」

「ごめん。この傷知ったら織姫ちゃん、前走るって言い出すと思っ
て」

「そりゃそうにきまつてるよ!」

「織姫ちゃんの傷の方がひどいだよ」

「あー、はいはい、そこまで。井上サンはこっち来てください包帯巻きます。夏梨サンはそこで待っていてください」

「わかりました」

「わかったよ」

5分もするとジン太と雨と喜助と織姫が戻ってきた

「では井上サン、お願いします」

「はい」

井上は夏梨の後ろに回り込むと背中を治療し始めた

「夏梨サン、霊圧がうまく操作できなかったと言っていましたね」

「そうなんだよ。なんか…自分の霊力なのに、誰かに邪魔された…
みたいなの」

「ほーう」

「あ、あり得ないよね」

「そうっすね」

と喜助は思案顔。

「それよりあたしの先に織姫ちゃんの傷を直した方がいいんじゃない?」

「夏梨サン、あなたには今時間がありません」

「え?」

「今すぐ瀕霊艇に行ってもらいます」

「もう?」

「そうっす。そしてジン太と雨と一緒に連れてってください。」

「なんで?」

「かく乱のためっす。子供が三人も侵入したらどの子が夏梨サンか分からず、多少は時間稼ぎができます。あ、心配はいりませんよ。」

二人は危なくなったらこっちに送られてくるんで」

「あ、そうなの」

「あちらはきつと空鶴さんの花鶴射法を警戒しています。だからその隙をつきます。連中は上空の結界を強めてきます。いいつスカ…」

喜助が一通り説明を終えるころには夏梨の傷は織姫のおかげでもう治っていた。

「では、いつてらっしやーい」

そのかけ声で三人は穿界門に飛び込んだ。

走りながら夏梨はさつき喜助に言われた事を頭で再生する。

「いいつスカ、ここを走る抜けると瀟霊艇の中の穿開門に繋がってるっス？」

夏梨達に遠くに扉が見えてきた

「おい、雨速くしろ！飲みこまれっぞ」

ジン太の叫び声がすぐ後ろに聞こえる。

「瀟霊艇の穿開門には大きな扉がついてるっス。そしてそこには必ず見張りが2人はいます。だから着いたら勢いよく扉を開けて瀟霊艇に飛び込んでください？」

「いくぞ！ジン太、雨！」

「おう」

「はい」

「？バンッ」

三人で扉を大きく開け放つと走ってそこから飛び出した。

二枚の扉が一気に開いたため、今夏梨達は見張りの死神の死角となっていた。それに気づいた夏梨はジン太と雨の服を引っぱり、近くにあった建物まで瞬歩で飛んだ。

だから見張りが穿開門の中を確認した時はもう誰の姿もなかった。

「おい、夏梨急に瞬歩するなよ！前もって言え！」

「ジン太静かに、見つかったらどうすんだよ」

「そうだよジン太くん」

「まあ急に瞬歩したのは悪かったけど、おかげで見つからなかった
だろ？」

「ま、侵入者がいるつてのはバレてるだろうがな」

「なんだよ。容姿が報告されないだけまじだろっが」

ひそひそを話しながらも口喧嘩する二人。

「二人ともやめなよ、そんな事よりこれからどうするか考えなく
ちや」

「そ、それもそうだな」

「あ、それであたしい考えがあるんだけど。」

「何？」

「なんだよ？」

「死神も人間、あたし達も人間。侵入者として判断する材料はきつと服装だ」

「まあ、確かにな」

今、ジン太と雨は現世の格好のまま。夏梨は古い感じの裾の短い浴衣だ。

「じゃあどうするの？」

「……死覇装をどっかからかつぱらう」

「作戦なしかよ」

「仕方ないじゃん。あたし達が大人だったらそこら辺の死神から借りればいいけど、あたし達サイズは……」

「いい。もうこの格好のまま出ようぜ」

「しかたないか……」

「そうしましょう」

「この倉庫の前は3本に道が分かれてるから、ここでたら敵を分散するために三手に別れるぞ」

「了解」

意気込んだその時大きな音で放送が流れた

『瀟霊艇に侵入者あり！人数は不明、穿開門から侵入！まだ近くに
いると思われる！！繰り返し……』

十番隊

「隊長！」

「夏梨か……！いくぞ」

六番隊

「来たか……」

恋次は何も言わず隊舎を飛び出す。

九番隊

「皆！聞いたな！侵入者だ！捕らえろ！！」
隊長代理の檜佐木の命令に隊士達が一齐に隊舎を後にする

二番隊

「二番隊の名誉にかけて侵入者を捕らえよ！」
「……はっ！」

二番隊隊士も同じく隊舎を飛び出す

八番隊

「どうしよつかね〜」
「どうぞお好きに。ちなみに隊士の皆さんにはもう侵入者を捕まえるように言っておきました」
「さすが。仕事が速いね〜」

四番隊

「皆さん！慌てずしばらくここで待機です。怪我人が出てから私たちの戦いです。」
「……はい！」

三番隊

「隊長が裏切った事でなくなっていた我々三番隊の信頼回復のためにも侵入者を捕らえましょう」

「……はい！」

十三番隊

「侵入者だと！？」
「そしてみたいです」
「仕方ない、とりあえず確保だな……」
「……はい」清音は下唇をかみながら隊士達の方へ向かった

「やばっ、急いでここから出よう」

「そうだな」

「うん」

三人は放送を聞き、あわてて倉庫から飛び出し走る。

しかし、誰がどっちの方向へ行くか決めてなかったため全員が真ん中へ進んでしまい、三手に別れる事ができず、作戦は失敗に終わる。

「なんでこっち来んだよ！」

と夏梨

「俺が真ん中に決まってんだろっが」

「ごめんね、夏梨ちゃん」

「もういいよ、今頃うしろに戻るなんてめんどくさいしさ」

「ああ」

「そうだね」

「……………これからどこに向かえばいいの…?」

「……………」

滯留艇と侵入経路（後書き）

どうでしたでしょうか？
感想お待ちしています。

追いかけること死神の夕食（前書き）

一気にいきますよー！

追いかけること死神の夕食

「…知らない」

「知らないって…ふざけるなあ!!」

「ジン太くん声大きい」

とりあえず適当に走り続ける3人

「夏梨、どっかの倉庫に入り込もう。息が切れちゃう」

「そうだな…、あそこに入るう」

そう言っただけに入ると

「お？なんだ？こいつら」

「さっき言っただけの侵入者じゃね？」

「本当だ。今捕まえたなら手柄大きいだろうなあ」

中には掃除をサボっていたと見られる三人の死神がいた

「きゃー」(雨)

「きゃー」(夏梨・ジン太)

「捕まえる！」

3人は慌ててUターン、走り出す。

振り切ったか？と思い夏梨が振り返ると、追っかけている死神が増えている。

「ぎゃあー」夏梨は叫びながらスピードを上げる。

「ため、夏梨おいてくんな！」

「ぶん、遅いなあ、ジン太はっ!!…は、…は」

「誰が…遅いつて?…は、…は」

「二人とも無駄に喋らないの!息切れるの早くなっちゃっよ」

「…はあ、…はあ」

すでに二人の息は最高に上がってしまった。

そんなそんなでも死にもものぐるいで走っていると十字路に出た

「左に行くぞ!」

というジン太の声につられて左に曲がろうとすると、左からは死神がこっちに向かって走ってきていた。

「ジン太あんた!」

夏梨がジン太を攻めつつも戻って右に行こうとするとそちらからも大人数の死神が走ってきていた。

またも3人は方向転換してもう一本の方から行こうとしたが、そこから死神がこちらに向かって来ていた。

つまり、逃げ場は無くなっていた。

「…、しかたない、ジン太、ウルル!しゃがんで」

そう言うなり夏梨は背中にかけてあった斬魂刀を鞘から抜く。

「?切り裂け!・藍月?!!んでもって…」

刀の刃の向きを横にして、息を深く吸い、叫んだ

「月牙天衝!!!」

叫びながら、夏梨は自分を中心にぐるんと一回転し、四方向から来ていた死神達に攻撃を食らわせる。

さすがこの数では倒す事はできないだろうが、塀の一部が壊れ、煙がたつて死神達の目をつぶす事ができた。その隙に抜けていこうとしたのだが雨が足を一人の死神につかまれてしまった。

「ウルル！」

「大丈夫。ここは私が止めるから先行つてて」

「…わかった。行くぞジン太！」

「…おう！」

やむおえず、二手に分かれる事となった。

「ウルル大丈夫かな？」

「大丈夫だろつ、あいつはけっこう強いし、負けかけたら現世に転送される仕組みの道具も持ってるしな」

「何それ？」

「気にしなくていい」

「これからどうするっ？」

「ん、そこら辺にいるような弱そうな人探して、遊子の場所吐かすッ」

「おっかねえな、お前ッ」

「このまま逃げ続けるわけにもいかないだろっ」

「そうだな！」

しかしそれらしい人は見つからない

しかもいつの間にかまたも追っ手が来た。

「はあ、はあ、…もう限界走んのやだ」

「がんばれよ…はあ、はあ」

「もういい、また挟み撃ちにされる前にあいつらつぶしとっつ…
はあ、はあ」

「は？」

夏梨は振り向くとさっきと同じように斬魂刀を始解させ、月牙天衝を放った。

「はあ、はあ、…どうだ！」

煙がモクモクと立ちこめて死神達の様子見えないが動きがない事から、危機は回避したと思われる。

「すげーな、お前…」

半ば飽きれながらジン太が言う。

しかし、煙がなくなってくると、そこには一人立っている姿が見えた。

「お前：あの時の…！」

「あー！檜佐木さん！」

「やっぱりお前か！黒崎夏梨！」

「はあ、あ？黒崎だあ？だれそれ、ちがうっつ。あたしは鈴木夏梨っていうのー！」（デタラメ）

？黒崎夏梨だつてことをむやみやたらに教えないこと？これは喜助から言われた事で、遊子だけじゃなく、夏梨自身も狙われているため、その名を明かすと敵がさらに増える可能性があるのだ。

ジン太もそれに頷く。

「そうだが、俺はなんせ現世からのこいつの知り合いでなあ、黒崎夏梨つてのも知ってるがまったくの別人だ。でもあいつは瀨霊艇に狙われてるとかなんとかで浦原さんが保護してたなあ。あとそいつは兄貴に似て派手なオレンジ頭だ！！」（デタラメ）

「！？」

檜佐木はこの嘘に混乱している。

つまりこの夏梨は黒崎夏梨とは別人で、本物の黒崎夏梨は派手なオレンジ色の髪で、この赤髪のガキの友達で、この赤髪のガキと夏梨は生きてる頃からの知り合いで…
パニックに陥りそうになる檜佐木。

夏梨達はその隙をついてその場から逃げようと考えていたのだが、
檜佐木に呼び止められてしまう。

「ふざけるな！そんな子供騙しに誰が惑わされるか！それに、もし
お前が黒崎夏梨でなくとも侵入者であるのは確か。…逃がすか！」
檜佐木、惑わされてしまっています。

「しかたない。この人相手じゃきつと逃げ切れない。あたしが戦う
から横で待つて。タイミング見てあんた連れて瞬歩するから」
「……わかった」

ジン太は自分も戦いたかったようだが、ここはおとなしく引き下が
った。

「お前一人でくるのか？二人でいいんだぞ？」

「いんだよ」

「そうか。後悔するぞ」

「したらしたるっ！」

夏梨はその言葉を言うとう檜佐木に向かって走っていった。

そして檜佐木から数mのところまで飛び上がり、刀を振り下ろす。檜
佐木は構えてた刀をひょい上にやって夏梨の刀を受け止めた。

(このチビ…小せえくせに一撃が重い…！)

「くっそ…」

夏梨は浮いていた足を地面に着け
もう一度檜佐木の方へと攻める。

カキイン、カキイン、カキイン

「あまいな。俺はまだ始解もしてないんだぜ？」

「これからだっつもの！」

夏梨は引き下がりもう一度飛び上がり上から刀を振り下ろす。

「同じこと繰り返しても無駄だ」

そしてそのまま

「月牙天衝！！」

「なっ」

油断してた檜佐木はそのゼロ距離から月牙天衝をくらってしまっ

その隙をつき、夏梨はジン太を連れて瞬歩でその場から消えた。

「ふー、大丈夫か？ジン太」

「おう」

二人は窓から瞬歩で入ってきた。窓を見て辺りが赤くなっているのに気づく。

「もう夕方か…」

「あ、ジン太怪我ない？」

「俺は平気だよ。戦ったのはお前の方だろうが」

「あたしはぜんぜん…」

夏梨が頭を抑えてその場に座り込む。

「おい、大丈夫か？」

「…だいじょうぶ。それよりここどこだ？」

夏梨はすぐに立ち上がり、周りを見回す。

「ん〜、なんか色々おいてあるな。」

「大きい建物に入ったから倉庫ってことはないと思うけど」

「あ、見る夏梨、死覇装だ！」

「やった。これで楽に動けるな」

「おっし着替えるぞ」

「こっち見るなよ」

「誰が見るか。お前こそ見るなよ。」

「誰があんたの着替えなんて見たいかよ」

「んじゃ」

ふたりはお互い背を向け壁だけを見て着替えた。

「おわったか？」

「おう」

振り返り、お互いの死覇装姿を見てニヤつく。

「死覇装いいな！死神になった気分だ！」

「そうだな！」

「はっ！ジン太声、静かに」

「そうだった。まずここがどこか調べよう。入ってきた窓の反対の壁にあるドアえおそつと開く。」

「だ、誰もいないみたいだ。出ようぜ」

「うん」

ぱたぱたと建物の中を歩き回るが、一向に人が見つからない。

？ぐうきゆるきゆるる

「お腹減った」

「大きな腹の音だなあ」

「だって朝から何も食べたないし。運良く食堂でもないかな…」

「そんなある訳ないだろ」

「だよー」

そんな事を話していると、少し先からがちゃがちゃ、ざわざわ音がする。

のぞいてみるとそこは、食堂だった。

「よ、よし夏梨、食べにいこう」

「そうだな。今あたし達死神の格好してるし」

そう言つて夏梨とジン太は食堂へと入つていった。

中は大勢の死神で騒がしく、大きな長い机がいくつも置いてあり、自由席らしい。

夏梨達がまぎれても違和感がない程だった。

大きな食堂の奥に受付があり、そこで料理を頼み、受け取るしくみのようなので二人は早速列に並ぶ。

「カツ丼定食か、サバの味噌煮定食だつてさ！どっちにする？」

「カツ丼定食！」

「同じの頼むのかよ」

「まねすんなよ」

と騒いでいるうちに列が進み、夏梨の番になった。

「カツ丼定食で！」

「はいよ」

夏梨はカツ丼定食を受け取り、満足そうな顔をする。

ジン太も「カツ丼定食で」と元気に頼んだのだが…

「ごめんねー、カツ丼はさっきので最後なんだ。」

「わ、分かりました。さば煮の方でいいです」

「ごめんねー、ありがとう」

ジン太は下を向きながら先に席に座つて食べ始めているの横に座つた。

「あれ？ジン太サバにしたの？カツ丼美味しいのに」

「その、お前が食べてるカツ丼が最後だったんじゃあーっ！」

「ジン太はそう叫び、夏梨のカツ丼のどんぶりを横からかさらい、飲むようにカツ丼を平らげてしまった。

「あ、あた、あたしのカツ丼返せー！」

夏梨はジン太のお腹に膝キックをいれる。

「て、てめえ…吐いちゃうだろうが！」

「吐け！あたしのカツ丼〜！」

「お前は俺が吐いたのを喰うのか?!」

「食べる筈ないじゃん！ただ吐かせただけだー！」

喧嘩の声が大き過ぎた所為でで周りのほとんどが二人を見ていた。そしてその多くが野次馬と化していた。

「お前ら新人か？やれやれ！」

「おーし、男の方が勝つのに1000円だ」

「じゃあ私は女の子の方が勝つのに1000円かけようじゃない」

「私のカツ丼わけてあげるわよ」

そんな騒がしい隊。

その中にいた小柄な黒髪の死神は呆然としていた。
なぜ彼奴らがここにいるのだと。

追いかけること死神の夕食（後書き）

感想お待ちしています。

絵日記と気の弱そうな死神

黒髪の死神はびっくりしながらも騒ぎの中心にいる二人の腕を引っぱり、食堂から廊下へと連れ出す。

「あ、ルキ姉！」

「？あ、ルキ姉！？ではない！何でここにいる！」

「そんな怒らなくとも…。なりゆきだよ」

「どんな成り行きでここ十三番隊で夕飯を食べる事になった！」

「「さあ」「」

二人は首を傾げて答えた。

「さあとはなんだ！！！」

叫んだルキアに廊下にいた死神の視線が集まる。

ルキアはそれにしまった、と顔をしかめてもう一度二人の腕を引っぱって自分の部屋へと向かった

？バタンっ

「ふうう」

ルキアは二人を部屋にいれ、ドアを閉め、その閉めたドアにもたれ掛かる。

「ルキ姉大丈夫？凄く疲れてるみたいけど」

「誰の所為だと思っている…？」

「え？」

「…まあいい。んで？ここにいる理由を聞かせてもらおうか」

「わかった。」

「それでは、おまえらは侵入した後なんだかんだで死神を退け、たまたま出くわした檜佐木副隊長を騙し、逃げた先がここで、ちょうど良く死覇装があつて、お腹が減つたのでたまたま見つけた食堂で夕飯をとろうとした、という事か。」

思い返すとあまりいい事をしてない気がするのは夏梨もジン太も同じだ。

「ま、まあ」

「はあ、何をやっているのだ。貴様らは」

「必死に逃げ切つた結果がこれという訳で……悪気は……なあ、ジン太！」

「俺にふるな！」

ルキアはまたもため息を吐く。

「今日はここで寝ていけ」

「え?! いいの?」

「当たり前であるっ」

「サンキュ」

「あざーす」

「それはいいのだが布団を出すのを手伝ってくれぬか?」

「はい」

「よし、では寝るとするか」

布団を三組敷き終わり三人は布団の中へ。

夏梨とジン太は疲れていたのであろう、すぐに寝てしまった。

「起きろ！ジン太、夏梨」

「ん…起きねえ…？」

「そつだ！さつきから起きると言っておるのだ。ジン太も早く起きろ」

「なんだようっせえな…」

「いいから起きろ！」

ジン太はもぞもぞと動き、布団から不機嫌そうな顔を出した。

225

「よし、二人とも起きたか」

「うん」

「おお」

「いいか、私はこれから用事がある。だから私が帰るまでこの部屋の中にいるんだ。わかつたな」

「え、ついてっっちゃ駄目？」

「そつだぜ。ここにいるなんか退屈だろうがよ」

「駄目だ。貴様らは瀟霊艇に追われる身なんだぞ！その自覚を持って」

「…はい」

「わーったよ」

夏梨とジン太はつまらなそうに返事をした。

「昼過ぎには帰る」

とだけ言つとルキアはパタンとドアを閉めて出て行つた。

夏梨とジン太はくつろぎムード全開で床に転がったり壁にもたれ掛かっていたりしている。

そしてしばらくの静けさが部屋に満ちる。

「暇だな」

「暇だな」

しばらくの間^ま

「お腹減つた」

「そうだな」

しばらくの間

「あールキ姉に朝ご飯だけでもつれつてもらえば良かった…」

「本当だよなあ。俺餓え死ぬかも」

しばらくの間

「暇だな」

「暇だな」

ごろごろと過^すす。

ジン太が暇つぶしルキアの机をいじり出す。

「おい、やめなってジン太」

物音で何か物色してるのだと分かり、夏梨は仰向けに寝ころがって天井を見たまま視線をジン太に移す事なく言う。

「い〜じゃん、やる事なさ過ぎて頭痛い」とジン太。

「何それ」

がさごそと敷き出しを物色し続ける

出てきたのは絵日記である。

さすがに見てはいけないとジン太にも分かったが、かわいらしげなウサギの表紙、つまりかなり子供っぽいそれは好奇心をかなり誘う。ジン太はその誘いに負け、ページをちらりと一枚めくった。

「ぶふっ！」

ジン太は吹いた。

その声に気づき顔を横に動かす夏梨、ジン太が手にしている日記の表紙が目に入る。

「ジン太！さすがにそれはだめだろ」
表紙に惑わされる事なく夏梨が一喝。

それでもジン太の表情は変わらない

「いや夏梨これを見る！」

「だから見ちゃいけ…ぶはっ！」

不意にジン太に日記の1ページを見せられた夏梨が吹く。

絵日記の1ページ目

下半分には文章が書いてある

問題はそこではない

その上にある、絵だ

描いてある人らしきものはすべてうさぎに顔が変わっており、かわいらしくなっていて、誰が誰なのか分からない。つまり、はっき

言うのであれば下手なのである。

「な、なんとというか、個性的だね。」

「そんなオブラートに包まなくてもこれは単に……ぶッ」

「分かったからもう閉じてて。」

夏梨はそんな事をつつ顔の筋肉がびくびくしてる

日記の内容は真面目で以外とシリアスなのだが、絵の所為で逆にそれがどんな様子だったかは全くもって伝わってこない。

ぱらぱらと他のページを見てみても、絵のほとんどの登場人物の顔がウサギで同一人物も出てきているだろうに、やはり誰が誰なのかはさっぱりである。

日記を読むのを止めていたはずの夏梨もいつの間にか食いつくように絵を見ている

内容は深く読まず、絵だけを見てぱらぱらページをめくる。

そんなときコンコン、とドアを叩く音がした。

ピクリと固まる二人

「すみません、ルキアさんいますか？」

二人の顔から汗がたらたら流れ始める。

その瞬間の夏梨の頭の中はこんな感じである。

どうしょーっ！どうする？！押し入れに入るか？いや、それじゃあ音がしちゃう。それ以前にそんな時間がない。今からドアに

駆け寄ってドアをおして開かないようにするか?! だからそれじゃ時間ないって!! そうだ! ジン太がなんかいい案…
約1秒間にこれだけの思考をまわす夏梨。頭の中はフルスピードで回転する

希望をむねに横にいるジン太を見てみる。

頼りのジン太は放心状態である

バカーーーー!

夏梨はものすごい小さな声で叫ぶ

「ルキアさん? いませんか?」

ぎゃーーー!!!

心の中で騒ぎまくる

焦りまくる夏梨の目に開いたままの窓が目に入る

そうだ!

「ルキアさん? 入りますよ。…あれ? やっぱる居なかったんだ。物音したと思っただけだ…」

その女は届け物と見られる箱をルキアの机の上に置き、廊下へと出た。

「あゝ危なかった。」

「まったく…心臓に悪いんだよ」

「うん。ジン太動けなくなってたもんね」

「うっせ。物音立てないようにしてたんだよ」

窓から飛び降りた二人はそのまま座り込む。

幸運な事にルキアの部屋は2階で、その窓の外は建物の裏側だった

ため、誰にも飛び降りる所は見られなかった。
さっきままでめちやくちな早さで動いていた心臓が落ち着きを取り戻した所でこれからの行動を考える。

「これからどうするかな？」

「どうするって部屋に戻ればいいじゃねえか」

「ジン太…。頭少しは使え。あたし達が二人だけでルキ姉の所に入ったら不審がられるだろ」

「あ…じゃあその辺ぶらぶらして情報収集でもするか」

「うん。それが一番だな。んじゃ、行くか」

建物の裏から表へ出ると、沢山の死神が慌ただしくしている。

理由はあちらこちらから聞こえてくる声で二人はすぐに分かった。

侵入者を捕らえようと必死なのだ。

そしてもう一つ、さっきから夏梨達が隊舎内を歩いていても騒がないという事は、あちらはまだ夏梨達の顔がつかないという事が分かる。

そんなこんなで隊舎の出口を見つけた。

見張りはついているが、平然と通れば止められる事もない。楽に隊舎から出れた。

漕霊艇の中を歩く。周りには侵入者を追う死神が走り回る

夏梨「さて、どうしようか。できれば遊子の場所が知りたいんだけど…」

ジン太「そうだな…」

「そうだ！だれか気の弱そうな死神一人を捕まえて教えてもらおう」
「教えてもらって…平和じゃなさそうなんだけど」

「いやいや教えてもらっただけだって。友好的に話したいしね」

「…やつぱお前物騒だな」

「え？どこが。…ほら、飴と鞭ってヤツだよ」

「はあ」

「でもそうなんないために気の弱そうな、反撃してこなさそうな…
いいカモを探そう」

「…そうだな。それ以外に情報集めるっていつでも方法ないしな」
「だろ？」

二人は話すのをやめ、早速ターゲットを探す

「…おい、いいターゲット見つけたぜ」
とジン太

「え？どこだよ」

夏梨はジン太の見ている方を見た。

「おい！今おれの肩にぶつかっただろ！」

「え？！本当ですか？！」

がたいの大きいモヒカンの死神が、その三分の二くらいの身長黒
髪の死神に怒鳴っていた。

どうやら小さい方の死神の肩が大きい方の死神にぶつかっただらしい。

この場合、どちらがジン太の言う？いいターゲット？かはすぐ検討
がつくだろう。

「あゝあゝ、骨が折れたかもなあ」

大きい死神があたったという腕を擦りながら言う。

それを真に受けてしまった気の弱そうな死神（以下ターゲットとす

る)。

「それは！！居間すぐうちの隊舎に来てください。手当てします」
「ああ？そんなに俺に時間の余裕があると思ってるのか！」

影から見ている夏梨達が一言。

「こつこつチンピラってどこにでもいるんだな」

「っていうかあの二人がぶつかつたら間違いなく小さい死神の方が重傷だろうが」

「じゃあいくか」

「おう」

「あの人あそこから連れ出すよ。んでもってちよつと来てもらう」

「うわあ、ワルがここにも居た」

「そんなひどい事はしないよ」

そんな事を言つて夏梨は影から飛び出し、小さい方の死神に駆け寄つてこつこつ言つた。

「もう、先輩。どこに居たんですか？私まだ新人だからあなたが居ないと何すればいいのか分からないじゃないですか！」

どうやら部下になりきる作戦らしい。

「え？」

もちろん急にそんな事を言われてもターゲットの死神には訳が分からない。疑問符を浮かべている。

夏梨はそんな状態のを無理矢理「早く行きましょう！」と行ってジン太の居る影までターゲットの死神の腕をがしつと掴むと夏梨はそこから走つてその場を離れた。

もちろん、ギヤーギヤー言いながらチンピラ死神が追いかけて来たのでジン太の所に戻るだけでは逃げ切れるはずもないので、ジン太の隠れている道を曲がる事なく真つすぐ走りチンピラ死神から距離

を稼げた所で右に曲がり、さらに右に曲がる。そんなこんなで簡単に撒く事ができた
ちなみに夏梨を追いかけるピンチラ死神のさらに後ろから走っているジン太はこの時にはぐれてしまった。

しかし夏梨はそんな事にかまう事なく息を整える。

その様子を見てテーゲットであった死神はお礼を言った。

「さっきは助けてくれてありがとうございました。」

「え？あ、うん。どういたしまして」

「えっと……」

その死神は何を言おうか迷ってる素振りをしてからこう自己紹介した。

「はじめまして。四番隊の山田花太郎です。お礼に何か……」

「うん！お礼！じゃあ花太郎、とりあえず黒崎遊子って子がどこに居るか知らない？」

「ん、すみません、分らないです」

「そつか……。じゃあ……とりあえず、隠れられるとこ」

「そうですね……。掃除をさぼる程度なら……よつと……」

そう言っつて花太郎はしゃがみ込み、地面の石畳を一つ外してその中を指した

「ここなんてどうでしょう」

「おお」

夏梨はそうそう、こんなの！と喜んで中に入っていった。それにつづいて花太郎も中に入る。

中は暗く、道のようになっていて、その道の真ん中に水が流れている。つまり、下水道である。

「いや、ありがとな。」

「いえいえ。こんな事で良ければ」

「ところでさ、ここってバレないの？フツーに石畳めくって入った
ただけけど」

「ああ、大丈夫です。ここはうちの四番隊くらいしか入らないので
「そうなんだ…」

「どこか行きたいとこあります？この中案内しますよ。」

「え、あ、うーん…じゃあ…十番隊舎！」

「わかりました。ついてきてください。」

花太郎がそう言っつて夏梨の前を歩き始める

「そついえば、あなた何番隊の人ですか？」

「……」

夏梨は花太郎の前に回り込み、顔を見定めるようにじーっと見る

それから、うん、と言っつて正体を明かした。

「あんだ、無害そうだから教えてあげる。昨日ここに侵入者がでた
だろ？」

「はい」

「それ、あたしのこと」

「……ええー……?!」

「反応遅かったな」

あきれ顔の夏梨

「じゃ、じゃあ名前は？」

「ん？ああ。まだ教えてなかったか。黒崎夏梨だ」

「え？もしかして一護さんの妹だったりしますか？」

「うん、そうだけど何で知ってるの？」

「えーとですね。一護さんがここに旅鳩としてここに侵入したの知
つてますか？」

「いや。一兄はそう言っつ話はあるまりしてくれないんだよ」

「そうですか。実はそのとき、一護さんはルキアさんを助けるため

にここに来ていてたんですが、その時に会って僕もルキアさんを助けたかったので今みたいに殲罪宮まで道案内したんです。」

「そっか…一兄が…。いつだって何か抱えて必死に守って、戦ってんだよ、一兄は。昔からね。それであたしもその守られるもの一つなんだよな。やっぱ。でも…いつまで経ってもそのそのまま居る気はないからさ。あたし…まだ弱いつて分かってんの。でも。そのうち一兄より強くなるつて意気で、いまじゃ、姉の一人も守れないけど…絶対強くなって守るつて決めたものを守り抜けるくらい…」

「そうなんですか…」

「え?!あ、ごめん、なんか」

「いえいえ」

「あ、そついや殲罪宮つて?」

「はい。極刑の人が行く所なんですけど…そつ言えば今あそこ厳戒態勢になってますね…なんでだろ?」

この言葉を聞いたとき夏梨はそこに遊子が居ると確信できた。

「そこ案内して!」

「え?」

「いいから。」

「だめです。今あそこに行つても夏梨さん一人では…」

「…ッきつとそこに遊子がいる!」

「だめです!」

「連れてつて!」

そのとき。

「すみません。話は聞かせてもらいました。」

夏梨達の後ろに現れたのは…

「虎徹副隊長…!」

「え?...」

地下水道と羽織の男

「あんた誰？立ち聞きつて趣味悪いなあ」

「侵入者のくせに偉そうにしないでください。私は四番隊副隊長・虎徹勇音です。今からあなたを拘束します。」

「なんだそれ。あたし、副隊長がどれだけ偉いか知らないけど、さつきから言い草がひどくないかか？」

「侵入者があの一護さんの妹だったとは思わなかったですが、だからと言って逃してあげるつもりはありません。あなたはここに来てから何人の人を傷つけましたか？わたしに文句を言う前にその人たちに何か言うことがあるんじゃないですか？」

「つち…、死人は出たのか？いや、一番怪我が大きかった人でも散った破壁の破片が当たって切った程度だろ？骨すら折れた奴はいないはずだ」

勇音は口の両端を横にぎゅっと引つ張って押し黙った。夏梨の言うとおりであった。しかし夏梨もなぜかつらそんな顔をする。しかしそんなのは束の間。すぐに強気な顔に戻った。

勇音もすぐにキツと夏梨をにらみ返し言い放つ。

「どちらにせよあなたは侵入者。瀨霊挺に害をなすもの！大人しく捕まってください！！」

そして腰にさしていた斬魂刀とを出して夏梨に襲いかかってきた。

夏梨も斬魂刀を出して応戦する。

刀を交えながら夏梨が勇音に問いかける

「だいたい、そんなこと言っただけで今瀨霊挺が何しようとしてるか知ってるのかよ?!」

「何のことですっ?」

刀で忙しく夏梨と打ち合いながら聞き返す勇音

「呆れた…。あんたには侵入者の目的がなんだって予測してるの？何か盗もうとしてるとか、誰かの暗殺企んでるとか、そんなこと？」

「だから何が言いたいんですか？」

二人の声と刀のぶつかり合う音だけが地下水道に響く

「あと少しであたしの姉は殺される。この瀟霊挺に！！」
「！！！！」

花太郎はもちろん、虎徹も驚いた顔をする。

花太郎は夏梨の姉が処刑されようとはまったくもって知らなかったからで、副隊長の勇音の場合は黒崎遊の妹が処刑されるのが決まり、その片割れが捕まったしまったことは知らされていたため、今回の侵入者の意図も分かっていた。だからこそ、今闘っている相手がその双子の片割れであったことに驚いた。なんでここにいるの？現世で隠れてるんじゃないの？と。

頭にたくさんの疑問が湧いてくるが、しかし今は戦闘中。すぐにさつきまでの険しい顔に戻し、頭に浮かんだ一番有力そうな予測を口にする。

「じゃ、じゃあ復讐に来たっていうんですか？」

その言葉を夏梨が聞いた瞬間、霊圧が急に上がった。

勇音は押されてしまい、一歩下がる。

「だれがそんなくだらないことするか！あたしは、助けに来たんだよ！遊子を！！」

その叫びで虎徹の頭に先ほど聞いた夏梨のしていた話が頭の中で再生される

“今じゃ、まだ兄妹の一人も守れないけど…、絶対強くなって守って決めたものを守り切れるくらい”

ああ、この子は覚悟をくつくつしているのだと、勇音には分かった。しかし、副隊長としてここで引き下がるわけにはいかない。

「話は取り調べできちんと聞きます！だから！今は…！」

「じゃあきちんと話したらあんたらは遊子を助けに動いてくれるのか？！そうは思えない！逆にあたしまで捕まって遊子を助ける人がいなくなるだけだろ…！」

眉をよせ、歯切りする勇音。さつきから夏梨の言うことは的を射ている。

「話し合いは終わりだ！切り裂け・藍月」

「そうですね。こうなったら力づくで連れていきます！奔れ・凍雲」

カキンッ、カキンッ

お互いに斬魂刀に霊圧をこめて打ち合う

お互いが間合いを取ったとき、

「月牙天衝！」

「うあっ…！」

月牙天衝があたった勇音は倒れ、月牙の勢いでズザザッと地面をすべる。

それを見た夏梨は勇音に駆ける。どうやら月牙を受けた時の傷と地面に倒れた際にできたすり傷以外けは見当たらない。このままではまた夏梨を追ってくるだろう。夏梨は辛そうに勇音を見てから

「ごめん、まだ動けるみたいだから…」

と言って刀を構える。

ごめん、とぼそりと呟きながら

刀を振り下げた

「ふう……」

夏梨はその場に座り込む。そしてしばらくしてから花太郎の方を向き、この人手当してあげてと言い、片手で頭を押さえ、壁にもたれかかった。

「あ、はい。」

さつきまであわわしていた花太郎だったが夏梨に声をかけられ、動き出す。

そして手当しながら花太郎が夏梨に聞く

「そういえば、なんで僕が手当てできると知っていたんですか？」

「ああ……それは浦原さんいろいろこつちのことは教えてもらって、それで四番隊は救護専門の隊だって聞いてたから」

「そうだったんですか。……はい、手当て終わりました。夏梨さん、きつとここでの霊圧の衝突に気づいている人達がいいます。その人たちが来る前にここを離れたほうが……」

そういながら花太郎が夏梨を見ると、夏梨は頭を押さえて疼くまていた。

「夏梨さん?!大丈夫ですか?!」

「ん……ちよつと……頭痛い……」

「え?!虎徹副隊長にやられたんですか??」

「いやっ……違う」

「じゃあ……?」

「霊力が……おかしいッ」

「ど、どうしよう……」

そんなの夏梨は霊圧が暴走しかけていた。

本人は抑え込んでいるつもりでもかなりの霊圧がもれていて、夏梨の体のあたりが光る。

そんなとき、花太郎の後ろから大きな音が響いた。

ガラガラドシャー…ドン！

あせって後ろを振り返ると

そこには白い羽織を来た体格の大きい男がいた。

その男とは

「ぎ、更木隊長！…なんでこんなところに！」

「決まってるんだろ…たまたまだ」

「そうだよ。剣ちゃんいらいらしてて地面に斬魂刀を刺したらここに落ちちゃったんだよ」

「やちるうつせえぞ」

つまり二人はのいるところは明るくなって、そのわけは二人の上の天井が突き破られてるからだ。

(そこから入ってきた)

「草鹿副隊長まで…なにする気ですか！今夏梨さんは霊力が変なんです。何もしないであげてください」

「ああ？なんだ？その弱ったガキは」

「……」夏梨の身元を無闇に明かせないため花太郎は黙り込む。

「あ、この子侵入者の子じゃない?!」
無邪気にやちるが言う。

「なんで分るんだ」

「目撃情報の、黒髪、ストレート、背中に斬魂刀、子供、に当てはまってるからっ」

「ほんとかよ」

「ほんとほんとッ」

「けッ、侵入者って聞いたからよう…久しぶりい楽しめると思ってたんだがな。的外れだったみてえだな。行くぞやちる」

「え、でもこの子苦しそうだよ？助けてあげようよ」

「こんな弱つちいの助けてどうすんだよ」

「ん〜とね…十一番隊に連れて行ってあたしとと一緒に遊ぶの！」

夏梨を見定めるように剣八は見下ろす。そんな剣八にやちるがもうひと押し。

「それにこの子、まだまだ成長途中だよ」

やちるの指さす先にいる夏梨は霊圧を暴走させかけている。その霊力の大ききくらいさすがの更木にもわかる。

剣八は舌打ちし、霊圧を一気にあげて夏梨に思いっきりあてた。

「何をするんですか!？」

夏梨は剣八の強大な霊圧をあてられたことでさっきまで放っていた霊圧は打ち消され、気を失った。

花太郎の悲鳴に近い声に

「うるせえ」

とだけ答えると、夏梨をやちると反対の肩に担ぎ、入ってきた上の穴の外へ飛び上り、その場から去った。

花太郎はというと、この数分後に人が駆けつけてくるまでずっと啞然としていた。

十一番隊舎・執務室

「それでこの子はなんなんですか?」呆れたような目と声で弓親。

見る先はもちろんその長いすに寝ている夏梨

「知るかよ」めんどくさそうに答えるのは剣八。

「なんで連れてきたんスか?!」 テンション高く反応するのは一角
「知るかよっていつてんだろ」

「かわいいでしょ!」

「そんなとこ聞いてません!この子が誰だつて聞いてんスよ!」

「え?たぶん侵入者」

「え?(!)」

一角は凄く驚いた声を出し、弓親は「っい」という顔をしながら
わざとらしく、え?と聞き返していた

「はあ、なんでこんなめんどくさいことを」

「なんでここに連れてくるはめになつたんスか?」

「ぶゝ、いいじゃん。つるりんのばか!」

「つつ…つる…、やっぱりお前か!」

そんなこんなで騒いでいると長椅子の上で寝ていた夏梨が目覚ま
した。

「ん…」

「あ!」 やちるは剣八の肩から飛び降りて夏梨の顔をのぞきこむ。

ついでに一角、弓親、剣八も夏梨の方を見る。

「…え?」 起きたかなしには全くもて自分の置かれている状態が分
からなかった。

「おはおー!」

大きな声であいさつしてくる小さな女の子。

「……」

無言でこちらを見ているふたり。

「……」

そして何より、ちょっと離れてこつちを見ているとげとげ頭。

周りを見回した夏梨はさらに自分意味がわからなかったが、毛布を
かけて寝かしてくれていたらしいのでそう悪い人じゃないはず。

そう考え、今一番知りたいことをそのままストレートに聞いた。

「一応敬語で。」

「ここ、どこですか」

「十一番隊の詰所だよ!」

「そっか。」

「てめえ何もんだ?」

「何者って言われても…」

「侵入者っていうのは本当?」

「ん、まあ」

「名前はなんていうんだい?」

「くっ…夏梨」

黒崎といかけてやめる。

「へ」

「じゃあ今度はあたしから質問。あたし、なんでここにいるの?」

「ああそれなら隊長と副隊長に聞いてよ。僕らもよくわかんないんだよね」

隊長というのはあのつんつん頭の人だろう。白い羽織着てるし。

「なんでここにあたしいるんだ?」

その人を見て聞く。

「成り行きだ」

「どんな成り行き?」

「まあまあリンリン」

「リンリン?」

「うん!あだ名!」

「…」どう反応していいかわからない夏梨。

「剣ちゃん、この子しばらくここにいていいよね?」

「…勝手にしろ」

「マジっすか!隊長」

「好きにさせりゃあいいだろ」

「だめだ。隊長完全にめんどくさがってる」

「そうだね。もうあきらめよ」

「こそそ何かを喋る二人。」

「三人はまったく気付かない。」

「じゃあリンリンこっちきて！あたしの部屋紹介してあげる！」

「ちよつと待って下さい！副隊長！」

「一角が夏梨の手をひばっていいこうとするやちるを呼びとめる。」

「なに？つるりん」

「…他の隊だったらこいつが混ざってもばれねえかも知れねえが、ここは副隊長以外全員男です。」

「？だからリンリンが来てくれてすごくうれしいね」

「つまり、女のこいつが一人増えると物凄く目立つわけです」

「！…じゃあどうすればいいの？」

「…無理ってことじゃない？」「ええ、やだやだ」

「そんなこと言われても」

「やちるが駄々をこね、一角、弓親が困っていると…（夏梨はおいてけぼり）」

「俺が隊士共にこいつがここに居ることを口外しねえように言っときやいい話だろ」

「そうっすね…。隊長が言えば平気かも知れないっすね」

「だろ？…分ったらお前らさっさと遊びに行け」

「うん！剣ちゃんありがと」

「ありがと。剣八！」

下水道と羽織の男（後書き）

感想の方、よろしく願います。

十一番隊と稽古

「ここがお風呂ね!」

「けっこう広い」

「そう?でも男風呂の方が全然おつきいよ」

「え?入ったことあるの!？」

「うん、掃除の時にね」

「あ、ああ掃除かあ」

「？」

「いや、なんでもない」

「そう?あたしの部屋、食堂、大広間、広間、道場、給湯室、トイレ、お風呂…これで全部かなあ」

「本当?じゃあ一回隊主室戻らない？」

「そうだね」

というところで隊主室の戻ろうと廊下に出ると、むこうか一角がこちらに走ってきた。

「副隊長、夏梨!」

「どうしたの?つるりん」

「……」なぜか夏梨は一角に返事をせず、黙って一角の顔を見て眉をひそめている。

「…隊長が呼んでいます。大広間まで来てください」

「そうなの?それじゃあ行こうか、リンリン」

「…そうだな」

「どうしたんだお前、さっきから俺の顔をジロジロと」

「…いや、なんでもない。じゃ、行こうかつるりん」

「……おい、今何だった？」

「ん?」

「つるりんだと?」

「あ、ごめん。名前分からなくて」

「はああ？さっきお前が隊主室にいた時、俺もいただろ！」

「うん、いたのは憶えてるんだけど、自己紹介とかなかったでしょ？」

「だったら名前聞け！適当に呼ぶな！」

「いやー、やちるがつるりんって呼んでるから。いいのになって」

「そうだよ！つるりん！！」

「副隊長はもう諦めただけだ！」

「えー、じゃあ、失礼ながらお名前は？」

「本当失礼だぞ。…班目一角だ。んであの時俺の隣にいたのが綾瀬川弓親」

「そっかー、一角な」

「呼び捨て…っ」

「あ、やだった？じゃあ………ダメだ」

「何がだ！なんで露骨にガツカリそうな顔すんだよ！！」

「あ、気にしなくていいよ。たいしたことじゃないし」

「気にするだろ！」

「いやさ、ルキ姉みたいに兄ってつけて呼ぼうと思ったけど、それだと一兄とかぶっちゃうなあって」

「はああ？」

「な？意味分かんないだろ？」

「一兄って誰だよ」

「あたしの兄貴」

「ほー。というかお前苗字は？」

「あ、それ私も知りたーい。リンリン教えてー」

「え？！ん、あ、大広間行かないと行けないんじゃないの？」

苗字を聞かれ、あからさまに話をそらす。バラしても平気な気もするが、念のためだ

「あ、そうだった！大広間行くぞ！」

「「はーい」「」

幸いこの場にはそのことに気づく頭間の回るものはいなかった。

大広間につくと、そこにはすでに大勢の隊士らが集まっていた。

剣八は隊士の前に胡座あぐらをかいている。

夏梨は先に大広間に着いていた弓親に促され、剣八の隣に立つ。

やちるはというと剣八を見つけるなり、駆け寄って肩に飛び乗っていた。

夏梨がやってきたのをに気づくと剣八は立ち上がり、夏梨の頭の上に手を乗せ隊士に伝えた。

「こいつはうちの隊で預かることになった」

それを聞いて大広間の中はざわつく。

「わけは聞くな。わかったら解散だ」

剣八はそれだけ言うと、大広間を出て行くとした。

当たり前だが、一方的に終わられた話に隊士達からは説明の足りなさに不満の声が聞こえる。

しかし剣八が振り返ってギロリと睨むと大広間の中はサアッと静かになった。

一角、弓親にとってこういうことは日常茶飯事なのでやれやれという顔をしているが、夏梨の顔は驚きとなんととも言えないような感じの半々と言ったところだ。

ともあれ5人で隊主室に戻る。

「ありがとな。剣八」

「おう」

呼び捨てで隊長を呼んだことに一角、弓親はぎょつとする。

「じゃあリンリンお風呂行くつよ」

「うん」

「おうおう行って来い」

夏梨はやちるに袖を引っぱられながら、隊主室を後にした。

そしてぱたぱたと足音が離れていくのを確認してから弓親が口を開く。

「隊長、なんであの子を置いていくことにしたんですか？」

「あ、俺もそう思います。あの子置いとく義理なんてないじゃないっすか」

「まあそうなんだけどよ……ほっとけ」

「まあ隊長がそう言うんでしたらいいんですが」

これ以上追及すると剣八がブチ切れそうだったため、弓親は一旦話をやめる。

「…では僕たちも失礼しますね」

「おう」

「失礼します。」

一角と弓親が一旦部屋で一時間程ごろごろしてから風呂へ向かう。頭も体も洗い終わって湯船につかると、周りにわらわらと隊士達が集まってきて夏梨について質問攻めにあってしまった。

「あの子誰なんですか？」

「なんでうちの隊で預かることになったんです？」

「どれくらいここに居るんですか？」

「入隊じゃないのは何ですか？」

「もしかして一角さんの妹なんかですか？」

全員が一斉に質問を投げかけてくるので聞きとれやしないうる

さいだけだ。

初めはその迫力に押されていた二人だったが、30秒のしないで一角が限界を迎える。

「うるせえ！俺が知りたくらいだ！」

「そうだよ。あんなの隊長の気まぐれだよ」

一角の大きい声に隊士達は静まる。

それでも一人の隊士が小さい声で聞いてくる

「でもそれってあの子実は滅茶苦茶強いつてことですか？」

その質問には一角が答えた。小馬鹿にしたように笑って。

「そりゃねえだろ」

それだけ言うと湯船から上がってしまった。

一角が脱衣場で体を拭いていると水場と脱衣所を区切るドアをバンツと大きい音を立てて閉めた弓親がいた。

「どうしたんだ」

「いや、一角が上がってからまた質問攻めにあっちゃってさ」

「そりゃ災難だな」

「それでおもったんだけど、うちの隊ってなんで美しくないんだ」

「今頃かよ」

「もつずつと前から思ってたよ。髪型も顔も」

「あつそ」

そんな話をしながら服を着て、男湯というのれんをくぐって廊下に出ると、丁度女湯から出てきた夏梨とやちると鉢合わせした。

「お、一角と弓親」

「てゆうかお前ら風呂長くねえか？」

「そつ？」

「だって君たち隊主室ですぐ入ったんでしょ？そしたらもう一時
間半くらいはいつてる」

「広かったから泳いだりしちゃったんだよね？リンリン」

「そう！」

「ガキ」

「だってこんな広い風呂入んの初めてだったし」

「はあ？そんなはずねえだろ」

「そんなはずあんの」

「はいはい、終り。副隊長も君も早く寝なよ」

「うん。…あ、そうだ！」

夏梨達に背を向け歩こうとしていた二人が振り返る

「なんだよ」

「二人のどっちかあたしに稽古つけてくれない？もちろん刀の」

「へえ、そういうのだったら一角の方がいいと思うよ」

「そうなのか！じゃあ一角、頼む」

「…まあ本当に強くなりたいってんならやってやってもいいぜ」

「強くなりたいに決まってるじゃん！」

「なら明日六時半、第二道場に来い、朝飯は食べとけよ」

「わかった」

「遅れるなよ」

「当たり前」

こうして夏梨は一角に稽古をつけて貰うことになった。

翌日・第二道場

六時6時27分、まだ太陽は東の方にある。

まだ早朝の部類に入る時間帯だろう。チュンチュンと小鳥のさえずりが聴こえてくる。

それなのにすでに道場には素振りをする隊士の姿がちらほら見える。さすが十一番隊といったところか。

そんなさわやかな朝に大きな声が響いた。

「遅い!!」

「ええー!まだ六時半三分前!」

「師範を待たせるな」

「…はい」

ちなみにやちると弓親は壁側でその様子を見ている。

理由は?面白そうだから?だそうで。

「一角ノリノリだね。ああゆづの好きだから」

「だね!」

「お前の今の実力が知りたいからとりあえずこれ使って俺に向かってうつてきてみる」

そう言つて一角は夏梨に竹刀をぽいつと投げる。

「うん。…じゃあいくよ」

「こい」

カン、カン、カン、カン…打ち合う音が道場に響く。

「よし、止め!」

一角のかけ声で夏梨は竹刀の動きを止め、一步下がった。

「どうだった？」

「…はつきり言うと…」

「はつきり言うと？」

「…なんだ！あの太刀は！！」

「ええ！？」

「まるでなつてねえ。よくもまあこんなんで逃げ回れたこつた」

「まあ、あたし誰か刀教えてもらったことないしさ」

「いや、それにしてもひどすぎる」

唯一喜助に相手をしてもらったこともあったが、親切に刀の使い方から教えてくれるはずはなく、というか情けない話だが、逃げ回つてないと死にそうだったくらいだったためそんなとを気にしている余裕はなかった。

夏梨の太刀はまったく刀の使い方がなつてなくせに自己流だからもう、とにかくひどい有り様なのだ。

「俺が基本の基本から叩き込んでやる！」

「お願いします！」

（30分後）

「こつだツつってんだろ！言う通りにやれ！」

「え？こつ？」

「ちつがう！こつ！」

「待つて…こつ？」

「アホ！何度言つたら分かんだよ！！」

「教えてもらつてるから下手したてに出てたらなんだ！少しは時間をくれ！」

「なんだと！教えてやつてんに！！」

「うっ…」

横で見物している二人は飽きる様子もない。ぎゃーぎゃーと騒ぐ一角と夏梨のを楽しそうに見続ける。

「あの二人って結構似てるね」

ぽそりと呟く弓親

「確かにそうかも…」

「あの夏梨見てるとなんか誰か思い出すんだけど…誰だろ」

「んー、誰だろ」

（さらに4時間半）

「結構様になってきたじゃねえか」

「本当?! よっしゃー!」

「午前中はこれくらいにしとくか。昼飯食いにいこうぜ」

「そうだな、お腹減った!」

ということで見物していた二人も含めて四人で食堂へ。

「おいしそう!」

からあげ定食を目の前にして夏梨が声を上げる。

「そこまで言うほどか?」

「いや、すごいお腹減ってたしな」

「あっそ。早く食べる」

「うん」

唐揚げをお箸で口に運ぶ。

上げたてでとても美味しい。

「そう言えば夏梨ちゃんは誰に霊圧をあげる訓練に付き合ってたの？」

「んー、いろんな人に教わったからなあ」

「そうなの」

「うん」

「昨日の大浴場が初めてって言ってたあたり死んで尸魂界に来てから悪い地区に送られたでしょ」

「え何で分かるんだ？」

「まあ、30地区くらいまでなら銭湯があるし、ないとなると悪い所出身かなって」

「おお」

「まあ尸魂界生まれじゃないのは確かだって分かったよ」

「え？尸魂界で生まれる人っているのか？」

「そうだよ。死神の多くは尸魂界で生まれた人達だよ」

「そうなんだ」

「で、一地区から順に環境が悪くなって八十が最悪。あそこに送られて生きてられる魂魄は少ない」

「え、でもあたし…」

夏梨が自分も八十地区だと言おうとした時、一角が大きな声を上げる

「やべえ！もうこんな時間だ！仕事間にあわねえ！！」

時間が思っていたものより進んでいたらしい

「あ！急がないと！」

二人は慌てて立ち上がり、食器返却の方へ言ってしまった。

と思いきや、食器を返した一角はこちらへと戻ってきた。

「どうしたの？」

「また二時からだ。付き合ってる。今度は第五道場」

「わかった」

夏梨が返事したのを聞くと食堂の出口にまっしぐら。よく見ると扉の所で弓親が一角を急かしていた。

二人の姿はあっという間に見えなくなった

「速いな、あの二人」

「うん、あたし達も食器片付けてこよ」

「だな」

ということとで食器を返してからやちるの部屋へ向かう
着くなり夏梨は床にころがる。

「は、ここ着いたら疲れがどつと…」

「あはは、じゃあここでしばらくお昼寝する？」

「そうするー」

「うん、1時45分に起こして上げる！」

この細かい時間はやちるなりに考えた、2時に第五道場に間に合う
起床時間だ。

「ありがとう」

「あ、はいこれ毛布掛けないとね」

「うん、ありがとう」

休憩を挟みながらやっていても5時間も竹刀を振り回していればそ
りゃ疲れる。

夏梨はすぐに眠りに落ちた。

「あの子、どうなの」
「どろろって何がだよ」

さっき慌てて食堂を出てきた二人はなんとか間に合ったようで、今は瀟霊艇の見回り中。

「剣の実力とか」

「最初は全くと言っていいほど素人な使い方だった。飲み込みも悪いと思つてたんだが、あれは今までの癖をとるのに苦労しただけで、結構早いらしい」

「それなら教えがいありそうだね」

「まあな。…なんか引つかかんだよあいつ。なんか…」

「そう？ただの子供でしょ」

「や、そうゆう意味じゃなくて…なんでいうか…」

「よく分かんないけど、あんまり深く考えなくていいと思つよ」

「…そうだな」

十一番隊と稽古（後書き）

ややこしい所があつたみたいなので補足説明。
まとめることです。

・初め各隊長格に伝わっていた情報は？黒崎一護の妹の片割れ捕獲
そのことで侵入者が来るかも。もう片方も現在搜索中。？ということ
とだけ。

・侵入者が例の片割れであることは元々誰も知らず、直接あつて話を聞いた勇音とルキアがそれを知り、そのルキアから教えてもらった日番谷、乱菊、恋次、白哉のみが知つた。つまり他の全死神はそれを知らない。

・夏梨と会つた死神でも一護の妹であることを知る人は少ない。（
知らない死神：春水、七緒、剣八、一角、弓親、やちる、修兵？…
e t c)

うまくまとめられなくて、すみません。

また分かりにくい所があれば、質問ください。きちんと説明します。

では、感想をいただけると幸いです。

搜索と対決

「かっぽーん」

「あゝ、つつかれたー」

あのあと夏梨は二時から七時まで。またも五時間刀を振り続けた。昼食後にお昼寝をしても疲れが取れるわけない。午後はもう死ぬ程辛かった。特に後半でやった隊士との試合はもう本当に死ぬかと。そして今はやちると一緒に風呂へ来ている。

「お疲れ様、リンリン」

やちるの言葉に天井にやっていた目をやちるに向けて夏梨は返事する。

「…ありがとう。でもさ…リンリンってやつばやめない?」

「ええ〜!!なんで?可愛いじゃん」

「可愛くある必要ないから。普通に夏梨って呼んでよ」

「面白くない!」

「だから面白くある必要ないし!」

「…わかったよ」

「本当か!」

「新しいあだ名考えてあげる!」

「ちっがーう!」

「じゃあねー…」

夏梨を無視してやちるは考え込んでいる。

「かっしー!」

「却下」

「かりぽん!」

「ダサいから」

「かつち！」

「何語？それ」

「かりり」

「宇宙人っぽいね」

「じゃあ、かりりでいいの？！」

「だめ」

「もうー、リンリンわがまま！あたしがこんなに考えてるのに！リンリンも少しは考えたら？！」

「いや…だから夏梨って呼んでって」

「夏梨はだめ！それならいいもん！これからはハムかつ王子って呼ぶもん！」

「どこから来た！！」

やちるのは発言に夏梨も思わず叫ぶ

「ねえねえハムかつ王子！」

「なんだと！」

思わず湯船から立ち上がる。

そのあと夏梨はため息をついて湯船につかり直し、力んでいた体の力を抜いてからこう続けた。

「やっぱリンリンで」

『リンリンでいいの？！やったあ！』

『うん、うん』

『リンリン、リンリン…』

「うるせえな、あっち」

一角が湯につかりながら女湯のある方の壁を見る。

天井が繋がってたりはしないのだが、夏梨とやちるの声が男湯の方まで聞こえてくる。

「夏梨ちゃん元気みたいだね」

「そうだな。でも午後は相当キツかったはずだぜ」

「何やったの？」

ちなみに弓親は十一番隊では珍しい、なんでもそつなくこなせてしまう人材のため、書類整理などの仕事をよく（いや、全て）隊長から押し付けられてしまう。今日もそんなわけで書類整理をしていて午後は夏梨の稽古の見物が出来なかったのだ。

「最初は俺が剣術を教えたんだが、基本は出来てたんでその辺にいた隊士共と試合やらせたんだが…すごかったぜ」

「ふ〜ん」

「十七勝四敗だ」

「はああ?!」

「だよなー」

「だってうちの隊士は他の隊士より強いよ?!」

「ああ。…まったく、先が楽しみだ」

「くそつ。夏梨、どこ行つたんだ…！」
苛立った様子で言う冬獅郎だが、書類の上で動くその手は止まらない。

「そうですね…。でもなんの報告もないので無事ではあるんですけど」

乱菊も珍しく真面目に机に向かっている。

あの日、ルキアが夏梨を捕まえたとき十番隊に伝えにきてくれた時から一日経った。

しかし状況に変化はない。

そう、あの日冬獅郎は隊主室で仕事をしていたのだ。

乱菊は長椅子でサボっていたが。

そんなとき、急に扉が開き放たれて…

そこにあつたのは普段なら必ず礼儀よく扉を叩いてから入ってくるはずのルキアの姿だった。

そしてこう言つたのだ。

「夏梨を保護しました」と。

それを聞いて冬獅郎と乱菊はすぐに夏梨がいるというルキアの部屋へとルキアに案内してもらい、向かつたのだが、着いてみるとそこはもぬけの殻。

ルキアの推測によれば『朝はなかった箱が机の上にあります。きっと私が夏梨らを部屋で待たせていた時に部屋に届け物をもつた隊士が私の部屋にやってきて、見つかつてはいけないと夏梨とジン太は逃げたのではないでしょうか』とのことだ。

それからはもう手がかりもなく、探すことすら出来なかった。

「あの子どこに逃げたんでしょね」

「さあな」

「またどこかの隊に潜り込んでたりして」

乱菊は冗談で言ったつもりだったらしいが、冬獅郎はその言葉でピンと来る。

「その可能性が高いかもしれないな」

「え？」

「今日一日侵入者が目撃されたという報告はきていない。どんなに上手に隠れてもそううまくはいかねえ筈だ」

「あ！」

冬獅郎はそれに付け足すように続ける。

「それにあいつには霊力がある。朽木から聞いたあのジン太って奴にもだ。なら、当然腹が減る筈だろ？」

「そうですね。そしたら食料調達にどっかの隊に潜り込んでそうですね。でもそうだとして、具体的にどうやって夏梨を探すんです？」

「各隊ぜんぶあらう」

「え?! そんなの何日かかるか」

「松本、お前夏梨の霊圧憶えてるよな」

「まあ憶えてますけど」

「じゃあお前は三、五番隊を探せ。俺は七、十一、十二を回る」

「一、二、四、六、八、九、十三はいいんですか？」

「よく考える。まず一番隊なら山本総隊長が夏梨をすであぶり出してるだろっ」

「確かに」

「次に二番隊は隠密機動と繋がってる。異端の夏梨を見つけ出すのは簡単だ」

「はあ…」

「四番隊は虎徹副隊長が下水道でやられてる。ということは虎徹隊長は夏梨の顔を知っていることになる。それこそ虎徹隊長が目を覚ませば？あの人が侵入者です？と指差されて終わりだ。そんな危険な所にとどまる程夏梨はばかじゃねえだろ」

「そうですね。」

「六番隊は阿散井がいる。夏梨を見つければすぐこっちに伝えてくる筈だ。十三番隊も同じだ」

「あ、そっか」

「八番隊の隊長は夏梨が一人増えたら気づくだろ。…女好きだからな」

「あー、享楽隊長ですもんね」

「あと、噂だが檜佐木は夏梨を知っているらしい。だから夏梨が九番隊に居座ることはできねえ」

「でも修兵なら夏梨を匿いそうだけど」

「いや、あいつは案外頭が固てえからそれはないだろ。逆に匿いそうなのは十一、十二だろ」

「なんでです？」

「少しは自分で考えたらどうだ！十一番隊は掟なんざ関係ねえだろうし、十二番隊なら夏梨を実験材料として保管してそうだろ」

「あ！早く助けないと夏梨が薬漬けに！」

「あ、そうだ。十一番隊はお前に任せた。朽木と阿散井にも手伝ってもらえ。どうせ仕事なんかしないで瀨霊艇中を回って夏梨を探してるだろうからな」

「分かりました」

「頼んだぞ」

「はい。頼まれました！」

早速二人は動き出す。

さつきまで進めていた書類を放り出して。
乱菊は扉から、
冬獅郎は窓から隊主室を出た。

その日の夜中・十一番隊

隊舎内はすでに寝静まっている。

一角は尿意で目が覚めてしまい、今布団をぬけ、部屋を出ようというところである。

弓親を起こさないようにそっとドアを開ける。

隊舎の廊下の壁には等間隔で窓がついていてそこから月明かりが入ってくるため、明かりをつけずとも廊下にはある程度の明るさがあった。

便所は一角の部屋を出て右に少し進んだところにある。ちなみに左に行けば、20mくらいで行き止まりとなっている。

そのため当然一角は右に行こうとしたのだが、視野の左端に人影が入った。

右に曲がるうとしていた体をぐるりと戻し、人影の方を見る。

そこにあっただのは窓に腰をかけて窓の外を見ている黒髪の少女、夏梨の姿だった。

夏梨の横顔が一角の方から見てとれる。こちらには気づいてないらしい。

その横顔は辛そうで、寂しそうだった。

今にも泣くのではないか、という感じだ。

何を考えているかなど一角には検討もつかなかったが、その顔を見ていると、大丈夫か？と声をかけそうになってしまう。

何秒程しかその様子を見ていなかっただろうが、その時間はとても長く感じ、一角はいよいよ夏梨に声をかけようと思ったとき、夏梨は窓枠からぴよんつと飛び降り、気合いを入れるように頬をパンパンと叩いた。

その急な夏梨の動きに一角はうおつと声を上げそうになった。

そしてその夏梨の顔からはさっきまでの表情は無くなっていて、何かを決意をした強い目をしていた。

その光景を見た瞬間一角の脳裏で夏梨の姿が誰かとかぶった。

その強い目が

その決心が

その…

(誰だ？…今夏梨が別の誰かに見えた…？)

しかし考えようにももう尿意に限界がきたようで、夏梨に気づかないように便所へとかけていった。

次の日の朝も六時半から一角に稽古をつけてもらっている。

「基本はもう出来てる。あとは実践だ。今日はもうずっと試合だ」

「おう！」

「うれしいか？」

「試合って楽しいからな」

「わかるぜ」

「じゃあ今日は誰から？」

「あそこの隅のやつからだ」

「え?! オレっすか？」

急に指を指された隊士の反応は常識的なものだ。

「そつだ。こっち来い。こいつの相手しろ」

「馬鹿にしないでくださいよ! そんな子本気で相手できないじゃないっすか」

「あ、あ、?」

その言われように夏梨ががら悪く隊士を睨む。

「そつかよ。じゃあ圧勝なんだな？」

「あたり前っす。言っときますけど手加減は出来ない質なんで」

「手加減なんて必要ねえ。さっさと位置に着け。」

隊士はなめられているように感じたのか、苛立っているように位置に着く。

ちなみに夏梨もさっきまでの隊士の言い様に不機嫌そつだ。

「よーい、はじめ！」

カン、カン、カン!

勝敗はすぐに決した。

夏梨の勝ちだ。

「あつれー？手加減できないんじゃないかなかったのかあ？てことは今の本気？」

さつきまでの仕返しと言わんばかりに夏梨は隊士に皮肉。

「てんめえー、ガキのくせに偉そうなんだよ！」

「そのガキに負けたのは誰だよ！」

「い、ーっ」

睨み合いに一角が間に入る。

「お前は相手が子供だからと油断し過ぎた」

まず隊士に一言。夏梨は一角の後ろで隊士に向かって勝ち誇った顔をする。

しかし一角が夏梨の方に振り返ったので慌てて表情を引きつった笑顔に変える。

「な、なんだよ？」

「夏梨、今言った通りこいつは油断してた。勝てたのはそのおかげだ」

「うっ」

痛い所をつかれた。

確かに今の隊士が真剣にやっていたら負けていたのは自分だったかもしれない。

「ま、でも勝ちも勝ちだな。…分かったらさつきと次だ」

「はい」

あっという間に過ぎていき、気づけば昼時。食べ終わった後はまた道場へ向かう。

そんなこんなでただいま午後三時。

「一角！」

「なんだよ」

「そろそろ隊士の相手も物足りなくなってきたんだけど」

「それがどうした？」

「一角が相手してくれよ」

「はぁ？」

「強い相手と戦いたいつて言っただよ」

「俺の強さを知らないな？」

「そうだな。一角がどれくらい強いかなんてあたしは知らない。…

でも、弱かないだろ？」

「おもしろえ」

「もちろんだけど、使うのは斬魂刀な」

「たいした度胸だ。そう言っの好きだぜ」

「そりゃどーも」

「竹刀片付けて来い！」

「おう！」

夏梨はぱたぱたと走ってしないを片付けてきた。

そして壁際に置いてあった斬魂刀をとって一角の前に立つ。

「怖くねえのかよ」

「全然。怖いはずないだろ」

お互い鞘から斬魂刀を抜く。さっきまで周りで鍛錬をしていた隊士らは端に寄って見物客と化していた。そしてひそひそと声が聞こえてくる。

『副隊長とやり合っなんぞ…』

『竹刀ならまだしも斬魂刀だと?!』

『馬鹿かよ。死ぬ気か』

『あのガキ終わったな』

『ああ副隊長に勝てるわけねえ』

『調子に乗りやがって』

夏梨が耐えきれず、反論しようとした時、

「少しは黙ったら?」

怒鳴り声でなく、静かな声。

それを言ったのは隊士達と並んで壁際に居た弓親だった。

「確かに一角に勝負を挑むなんてあの子はどうかしてる。…でも、君たちは勝利の決まった勝負しかしないの?ちがうでしょ?…それに、小さい声でそんな事を言うなんて美しくない!」

道場の中は静かになった。

弓親は辺りの隊士をぐるりと見回してから一角と夏梨に目をやった。

「じゃ、始めたら?」

「おう!ありがとな。弓親!」

元氣にお礼を言う夏梨。

「はいはい」

「夏梨、俺は手加減しねえからな」

「そんなのこつちからお断りだ」

「…いくぞ。構える」

しばらく二人は睨み合っていたが、その緊張状態はすぐに崩れた。

カキイン、カキン、カキン
高い音が道場に響く。

カキイイン

夏梨が合間をとってから一角の上に飛び上がり体を宙に
刀に重さをかける。

しかしすぐに後ろへと跳ね返されてしまった。

それでもひっくり返ることなく、きれいに着地する夏梨。

カキン、カキン、カキン

打ち合いがつづく

もう一度夏梨は一角の懐へ踏み込む。

左肩の上に来た刀を右にかわして一角の腹にむかって刀を振った。

「?っ…!」

一角の腹から赤が散る。

その光景に周りの隊士はざわめく。

「まだまだあ!」

夏梨はまたもつつこむ

「調子のんなボケ!」

刀で押し返される。しかし、跳ばされる寸前、夏梨は足に靈力を溜
め、一角の腰を蹴る。

「調子のんなつつつてんだろ! 延びろ・鬼灯丸!」

「それならこつちも! 切り裂け・藍月!」

一角の斬魂刀は槍状の形に。

夏梨のは柄も鏝もない状態に。

その斬魂刀を見たとき一角の中の何かが繋がった。
今までのもやもやが消えた。

(そうか…こいつは！)

「お前…！」

「なんだよ？」

刀をお互いに振り回しながら喋る二人

「いや、なんでもねえ」

「あっそ」

カキン、カキン

夏梨がまたも踏み込んだとき、

「裂ける！鬼灯丸！」

「…！？」

背中に刃が刺さった。

夏梨は何が起こったのかわからず、反応は遅れたのだ。
走る痛み。

反射で後ろに三步跳び下がる。

「くっそ…！」

「夏梨、これは槍じゃねんだよ。これは三節棍なんだよ！そういう
計算をしない所、兄妹だよな！」

「はあ？何言ってるのッ？」

夏梨に返事はせず、刃先をびゅんびゅんと回す。

カキン、カキン、カキン！

また刀をぶつけ合うが、夏梨はさっきの三節棍を見て懐に踏み込めない。

しかたなく、一角と距離を開け…

「…月牙、天衝!!」

「月牙天衝…やっぱりお前…、一護の妹か!」

「今頃気づいたのかよ!」

一角は夏梨が鬼灯丸を恐れて踏み込んできていないのに気づく。

「ビビってんのかよ」

「…そんなわけあるか!」

恐がっている自分に気づかれた夏梨は反論するかのよつに自身の霊圧を上げる。

そして霊圧の柱が夏梨を包む。

「ほう…やるじゃねえか」

「…だろ?」

夏梨の声から夏梨が力を振り絞って霊圧を上げていることが分かる。

「じゃ、これで終わりにするか!」

そう言って一角も霊圧を上げる。

道場の屋根なんてものはすでに吹き飛んでいる。

周りにいた野次馬もとつくのとうに避難している。

「…うおおお!」

カキイイン

確かに刀のぶつかる音はした。

もちろん二人の刀がぶつかった、そう思われたとき、二人の霊圧が何者かによって押しつぶされた。

何もなかった、居なかった筈の二人の間に入っていたのは享楽春水と狛村左陣だった。

不意打ち（前書き）

みなさん。小野平優耶って憶えてますか？
空座高校に転校してきた子ですよ。

不意打ち

「狛村隊長！享楽隊長…！なんでここに…?!」

「これだけの霊圧の衝突。我々が気づかぬと思うか？」

「近くにいたのが僕らだけで良かったねえ」

一角の刀を受け止めているのが狛村。

そして夏梨の刀を受け止めているのが享楽だ。

夏梨は享楽を苦しげな顔で睨む。

享楽はその視線に気づき、夏梨の顔をじっと見た。

「その顔、その斬魂刀、なによりその霊圧…。きみ、もしかして一護君の妹かい？」

「…!!」

「やっぱりか…。ごめんね。僕たち、君を捕まえるように言われているんだ」

「そ、そんなこと知るか！」

そう吐き捨てて夏梨は刀を引いて後ろに跳び下がる。

享楽が「お？」と反応してすぐ、夏梨は瞬歩でその場から逃れた。

「ありやりや、逃げられちゃったね。」

一角と狛村もお互い刀を鞘に納めた。

「…致し方ない。あの少女は後回しだ。先に班目三席から聴取するか」

「そつだねえ。追いかけてこは疲れるからね」

一角には意味が分からなかった。

隊長達の力を持ってすれば、夏梨を捕まえるのなんて簡単だ。それ以前にさっきの場面でなぜ夏梨を切り捨てなかった？

でも、それをしない。

なぜ？

答えなんてものはすぐに分かる。

「享楽隊長…、狛村隊長…ありがとうございます」

「たいしたことしてないよ。それどころか僕らにはこれくらいしか出来ない。ごめんね」

「ああ、…我らは恩人に仇を返すことしか出来ない…」

夏梨は一護の血縁だ。静霊艇の恩人の大切な人。

その大切な人を傷つけることしか出来ない自分たちが苛立たしく、歯がゆい。

十一番隊からある程度の距離がとれた夏梨は奥まった道に身を隠していた。

これから遊子を探すにしても手がかりがなさ過ぎる。

そこら辺の隊士に問いただきたい所だがさつきみたいにむやみに靈力も使わない方がいいだろうから、出来るだけ安全なルートを進みたい。

しかし考えていると馬鹿らしくなる。

なぜなら、ここに安全なルートなんて一つもないのだから。

ならば行動を起こす他あるまい。

顔を上げて前へ進む。

そのみだ。

今夏梨が歩いているのはある程度の人通りがあるので情報収集にはもってこいだ。

目立たないように霊圧をなるべく抑えるようにしているがなかなかうまく出来ない。

前まではうまく出来ていたにも関わらず。

まあ、そんなことはどうでも良くて、それとなく、聞き込みを開始する。

『侵入者は誰かを助けにきているらしいのだが、何か知らないか？』

『どこかに子供を捕らえている隊は無いか？』

似たような質問を通りすがりの人に訊いたが、どの人も首を横に振る。

ということとは、遊子はどこかの隊の牢屋ではなく、他の所に閉じ込められているということだろう。

しかし夏梨は瀟霊艇のことを深くまで知らないのでもんなものがどこにあるかなど予測できるわけもない。

それなら瀟霊艇のどこかにいるであろう知り合いを捜すしかないだ

ろう。

ということ、夏梨は人探しを始めた。

現世・空座第一高校 三時間目／教室

優耶もすっかりクラスになじみ、転校生であったことを忘れる。そしてただいまの授業は数学。

先生が黒板の前で数式を書きながら説明をしている。席が前後と横の織姫と優耶、たつきはルーズリーフを回して絵しりとりにしている。もちろん先生も聞こうとはするが集中できる筈もない。

キーン、コーン、カーン、コーン

授業終了のチャイムが鳴り、生徒達は席を離れる。

「石田くん、ノート写させてくれない？」

「うん、お願い」

「井上さんに小野平さんか…。また授業中に遊んでいたんだろう」「うっ…」と優耶

「一緒に遊んでいる有沢さんはきちんとノートを取っているんだ。見習うことだな」

「でも石田君もノートってきれいだから自分でとるより分かりやす

「いんだよね」
と織姫。

「褒めたって駄目だ。それに井上さん、きみは特にだ」
「え？なんで？」

織姫は目を丸くする。

「前にも君たちに貸したとき」
「うん」

「ノートに何とも言えない匂いがついてた」
「あー、あれは前にも説明したでしょ？カツ井のバナナクレープあんみつがけ風味のちらし寿司を食べながらやったんだよ。でも汚れてなかったでしょ？」

「いや、汚れてこそいないがあ匂いは一週間程消えなかった」
「えー？美味しそう匂いでしょ」

「食欲がそがれるな」
「それって私、関係ないよ。昼休みまでに返すから」

「いや、そのために国語の時間にやるからまた国語のノートも取れずに借りに来るオチに決まってる」

「うぐっ……」
「諦めて他から借りることがな」
「はーい」「はーい」

「佐渡くん、ノート貸してくれない？」
「お願いします」

と織姫、優耶は今の一連の話を聞いていた石田の前に座るチャドに頼み込む

「すまん、俺もノートとっていない」
「そっかあ」

放課後

「佐渡君、井上さん、浦原さんから連絡はきたかい？ほら、夏梨ちゃん一人じゃ危なそうになってきたから尸魂界に行って助けてやってくれってやつ。」

「ああ」

「うん。まあ連絡くれたの雨ちゃんだったけどね。」

教室にいるのは雨竜、チャド、織姫の三人だけだ。

窓の外からは部活動をしている生徒の音が響く。

そして教室の扉の前には不振な影があった。しかし三人は気づかない。

「もう行くかは決めたのか」

「…」（佐渡、コクリと頷く）

「あつたりまえだよ。もちろん行く」

「だろうと思った。それじゃあ今日の夜に浦原商店で」

「…」（コクリ）

「うん」

? ガラリッ

「どこ行くの?」

「どっつって瀨霊で…」

急に会話に入ってきたのは優耶。教室に帰ってきたらしい。織姫は思わずその質問に答えてしまう。

「瀟霊艇…ね…」
小声で呟く優耶。

石田、チャド、織姫はたらたらーっと顔から冷や汗が。

「い、いや、違うよ！これはだね…！」

「ほ、ほら、私の想像の話だよ！私よくそつという話するでしょ？」

「そつそつ、井上さんも早くその癖直しなよ！」

あはははは、と笑う三人、いや二人。チャドは固まってしまっている。

なんともきつい言い訳だ。

どうだ？いけるか？という目で雨竜と織姫は優耶の顔をちらちらと見る。

その時チャド、雨竜、織姫が見た優耶の目は鋭かった。

やばい、画馬鹿にしているとかわれたか。と思っていると、優耶は顔を上げてにこつと笑って言った。

「ねえ屋上いかない？」

優耶の一瞬の様子を三人は不審に思ったが、その次の笑顔で三人は安心してしまった。

織姫は元気よく、「うん、いいよ！今日天気いいしね」

ということ教室から廊下へと出て上りの階段を目指す面々。

優耶を先頭に三人は屋上へとたわいもない話をしながら階段を上っていく。

優耶が屋上の扉を開け、三人が通るのに外で扉を押さえて開けておいてくれた。

三人が入ると優耶は扉をガチャリと閉めて口の端を歪めた。

「ねえねえ優耶ちゃん、こんな所に連れてきて、どうしたの？」

後ろにいる優耶に振り向きながら織姫が訊ねる。

「…うん、ちよつとあんた達に用事があったさ」

優耶の口調と少し違う。

いつもなら、？きみ？という所を？あんた？と言っている辺りなど。

「？ 何かな？」

「ちよつと…、ここで死んでくれる？」

優耶はさっきまで小さかった声を大きくして最後の言葉を強調した。

そう言つと優耶は間髪入れずに義骸から抜けて死神の姿となった。

そして腰に下げていた刀を抜くと目の前の織姫に向かって振り上げた。

「井上！」

チャドと雨竜の声がかぶる。そして二人が助けに優耶と織姫の間に入ろうとした。

しかししに前に

「四天抗盾！！」

屋上に織姫の大きな声が響いた。

そう叫んだことに驚いてチャドと雨竜の動きを止める。

織姫のピンからオレンジの光が放たれ、優耶と織姫の間に盾を作る。

「そんなので私の攻撃が防げると思ってるの?!」

それでも優耶はそう言いながら盾に刀を振り下ろす。

そのとき、盾は刀の衝撃を拡散するために爆破し、同時に椿鬼が攻撃を繰り出した。

予想外の攻撃に遭った優耶は後ろに吹き飛ばされる。

しかし優耶はバランスを取り返し、きれいに着地する。

「織姫にそんな攻撃力があるなんて予想外だったなあ」

「…ありがとう」

「井上さんいつの間にかそんな技を？」

「凄かったなあ…」

「うん」

「あーあ、やんなっちゃう。そんな仲良しこよしで勝てると思う?」

「そうだ。それによくもそんな本性を隠していられたものだな」

「…目的はなんだ」

雨竜、チャドの順。

「目的?最初に言ったでしょ?あんた達が計画の邪魔をしないようにここで消えてもらうの」

「…計画だと?何の計画だ」

「おっと口が滑っちゃった。それに、計画が何か、なんて事これから死ぬ人なんかには教える必要ないから」

「言っじゃないか」

低い声でチャドが言う。

「ま、死なないためには私を倒すしかないかな」

「後悔するぞ」と雨竜

「あんたらがでしょ。頑張って足掻いてみな」

不意打ち（後書き）

ああああああー！
続きが分からない

私は基本、流れを考えずにその場で考えます。（だから伏線少ない）
いや、考えるというか、文章を打ち始めると話が浮かんでくる感じ。だから自分で書いてても『え？何この展開?!』とってしまったりともしばしば。

（だめだめ人間）

そして今話は話の展開に詰まった。
もうなんか…

ああああああ！

あー、コホン。
すいません。

夜中の変なテンションで書いてしまいました。

はい。誤字、この技名間違ってるね？みたいなのがあったら教えてくれると助かります。

感想お待ちしております。

動き出した影

人探し…簡単に言うがこれがなかなか難しい。もう日は沈み、辺りは暗くなっている。お腹も空いてきた。どこかの隊に入り込んで食事をとりたい所だが、今それをするのはリスクが高すぎる。

そんなわけでたらたらと道を歩く夏梨。

人とすれ違うのも少なくなってきた。手がかりもなく探しまわるのは無謀すぎたと夏梨は今頃気づくが、どうしようもない。

今日は空腹に耐え、そこから寝るしかない。近くの路地に入り、早めに寝ることにした。

翌朝。

夏梨はまだ眠りの中である。

そんな夏梨の前に死神二人の影が見える。

「はあ…こんなところで寝んなよ。探す方の身にもなってほしいもんだぜ」

「私もそれは同感だが…、無事に見つける事が出来たのだ。良かったではないか」

「そうだな。んじゃ、そろそろ起きろくそガキ！」

そう言いながらしゃがみ込み夏梨の頭をべしべし叩く。

「おい、そんな手荒くしなくとも……」
「つつう……」

夏梨は重いまぶたを上げて自分の上にある二つの顔に焦点を合わせる。

「…恋次にルキ姉！つていうか恋次頭叩くな！」

「やっと起きたか」

「心配をかけおつて」

「うつ…ごめん。ていうかなんでここに？まさか夢オチ？」

「何を戯けておるのだ。貴様が私の部屋より消えてからと言つものは私達はずつと貴様を捜しておつたのだぞ？」

「わ、悪い」

「いや、いい。鍵をかけ忘れた私にも比はある。それよりジン太はどうしたのだ？」

「浦原さんに呼ばれて現世に帰った」

「む、そうだったか」

「ま、細かい事は十番隊に戻ってから話そうぜ」

「え？なんで十番隊？」

「そこを俺たちが本拠地にしてるからだ。今回俺らは出しゃばれねんだ」

「？よく分からないけど、十番隊は冬獅郎の隊だったよな」

「そんな通りだ」

「んじゃ、今から十番隊舎まで飛ばせ。おい、夏梨お前瞬歩でできるよな？」

「もちろん。でもんな事しなくても歩いてけば良くない？」

「少しは頭使え。俺とルキアとガキ一人じゃ組み合わせ的に目立つんだよ」

「あ、そっか」

「んじゃ、きつちり着いて来いよ」

「おう」

夏梨は先に瞬歩した恋次とルキアにつづいた。

現世・空座高校／屋上

「ほら、どうしたの？攻撃してこないの？」

三人は武器こそ手にしているものの、優耶から距離をとって、様子をうかがったままだ。

「せっかく先手を譲っててやったのに……いいよ、あたしからいく！」
ひゅん！舜歩ではないようだが、凄く早さでチャドの目の前に移動する。

そして刀を横からチャドの首にむけて振る。

チャドはとつさに腕にだしていた盾で防御する。しかしいきなり過ぎてうまく構える事が出来ず、吹っ飛ばされ、フェンスに叩き付けられ、

「がはッ……！」

口から血が出る

優耶はにやりと笑う。その瞬間、雨竜は優耶の後ろに飛廉脚で移動し、ゼーレシユナイダーで背中を斬りつける。

「なッ……！」

優耶の背中から血が噴き出す

雨竜は飛廉脚でさっきまでいた位置に戻る。

優耶は雨竜の方を見て、歯ぎりして飛びかかる。
「?カキンッ!

雨竜は冷静に優耶の相手をする

「余裕ぶっこいてる暇あんの?」

「仕方ないじゃないか。君が思いのほか弱かったんだ」

「へえ、言ってくれるじゃない」

「…ほら後ろ」

「言われて振り向く馬鹿がいるか!」

そのとき、優耶の背中に鋭い痛みが。

優耶が振り向くと、そこにはフェンスの所に織姫がピンを押さえて
いる織姫がいた。

「やるじゃん。あたしの予想じゃあんたはある程度仲良くなっ
ればあたしに攻撃できないような子だと思ってただけだね」

「そんなこと言ったら何も出来ないこと。もう嫌な程分かって
るわ」

「そこに来てほしかったんだ」

雨竜の声が聞こえてきて、優耶が振り返ったときには時既に遅し。

「なんだ…?!これ!」

優耶を中心に五角形のような陣が現れた。

「シユプレンガーって言うんだよ。そして、これを一滴たらすと…」
雨竜が言っていた通り、すごく小さな筒から一滴たらすと、強い光
が放たれた。

光が治まるって雨竜、織姫、チャドが優耶に近づく。

「さあ、答えてもらおうか。なんでこんな事をした?」

「…仕方ないなあ。特別だよ?」

そう言つて雨竜を睨んでいた目を空に移して、こつ続けた。

「…すべては輝ひかるのためだよ」

「輝？」

「輝つてのは私の弟。あの子はね、生まれながらに靈力が高くて、体に過度の負担がかかつて弱つてた。あるとき、輝は癩癩を起こして靈力を暴走させた。それで、瀟靈艇に危険視され、連れてかれた」

優耶は空を見ていた目を閉じ、開いた時には思い出を語る顔ではなく、強く、何かを決心した目になっていた。

「…あの子を助ける方法は、一つしかない。…そのために私はあの子の靈力が必要なの！人間と、死神の力を分け合つた子の靈力が！」

「…？！」「」

「どつという事だ！」

と雨竜。

「おつと、喋り過ぎちゃつたかな」

「！ 危ない！二人とも離れる！」

雨竜がいち早く靈圧の変化に気づき、声を上げるが…

「もう遅い！」

三人の後ろに優耶の分身が現れて、刀で攻撃を仕掛けてきた。

至近距離の攻撃に、三人は一撃で地面に倒れた。

「私の斬魂刀はね、こついう風に分身を作り出すことができる能力を持つてるの。いい能力でしょ？…ま、そんな状態のあんたらじゃ、説明した所で私の声なんて聞こえていかな」

十番隊執務室

「よ！冬獅郎！久しぶり」

「夏梨！無事だったのか？」

「うん。あたしなら大丈夫だよ。…それよりそっちの人は？」

冬獅郎との軽い挨拶が済んで夏梨の目は冬獅郎の奥にいる人へと向く。

そこにいたのは白い羽織を着て、頭には白いのを二本つけている人。

「あの人は私の兄の白哉兄様だ。六番隊の隊長をしておられる」
誇らしげにルキアが言う。

「へえ。よろしく」

「貴様が黒崎夏梨か…。兄に似ているな」
目を細めて白哉が夏梨を見下ろす。

「似てないと思うけど…。霊圧とかがつて事？」

「ああ、貴様らの顔と霊圧の質は似ている。特にその太々（ふてぶて）しさがな。」

「そうか？でも、白哉かぁ。珍しい名前だな」

「おい、くそガキ。隊長とかつける」

「さっきから言おうと思ってただけで、くそガキくそガキうるさい！能無し赤パインがあ！」

「んっだど?!」

「落ちて着け恋次。話が進まないではないか」

ルキアの一喝。

冬獅郎が話題を戻す。

「おい、それより夏梨。いままでどこの隊に隠れてたんだ？」（冬）
これは誰もが気になっていた所だ。視線は夏梨に集まる。

「え？なんでどっかの隊に紛れてたのがバレてるんだよ」

「はああ…。ここ三日お前の目撃情報が一切なかったんだ。普通分かるだろ」

「まあ俺たち以外それには気づいてなかったらしいがな」（恋）

「いや、お前らも俺が教えるまで気づかなかつただろうが」

恋次の調子に乗った発言にギロリと冬獅郎が睨む。

「あたしが潜り込んだのは十一番隊」

「……はあああ？！」「……」

ルキア、恋次、冬獅郎が驚で大きな声を上げた。白哉のみは黙ったままだが。

夏梨はなんで驚くかが分からないといった様子だ。

「なんでそんな驚くんだよ」

「いや、普通に考えて十一番隊は副隊長以外男だ。お前があそこに紛れられる筈ねえだろ」

「ああ、俺は万が一を考えて十一番隊も洗う事にしてたが、あそこはいないだろうと後回しにしていた」

「どうやってやり通したのだ？」

「どうやって…。地下水道で弱ってた所を剣八に拾われたらしくて（夏梨自身、気を失っていたので拾われた時の詳しい経緯は知らない）、十一番隊舎に連れてかれた。そのあとの話し合いであったがここに何日かいる事が決まって、隊舎であたしがとどまるにあたって剣八が隊士達をそのすんごい権力でもって押さえつけて、？」

隊外にこいつが居る事バラすな？と言った具合でさ。そのおかげで隊内は自由に動けたから、二日間は一角に鍛えてもらった」

恋「…十一番隊が無茶苦茶なのは知ってっけど…なんていうか…すごいな。十一番隊」

ル「ああ、隊長の権力に驚きだ」

冬「あそこは独裁国家か…？」

白「今度剣八には法を守るよう私から言っておこう」

各々感想を言う。

「大袈裟じゃないか？」

「んなわけあるか！だいたい俺たちが必死で大前の事を探してた時にお前は呑気に剣の鍛錬たあ…。いい度胸じゃネエか！！」

「え？必死で探してくれてたの？」

夏梨がキラキラした目で恋次を見上げる。それはうれしがっているような、からかっているような、たのしそうな…そんな目だ。

「？…」

「そっかそっか。あたしにくそガキくそガキ言つのも愛情1つってわけかあ」

うんうん、と頷きながら、楽しそうにする夏梨。

そこでさすがに哀れと思ったのか、ルキアが助け舟を出す。

「そんなわけあるか！こいつは心の底からお前をくそガキを思っているに決まってるじゃないか！私も流魂街に居た頃は何度チビと言われた事か！」

違った。

「ルキア…。フォローになつてないフォローありがとよ…」

「阿散井…。言いたい事があるなら言ってもいいんだぞ…?」

冬獅郎まで変なオーラを放ち始めた。

「いや、日番谷隊長は違いますよ!」

「本当かよ」

「そっかあ」

「おい、貴様ら、またも話題がずれている」と白哉。

「…」「あつ」「…」

「コホン、本題に戻ろう…。私たちはさっきまで何について話しをしていたか…?」

「ん?そついや思い出せねえ」

「なに話してましたっけ」

「なんだつたっけ?」

「…十一番隊の話だ」

「ん?じゃあお前なんで今朝十一番隊じゃなく、外で寝てたんだよ」

「ん?昨日、十一番隊にピンクの人と犬が来たから」

「…」「!」「…」

「また…、今度はなんだよ?」

「その二人…隊長羽織着てたろ」

冬獅郎が静かに訊く。

「あ、犬の方はそうだったかも。ピンクの方は見えなかったけど」

「やっぱりか…。そいつらはなあ夏梨」

と悟るように言うのは恋次。

「七番隊隊長と八番隊隊長だ」

「あゝ、そついや一角がそんな事言ってた気がする」

「聞いてたのなら覚えてるよ…」(冬)

「一角…だと？」
「ん？なんて言った？」
「一角さんって言え！」（恋）
「ええ？本人も承諾してたし」
「えええ！？一角さんが？！」
「おい、また論点が…」とルキア
何度目の脱線だろうか…。
「悪い」
「わりい」
さすがに夏梨も恋次も素直に謝る。

「じゃあ、これからあたしはどうすればいいんだ？」
「十番隊で匿ってやる」（冬）
「本当か！」
「ああ」
「んで…遊子がどこかは知ってんのか？」
「…ああ」
「どこだよ」
「今は教えねえ」
「?!…なんで？」
「飛び出すだろ？」
「…そんなに子供じゃねえ」
「…」
冬獅郎は鋭いまなざしを夏梨に向ける。
「…穢罪宮」
「せんざいきゆう？」
「あそこに白い塔が見えるだろ？あれがその牢だ。遊子はその間に居る」
窓の外を指差しながら冬獅郎が言う。

「あそこに…。約束通り、今すぐは飛び出さない。…でも、遊子に危険が迫ったら、あたしは迷わずそこに飛んでくから」

「ああ。その故知は止めない。でも一人でいくなよ」

「分かってる」

ここに集まってるのは皆、隊長格。そう時間があるわけではない。なので話が一段落ついたこの辺で白哉、恋次、ルキアは各隊に帰る。

「それでは私たちは帰る。またな夏梨。日番谷隊長、私たちはこれで」

「おつかれさまです。日番谷隊長」

「失礼した」

「おう」

「またなー！」

動き出した影（後書き）

どうでしょうか？

感想、お待ちしております。

眠りと陰謀

「たいちよー、夏梨みつきりませんでしたー」
疲れきった声で十番隊の執務室に入ってきたのは乱菊。

「つて、あれ？夏梨?!」

「ども」

扉に背を向けているソファ―に座っていた夏梨は首を後ろに回して執務室の扉の方に挨拶。

「なんで？」

「今朝、阿散井と朽木が見つつけてきた」
机について筆を持ち、その動きを止める事なく乱菊に答える。

「え〜ッ！」

乱菊は大きな声を上げながら、机を挟んだ夏梨の向かい、つまりは冬獅郎に背を向けているソファ―に倒れ込む。

「すいません。迷惑かけたみたいで」

「せっかく、今日は真面目に仕事したのに〜ッ」

「何言つてやがるんだ。そこにたまっている書類の山が見えねえのか？」

冬獅郎は書類から目を離し、ソファとソファの間にある机を見やっ
た。

「夏梨を探す仕事ですよ」

「書類の処理が終わって、余裕ができたなら探しにいつてくれと言っ
たんだ」

「え〜?!隊長そんな事言っていましたっけ？」

「ああ。でも、俺がその事を言った瞬間執務室を出て行ったからなあ。訊いてないとは思ったぜ」

さざぎ、いよいよ空域重くなってきた。冬獅郎に聞いた事あったけど乱菊さんって本当に仕事しないんだなあと思いつつも、この空気にさしもの夏梨もここで気を使い、話をそらす。

「あのさ、お取り込み中わるいんだけどさ、お腹へってきたな。時間はすでに七時。昼をすっかり食べていたとしても空腹を覚える時間帯だろう。」

「そう言えばそうだな。食事は持ってきてやる。待ってる」

「なんかごめん」

「あれ？一緒に食堂に行けばいいだけの話なんじゃないですか？」

「誰も顔を見た事のない新顔が、隊長、副隊長と食べるってアイツ何もんだよ、って話になりかねえだろうが。夏梨は今、出来るだけ目立たねえ様にした事にこした事はない」

「そういうもんですか」

「お前夏梨の立場忘れてねえか？侵入者だぞ」

「あ、そうでしたね！」

「…わかったら行くぞ」

「はい」

「お食事の時間です」

「あ…、はい」

「ここに置いておきます」

「…ありがとうございます」

？キイイイ、バタン。

「どうだった？彼女の様子は」

「変わらないさ」

「はああ、最近は泣く事もなくなって…最近見るのは無理丸見えの笑顔くらいだしな…」

「この子ひとつとらえてる人は分かってねえなあ。？見張りなぞ簡単であろう？つつたんだぜ？衰弱していくあの子を見てるだけってのがどれだけ辛いのが分らんのかね」

「まったくだぜ。上のお偉いさんにも見張りをする方のみになってほしいもんだな」

「本当にな…」

「んで？これから具体的にどうすればいいんだ？」

「あ、？」

運んできてもらった夕飯を食べながら夏梨が訊く。
ちなみに乱菊はすでに自室に戻った。

「だっていつまでももたもたしたらんないし、かといって焦り過ぎ

もだめ。だったら行動はいつ起こすんだ？」

「全部の準備が完璧になったらだ」

「準備？」

「そうだ。今回、隊長格はおおっぴらに動けねえ。それこそ黒崎が乗り込んできたときみたいにはな」

「？ 答えになつてない気がするんだけど」

「つまり、だ。お前の姉を救うには、そいつを奪還してそのあと瀕霊艇が反応しきれない速さで敵を討つ必要がある」

「敵？もしかして瀕霊艇全体のこと？」

「そんなわけあるか。俺は今回の騒ぎには黒幕がいると思う」

「え…？！じゃあ今回あたしと遊子が狙われてるのは掟とかじゃなくて別の理由つてこと？」

「そういう事だ。お前らが追われている理由がなんだったかは覚えてるよな？」

「うん、死神と現世の人間の子は世界に影響を及ぼすとかでだろ？」

「そうだ。それならなんで黒崎は狙われていない」

「それは一兄が瀕霊艇に一生返せないくらいの恩を売ったから」

「ああ。…何か、違和感がないか？」

「…！…一兄が瀕霊艇に恩を売ったからって死神と人間の子だった事に変わりはない。それなら一兄だって世界に影響を与える筈だ。」

「だったら、一兄だけが見逃されるのはおかしい！」

「だろ？世界の事を考えるならいくら恩人だと言えど消滅対象になつていいる筈だ。それがなつてない。ここで黒幕の疑惑が出てくるわけだ」

「でもなんで…」

「さあな。ま、このことには朽木（兄）も気づいてるだろう」

「そっか…。あたしが思つてたより厄介な話だったんだな」

「今頃か？」

冬獅郎は声こそは飽きれてたが、その顔はニヤッと笑った。

「お、食べ終わったか」

「うん、美味しかったよ。ていうか冬獅郎って働き者だな」

「誰かさんが仕事をしない所為でな」

「…乱菊さん」

「お前も今日はもう寝る。松本の隣の部屋でいいか？」

「おう」

「んじゃ、着いて来い」

「ん」

執務室を出て左に進む。すぐに突き当たる。そこが乱菊の部屋だ。そこで、その右隣が夏梨のかりの部屋となる。

「ここだ」

「おー、結構ひろい」

「そうか？そこまでじゃないと思うが」

「や、あたしの想像よりって意味で」

「あっそ。…おやすみ」

「ありがとう。おやすみ」

？キイイ、バタン。

夏梨はベットに飛び込む。しかし思っていたより硬く、全身に痛みが。

そんな事はさておき、冬獅郎は夏梨を送ったあと、執務室に戻り書類と向き合ったがなかなか順調に作業を進める事が出来ない。

やはり考え事をしながら仕事をするのは良くないと考え、今日は自室に戻って寝ることにした。

だが、ベットに横になっても寝付けない。

朽木の時の二の舞にならなきゃいいがな…。

冬獅郎がこの可能性を見いだしたときからずっとそんな事を考えていた。

小野平家

「現世はどうなったんです？」

「ええ、もう私の分身が片付けた」

「そうですね…。ならば残るは護艇十三隊。例の子供、遊子とか言いましたっけ。それに逃げられては困りますなあ」

「それも心配無い。計画を実行するのは五日後。それまでにあの子が逃げ出すなんてあり得ないからね」

「それもそうですね」

「は、あ、やっぱ四楓院家と繋がるのは得策だったわね」

「はい。おかげで資金も権利も顔の広さも敬われようも、実に動きやすい」

「その通りよ。魂魄吸収計画、失敗は許されない」

「重々承知しております」

「それならいいのよ。…待っててね、輝…」

空座高校ノ屋上

「あーりやりやあ。こりゃ、ひどくやられたなあ」

「本当だぜ。だっせえな」

「ジン太君そんな事言っでないで怪我の手当しなくちゃ」

「その通りです」

「しっかしこれはかなりの実力者。夏梨サン大丈夫っすかねえ」

「こつなったら信じるしかねえだろうよ」

「そうだね。夏梨ちゃんなら大丈夫だよ」

「…なら、いいんすねどね」

眠りと陰謀（後書き）

更新遅れました。

感想、誤字脱字の報告、お願いします。

朝、その部屋にいるのは

「ふああ…」

夏梨は自然と朝早く目が覚めた。

とうか眠りが浅さかったので窓から入る日の光で目が覚めてしまったのだ。

する事もないので寝間着から死覇装に着替えて夏梨はまだ誰もいないであろう執務室へ向かう。そしてあわよくば、そのソファで誰かが来るまで二度寝しようという目論みだ。

ーギイイ

扉の片方を押し開ける。

そこにいたのは…

「冬獅郎」

「ん？夏梨か。早いな」

「冬獅郎こそ。とうかまた仕事か？」

「ああ。…副隊長が、仕事しねえからな」

冬獅郎は書類の上で筆を動かしながら喋るのでその言葉は途切れ途切れだ。

「乱菊さん…」

右斜め下を見て、飽きれながら夏梨が乱菊の名前を呟く。

「あ、そうだ。夏梨お前松本起こして来い！」

「え？別にいいけど」

そう言ったとき、一瞬冬獅郎の顔が華やいだので夏梨は不思議に思ったが、別に断る理由もないので了承する。

「じゃ、頼む」

「…？ りょーかい」

夏梨は扉を開け、さつき通った廊下を逆に進む。

そして自分が今朝まで寝ていた部屋の隣の部屋のドアを叩く。

「乱菊さん。起きてるー？」

無意識に語尾を延ばし気味に夏梨が部屋の中に声をかけるが返事は返ってこない。

「入るからなー？」

？ガチャリ

ドアを開け、夏梨が中を見ると、そこには布団くもに包まってベッドの上で寝ている乱菊の姿が。

「乱菊さん寝てるし…」

夏梨は乱菊の寝ているベットに腰をかけて乱菊の体を揺すり始めた。

「乱菊さん。起きて〜。お〜い」

「ん…あ、夏梨…」

「そ。夏梨だよ。起きて〜」

？ガバツ

「うおっ」

乱菊が急に飛び起きるので夏梨はびっくりして声を上げる。

「うわあッ」

もう一度夏梨が声を上げる。
なぜか？

それは乱菊の格好が原因だ。

「ん？」

乱菊は夏梨の様子に首を傾げる。何に声を上げているのか、と。

「乱菊さんそのカッコー!!」

「え？」

乱菊はまだ夏梨の言ってるわけが分からないらしい。

「だから! 凄くはだけてる!!」

「あゝあ、なんだ。そんなこと? 寝間着は寝やすさ第一よ」

そう言う乱菊はミニの浴衣で太ももは開けててギリギリのライン。
帯は緩く、胸もギリギリである。

「一樣訊くけど、冬獅郎が乱菊さんを起こしにきた事は？」

「んゝ、そう言えば一回あったような…」

「そう言う事が…!」

あのととき冬獅郎の様子がおかしかった訳が分かった気がする。

「そう言う事ってどういう事？」

「いや、こつちの話」

「まあいつか」

「じゃ、乱菊さん早く起きて執務室来てよ」

「はいはい」

?ガチャリ

夏梨は乱菊の部屋を出て駆け足で執務室へと向かった。

「とーしろーッ」

「おうッ?!」

夏梨が大声を上げて執務室に飛び込んできたので冬獅郎は紙の上で筆を思いつきりベチャッと押し付けてしまった。

「どうしてくれんだ!この書類書き直しじゃねえか!」

「ごめんごめん!」

悪びれる様子もなく、夏梨は冬獅郎に謝った。

「さつき冬獅郎が乱菊さん起こしてきてってあたしに頼んだ時様子おかしかつたら」

「そうか?」

一切取り乱さない冬獅郎。しかし夏梨も引かない。

「前に乱菊さん起こしに部屋に入った事があつただろ」

この夏梨の発言に冬獅郎は書類に向いていた顔をバツと勢いよく夏梨に向けた。そのあと取り繕って

「何言ってるんだ?」

と返してきたが、もう遅い。これで夏梨の推測は確信に変わった。そしてニヤアと笑う。

「あるとき冬獅郎が乱菊さんを起こしに部屋に入ったらそこにいたのは開けた寝間着を来た乱菊さんだろ!」

「ぶふーッ」

冬獅郎はお茶を飲んでいないのにふいた。

「さっきの冬獅郎の反応からしてそういうハプニングがあつたのは確実。言い逃れは出来ないからな?」

「…はあ。意図的に除いたんじゃないからな?」

こんな前置きしてから、ばつの悪そうな力をして冬獅郎が説明を始めた。

〈回想〉

例の出来事が起こる前の晩、俺は松本に仕事を終わらせておくように言っといたんだ。

「おい松本、この書類の山、明日の朝までに片付けておけよ。提出が明日だからな」

「はい」

松本も返事した事だし、俺は自室に帰った。

そして次の朝。

執務室に入ると、そこにあっただのは昨日と状況の変わってない書類の山。

「松本おお!!」

そう叫んでから俺はすぐに松本の部屋に向かった。そしてドアを勢いよく開けてそこに飛び込んだ。

「松本!!なんだあの山は!全然手エつけてねえじょッ」

「ん?なんですかあ?朝っぱらから…」

松本が起き上がった事によって布団があいつから、はらりと離れる。

「うおっ?!」

そこで俺が見たものは言わずもがな。

〈回想終了〉

「とうわけだ」

「あっははははは」

「ダンダンダンッ」

夏梨は床に座り込み、床を叩きながら笑う

「てんめッ……」

冬獅郎は拳を握り、今にも夏梨に殴りかかりそうな勢いだ。

「おっはよーございまーす」

そこに乱菊が入ってきた。

「松本お！今すぐ仕事に取りかかれ！」

「え？なんでそんなに起こってるんですか？！」

「いいから仕事しろお！！」

朝、その部屋にいるのは（後書き）

はい。今回も脱線してしまいました…。

あつたかさ。(前書き)

今話は真面目でいじります。

あつたかさ。

冬獅郎の怒りも覚め始めた昼。

「なあ冬獅郎」

「なんだ？」

相変わらず机につき、今度は髪をめくってははんこを押し、めくってははんこを押し、の繰り返しだ。

「昨日、じきが来るまで待ってるって言ってたけどさ、具体的にどれくらいとか、決めてんの？」

「いや？」

「はああ？」

「言っただろつが。俺たちは一斉に、一瞬で事を収めなきゃならねえんだ。準備もそれなりにかかる」

「幼児っぽいこと言ってるのは分かるけど、そんな待ちきれないから」

「…ああ。分かってる」

「夏梨、お昼行かない？お腹減ったでしょ？」

「え？でも」

と夏梨は冬獅郎の方を見る。

「行って来い」

「え？」

「大丈夫よ。あたしに合わせてくれれば」

「？」

その瞬間、乱菊と冬獅郎がアイコンタクトを送りあってたのを夏梨は知らない。

夏梨は乱菊に腕を引かれ、執務室から廊下に出た。廊下に出てからも腕を引っぱり続ける。

十一番隊でもこんな事あったな…。

副隊長に腕を引っぱられるというデジャヴ感を感じながら夏梨食堂についた。

入ると当然のごとく乱菊、夏梨に視線が集中。

定食を窓口で受け取ってから乱菊はそこらの適当な席に座る。夏梨は乱菊についての隣の席に座った。

すると、乱菊の隣に座っていた隊士が喋りかけてきた。

「副隊長、おつかれさまです。…とところでその子は？」

「うん、この子は本田っていう貴族の家の子」

と乱菊は少し（いや、かなり）楽しそうにそう言った。

？ピツシャーッ

夏梨にしか見えない雷が落ちた。

「え?! 貴族なんですか?!」

しかし隊士は真剣に受ける。どう見ても嘘なのに。

「そうよ。無礼ないようにしなさい? 失礼、本田…何様でしたかしら?」

棒読み。後半完全に棒読みの乱菊。

乱菊さん敬語きちんと使えないのか?!と夏梨は思ったが自分に隊士の視線が集中していて、名前を言わなくてはいけない空気だったのでとっさに名前を口にする。

「え?!ほ、本田花子です」

「は、花子様ですか」

と一人の隊士が復唱する。

(だ、ダサイ名前つけちゃったああー!!!!)

心のうちで叫ぶ夏梨。

様付けなのがさらに痛々しい。

乱菊が隣で肩を震わしながら笑いを堪えているのは見なくても分かる。

「花子様、どんな御用事でこちらに?」

いつの間にか出来ている野次馬の一人が訊いてきた。

「え、あ?!えつと、…」

箸で皿の上の魚をほぐしながら答えを考える。

(これはなんて言ったら正解なんだ?!本田花子が十番隊に来る理由なんてあたしだって知らんわ!!)

「なんなのですか?」

「私も知りたいです」

「俺も」

「僕も」

野次馬が答えを急かす。

「ひ、日焼けしに…?」

乱菊の肩の震えが激しくなったのは言うまでもない。

「ぶふッ…あはッは…」

という声が漏れてきている。

「日焼けしに、ですか」

またも野次馬の一人の隊士が引き気味に復唱。

「おい、十番隊に日焼けしにきたのか？」

「そうみたいだぞ？」

「そんな事のために十番隊にきたのか？おれはてっきり仕事とかかと…」

致命的選択ミス!!!

夏梨は両手で頭を抑える。

え？金持ちがしそうな事いつてたのにこれは間違った知識だったの？！ほらお金持ちって日焼けサロン行くじゃん？！こっちじゃ違うの？！ねえ、誰か教えて！！

くっそおお。恥じと怒りに近い感情とで（主に恥じ）真っ赤になっている。

「そ、それではもうお腹は満腹となりましたので…戻りますう。…

おほほほ…」

夏梨が耐えきれず、席を立とうとした瞬間、がしつと乱菊が夏梨の肩をつかんで…

「あらあら、花子様ったらまだ食べ始めたばかりじゃないですか。遠慮しなくて宜しいんですよ？どうぞゆっくり食べてください」

力技で座らせられた。

まあ実際まだ全然ご飯に手をつけておらず、お腹もすいていたままだったのでお箸を持ち、マッハで食べ進める。

乱菊、または野次馬の隊士がまた面倒な事を質問をかけてくる前に食べ終わり、この場を離れるためだ。

「花子様は家ではどんな生活をしていたのですか？」
とどっかの一隊士Aが言った。

?ズゴーツ

夏梨の空想の中の夏梨がもうスピードで走ってたのにその質問でコケてスライディング。

くそ、間に合わなかった。まだ半分しか食べれてない。なんであたしは早食いの練習しとかなかったんだ！しかし悔やんでいる時間的、精神的余裕など夏梨にはない。

返事を返さなくては！！

「え、え〜？普通ですよ。何言ってるんですかあ？」

夏梨は笑って答えながら、隊士を止めて助けてオーラを全力で乱菊に送る。

乱菊はその夏梨の視線に気づき、優しく微笑んだ。

よかった思いが伝わった…。助け舟を出してくれるのか！

夏梨がそう思っていたら…

「そんな、ご謙遜を。私たちのような平々凡々な死神にとっては普通でない生活を送られていたのでしょうか？」と乱菊。

なんて事を言うんだ?!?!

乱菊の裏切りで夏梨の精神は高い崖の上から海へと転落。

「いやいやいや、そんな事ないですよ。ほ、褒めてもなんにも出ませんからあ…ははは、はは…」

本当に勘弁してくれ、現在の全財産の400円あげるから！！
と叫びたい気持ちを抑えて夏梨が答える。

「じゃ、例上げてみてくださいよ。普段は何をなさっているんですか？」

と野次馬隊士B。

「は?! え、えつと、ふ、フットサル？」

「……」

野次馬までもが静かになる。

とはいっても十数秒で野次馬は次第にざわついてくる。

まあその十数秒も夏梨にとっては五分に等しかったが。

「フットサル? なんだから知ってるか？」

「いや、知らん。貴族の間ではやっているお遊戯の一つなんじゃないか？」

「花の種類かもしれないわよ」

「ああ、生け花に使うのね」

こそこそと話す隊士から聞こえてくる声に夏梨はもう居たたまれなくなり、椅子から立ち上がった。

「すみません。私急用を思い出したので、ここらで失礼!!」

そう言っつて乱菊の死覇装の首根っこを掴み、脱兎のごとく、食堂から飛び出した。

そして廊下で足を止め、息を整えた。

「いや、夏梨予想以上のだったわ。ぶくくッ……」

「何おもしろがってたんだ?! あれはあたしにとっちゃトラウマものだよ?!」

夏梨は少し潤んだ瞳で乱菊を見上げ、睨む。その顔は、乱菊の中の何かのスイッチを押した。

「か、夏梨。今回は私が悪かったわ。だからあたしの事乱菊さんじゃなくて乱菊お姉様って呼んでみて！」

「は?! ていうか前後の文脈合ってるねえ!!」

「いいから! 一回だけ! ね?!」

「う…っ」

目をキラキラさせて押してくる乱菊に夏梨は…

「ら…」

「うん!」

「ら…」

「ら?」

「乱菊、お姉様」

夏梨の顔は? うげえ? と今にも言いそうだが、そこは乱菊の乙女フィルターで修正可能。

「いいわ、これ! 妹が出来たみたい! 可愛い!!」

乱菊は夏梨を自分の胸に力一杯押し付ける。

いきなりの抱きつきに反応できず、むぎゅっ、とされてる夏梨は息が出来ず、必死に抵抗するが、乱菊の力は無駄に強かった。

「むご…む…んっ!! …」

じたばたしていた夏梨だが、ついにだらんと無抵抗に。つまり御愁傷様直前だ。

「おい!」

そんな所に現れたのは冬獅郎。

「おい! 松本力抜け! 夏梨が窒息してるだろうが!!」

「へ?... うわあ?! 夏梨! 夏梨?!」

乱菊は焦って夏梨を自分の体から離し、上へ持ち上げた。

「う…ッ…」

「よかったあ。生きてる」

「でもものびちまってるな」

夏梨の様子を見てそう言ってから、

「なんでこうなった？」

とジト目で冬獅郎は乱菊に訊く。

すると乱菊は、わざとらしく「はああ」とため息をついてから「う」続けた。

「隊長が夏梨を元気づけろって言うから頑張ったんですよあ？」その発言に冬獅郎は顔をむっとした。

「…逆に疲れきってるじゃねえか…」

「そうかもしれないですけど…楽しめたんじゃないですかね」

「本当かよ」

それから夏梨を執務室へと運び込み、そのあと冬獅郎はほんこ片手に書類を整理していき、珍しく乱菊も仕事を進めた。

三十分後

「ん…」

「お、目え覚ましたか」

「夏梨おはよう」

夏梨はそれを耳にしながらかムクリと起き上がる。

そしてしばらく黙り込み、冬獅郎が「おい」と声をかけようとした

ころ、夏梨は話しだした。

「心配かけてごめん！大丈夫だから」

急にそんな事を言い出されては冬獅郎も乱菊も反応しきれない。

「あの、遊子が攫われて焦る気持ちがあるのも事実だし、隠そうと
もしてたけど…ほら、遊子は必ず帰ってくる、というか絶対助け出
す。だから…なんつうか…」

冬獅郎と乱菊はやっと状況がつかめてきてさっきまでぼかんとし
ていた顔は微笑んでいた。

「ああ。分かってる」

「そうよ」

「…ありがとう」

乱菊の抱きつき攻撃から開放された時、夏梨には意識があった。そ
のあと失ったけど。

その短い時間こえてきた。

？隊長が夏梨を元気づけろって言ってたじゃないですか？

二人ともあたしの心配をしてくれていた。

そう思うと夏梨の胸の中にあつたかいものが広がって…。

泣くかと思った。

あたしは幸せ者だ。

こんなにいい人達に囲まれて。

あたしのために協力してくれて、心配してくれて、優しいものをく

れる人達がついてる。

そしてあたしのこの世界には遊子も必要不可欠。
生まれてずっと一緒に育った優しい遊子。

ああ。

助けなくては。

あつたかさ。(後書き)

あれ？まじめに書いたはずなのにギャグに走ってしまっている…？
今話は夏梨が乱菊をいじりまくってますね。

こつこつ話しながらいつまでも書き続けられるのですが、『先が気になる！さつさと先進めろ！』という人もいると思うので(というかいてほしい)そろそろストーリーを動かしていきたいと思います。

どうでしょうか？

感想、誤字脱字の報告、お願いします。

特異点の消却

夏梨が遊子を必ず助けると再度覚悟を括くってから丸一日。十番隊の執務室は静まっていた。

冬獅郎は普段通り机につき、紙の上で筆をさらさらとすべらせる。そして珍しく乱菊もソファについて書類とにらめっこ。夏梨は乱菊の向かい側のソファに座って仕事の手伝い。

そんなときだった。

窓から地獄蝶が飛び込んできたのは。そしてこう告げた。

『全隊長格に次ぐ。一時間後、双極にて特異点の消却を開始する。全隊長格はこれに立ち会う事。繰り返す…』

冬獅郎の筆は止まり、書類の文字を追っていた乱菊の目は固まり、見開かれる。

夏梨はというと、この地獄蝶の告げた内容を理解するや否やソファから立ち上がり、冬獅郎の後ろにある窓に足をかけていた。

「夏梨！！」

冬獅郎が呼び止め、服を強く掴んだが、夏梨はそれを振り払って窓から飛び出して行ってしまった。

「くそッ」

と苦い顔で冬獅郎。

乱菊も同じ顔をしていた。

一方飛び出した夏梨は瞬歩を使い、全速力で双極へ向かっていった。特異点、それが遊子を指しての言葉だと誰かに問うまでもなくわかった。

どれだけの霊力を消費したとしても少しでも速くのスピードを出したかった。もちろん頭では霊力を温存しておかなければならないことくらい理解している。理解しているのだが、遊子の事を考えるとそんなのを気にしてるなど余裕はなかった。そのうち頭に響くであろう痛みさえどうでもいいと思えた。

そのおかげで数分で双極の上空につくことができた。見下ろしたとき、まず目につくのは大きな木製の担架。そしてちらほらと人が見える。

一人は隊長羽織を着た隊長とおぼしき人物。そして四人ほどの顔を布で隠した人たちとその人達に囲まれた小柄な女の子が一人。遊子だ。

遊子の姿を発見した夏梨はそこに目かけて急降下。遊子に手が届くという所で急ブレーキをかけ、地面に足をつけた。その瞬間、夏梨を中心に風が起こり、一面に砂埃が舞う。

「え？」と弱い声で状況に驚く遊子。

周りを囲んでいた人達も声を上げる。

「な、なんだ?!」

「うおッ」

「え？夏梨ちゃん…?」と遊子。

しかし遊子に声をかけられても、夏梨が向くのは遊子の方でなく、砂埃の向こう側。だんだんと晴れてきたその砂埃向こうに見えてきたのは影は白いひげを蓄え、片手で杖をついた爺さんだった。人々が総隊長と呼ぶその人だ。

「何用じゃ。童子^{わしほ}」

「た、隊長、早く夏梨を止め！」

「いや、行かなくていい」

「?!なんでですか?!」

「双極には総隊長がおられるだろう」

「だこらこそでしょう?!」

「俺らが手を貸した所で勝てる相手じゃない」

「でも!!」

「今俺達出来る事をやるんだ」

「!…なにか考えがあるんですか?」

「ああ。六番隊に行く。ついてこい」

「はい!」

乱菊は意気込んで冬獅郎に返事をした。

?コンコン

冬獅郎が六番隊の執務室の扉をノックする。

「日番谷だ。朽木はいるか？」

「ああ。入れ」

「失礼する」

「失礼します」

執務室の中にいたのは白哉と恋次。

「遅かったな」

白哉のその一言に冬獅郎はむっとする。

「そうかよ。…頼まれた事はやっといたぜ」

「そうか。礼を言う。それで、何かみつげられたか？」

「ああ、改ざんのをいくつか見つけたぜ。改ざん前の記録も見つけた」

「そうか。そちらもか」

「「??」」

白哉と冬獅郎の会話に乱菊と恋次は頭にはてなマークを浮かべた。

「隊長、調べものってなんすか？」

と恋次は二人の隊長を見た。

「ああ、悪い。俺たちはある貴族について調べてたんだ」

答えたのはまず冬獅郎。

「貴族ですか？」（乱）

「そうだ。…ここからは朽木の方が詳しい。朽木に聞け」

「朽木隊長、どういうことなんすか？」

「そう急くな。今説明する。ことは数ヶ月前に四楓院家から来た手紙だ。こう書いてあった？四楓院家の長女、千棘が小野平家に嫁入

りする？」

「？それがどうかしたんすか」

「よいか、恋次。知っておろうが四楓院家は四代貴族のひとつだ。そしてあの家は代々女が継いできた。そして今回四楓院家の長女である千棘殿が中級貴族の家に？嫁入り？とはおかしいであろうが」

「ああ、確かに！小野平家の人が四楓院に嫁ぐところはあっても、その逆はおかしいですね」

「その通りだ。そこで私は我が朽木家の蔵書を、こやつには図書館と書庫を見てもらっていたわけだ」

そう言つて白哉はそこで腕を組んでいる冬獅郎に目をやる。

「そうだったんすか。それでその結果をさっき話してたんすね」

「そうだ」(白)

「ということはその中級貴族を調べた結果、なにかの改ざんの跡を見つけたって事ですね」

「ああ」(冬)

「で？その中級貴族つてのが怪しいのは分かりました。けど、それが今回の夏梨ことに何か関係あるんですか？」

と冬獅郎に乱菊が訊ねた。

「ああ。この中級貴族、…小野平家が今回の黒幕だ」

特異点の消却（後書き）

すみません。ひさしぶりですが、いつもより短めです。
テストが目前なんです。勘弁してください。

感想、誤字脱字、報告お願いします。

番外・俺らの副隊長が！！（前書き）

七話目の『流魂街』を久しぶりに誤字脱字はないかなあと読み返していた所、ちよつと浮かんできた話です。

こんなだったら面白かったかも、みたいな。

こんなルートでも良かったかなって。

ちなみにかなりギャグ調です。

七話の『流魂街』の話を読み返してから呼んだ方が分かりやすいかも知れません。

あの、台詞は一行ずつ開けて夏梨、隊士、夏梨、隊士…です。
まあ例外もあります。

では。

番外・俺らの副隊長が！！

「……い！大丈夫か、おい！」

「……ん」

「おい！……お、良かった。目が覚めたか」

夏梨が目覚めると、顔に三本の引っ掻き傷と68と書いてある男が目に入った。

その男、檜佐木修兵。

しかし、夏梨がそんな事知る筈もない事である。

「うわああ？！ヤーさんだ！！」

目が覚めるなり、夏梨は檜佐木にグーでパンチ。

檜佐木の顔からしてこの行動が仕方ないと言え、仕方ない。

「あ、副隊長、急に走っていないでください……」

一人の隊士がこちらに走ってくる。

そして見た見た光景は地面に倒れて、顔に殴られた痕のある檜佐木。

「ってうわあ！てめえがやったのか！！俺らの副隊長に何したんだ！！」

「え？この人が副隊長？ヤーさんじゃなくて？」

叫んだ隊士の声を聞きつけてか、隊士は次々とこちらに走ってくる。その数初めの隊士を合わせて10名ほど。

「ヤーさんなわけあるか！その人は倒れてるお前を見つけて副隊長は駆け寄った。それこそ俺らの追いつけない速さでな」

「え？そうだったの？！」

「それなのに、隊長を殺めるとは！どんな了見だ！！」

「血祭りじゃああー！！」

隊士達の言い草に夏梨は立ち上がる。

「確かに殴ったのは悪かったけど、そこまでキレるか？！普通！！」

「お前、謝りながら謝ってねえ！！」

「謝ったからからって副隊長は帰ってこないんだ！」

「副隊長の仇！必ず討つ！！」

「え？副隊長死んじゃったのか？！」

「ピクリとも動かねえじゃねえか」

「そうだ！そうだ！」

「うそおお！あたし人殺しちゃった？！」

「人殺しー！！！」

「人でなしー！！！」

「ヒトデほしー！！！」

「待て！今一人おかしいのが居たぞ？！ヒトデほしがってるヤツがいたぞ？！」

「言い逃れるつもりか！！！」

「許さん！！！」

「言い逃れじゃない！これはツッコミだ！ 第一あたしみたいな子供に殴られて死ぬお前らの副隊長が悪い！弱さは罪だ！！」

「強さじゃない！大事なのはハートだ！！」

「そうだ！！」

「それ副隊長が弱いのも認めてねえか？！」

「瀟灑艇をバイクで走り回って総隊長にゲンコツをくらったあの日の副隊長……」

「乱菊さんに酒を飲まされてよった勢いでタコ踊りしてたあの日の副隊長……」

「女性死神協会に頼まれて手作りのお弁当を届けたのに？地味？フツー？などと言われ影で泣いていたあの日の副隊長……」

「あんたらの副隊長、ハートどころかプライドがズタズタだよ！！」

「なんだとう！」

「副隊長のプライドがズタズタだと？！」

「ズタズタびしたのはお前か！！」

「いや！他の誰でもないあんたらだ！！」

「……えええ？！」「……」

「えええ？！驚く事に驚きだよ！！」

「くそガキが俺らをバカにすんじゃねえ！！」

「ガキが俺らと対等だと思ふなよ！！」

「そうだ！そうだ！！」

「あたしは対等だなんて思いたくもねえ」

「ただのガキが死神に楯突こうなんざ百年早え!!」

「そつだ!そつだ!」

「うっ…でもあたしだってすぐに死神になるし!っていつか後ろの奴らは?そつだ?言えないのか
!」

「吠えてろ、吠えてろ」

「くッ…ば、バーカバーカ」

「バカつて言う方がバカなんだよ」

「そつだぞバーカ、バーカ」

「百歩譲つてあたしが馬鹿ならあんたらはアホ馬鹿だ!!」

「もし俺らがそつならお前は馬鹿あほザルだ!!」

「いや、お前の方が馬鹿タコ阿呆ザル!!」

「ッおめ!居間タコをバカにしたな?!お前はタコのおいしさを知らないのか?!」

「残念でした!あたしはタコ派ではなく、イカ派なんです!」

「いや、どう考えてもタコの方がおいしだろ!!」

「え?イカの方がおいしくね?」

「え?タコだろ」

「ちよつ、お前ら、ここは意見をまとめていかなくはあのガキを徹底的にはつぶせないぞ?」

「そうだな。じゃあ多数決で意見をまとめるぞ」

「……ラジャー」「……」

かさかさつと夏梨から少し距離をとって、仲良く輪になって隊士達は作戦会議。

「まずはタコ派、手を挙げる」
?さつ

4人が手を挙げる

「じゃあ次、イカ派」
?ささつ

六人が手を挙げる

「じゃあ、イカ派に意見をまとめるぞ」
「……了解」「……」

「おい、ガキい!!イカの方が美味しいに決まっているだろう!!」

「お!あたしに賛同したか!」

「え?」隊士達が惚ける。

「え?」つられて夏梨も惚ける。

「あ!」隊士ら、何かに気づいたよう。

ひゅ???……

冷たい風があたりに吹いた。

「…おい、お前ら、馬鹿だろっ」

声の主は頭を抑えながら立っている檜佐木。

「あ…副隊長…。おはようございます」

番外・俺らの副隊長が！！（後書き）

このあと、「お前名前はなんだ？」「夏梨…黒さ…」あたりに繋がればな…みたいだね！

はい、あの人の顔のあれ…入れ墨ですよ…。

それなら目が覚めて、いきなり檜佐木の顔を見た瞬間、夏梨がこんな反応してもおかしくないかなって。

それに隊士がノってきたら面白いかなって。

檜佐木は気を失っていただけです。

だめでした…？

しらけたのなら謝ります。

すみません。

あ、話に出てきたヒトデは生き物のあれです。

ちなみにヤーさんが分からなかった人います？ヤザのことですよ！。

え？これ意味わかんない。分からないままだと眠れない、という人…そのままでもいいと思います。

というわけで…感想、お待ちしております。

守るものを後ろに

頭には脈打つような痛みが。

そして目の前の人が危険であると警鐘も鳴る

でも後ろには守るべき人がいる

だから

砂埃の向こうに現れるその人がどんな人であれ退くわけにはいかない。

「何用じゃ、童子」

その爺さんは目を細く開けてこちらを見ている。

一瞬でもその目からあたしが目を離したら殺られてしまうのではないかと、そう思わせる目だ。

でも、それに潰されないように、夏梨もその爺さんを睨む。

「なんで来たか、わからない？」

その爺さんはあたしの後ろの遊子に目をやってから、

「そうじゃな、問うまでもない。…しかし早急に去れ」

「いやだと言ったら？」

「殺さねばならなくなる」

「上等…！」

「夏梨ちゃん…」

夏梨の耳に後ろから自分を心配する遊子の細い声が届いた。

あたりに風が吹き、爺さんの髭と夏梨の髪が揺れる。
お互いが刀をふるう前に爺さんが夏梨に訊く。

「御主は黒崎夏梨じゃな」

「そうだ。そういう爺さんは誰なんだ？白い羽織を着てるからどっかの隊長なのはわかるんだけど…」

「僕は一番隊隊長・山本元柳齋重國じゃ」

「一番隊隊長ってことは爺さん総隊長？」

「その通りじゃ」

「だから、ビビって逃げるとでも？」

「…そっくりじゃな、御主の兄と」

「そうでもないよ」

夏梨は元柳齋の斬魂刀が炎系である事を喜助に聞いていたので、接近戦ならば自分をも巻き込みかねない炎は使えなくなるだろうと踏み、その爺さんが総隊長であると分かった時から間合いと詰める事にしていた。
なので会話が終わると夏梨は背中の中の刀に気をかけ、10m程離れた所にいた元柳齋までの距離を瞬歩のような速さで詰めると、その懐へはいり込もうとする。

しかし夏梨が懐へと入り込む前に元柳齋は上半身の装死霸からバサッと腕を抜いてから片手を乗せていた杖を地面をこつんとたたき斬

魂刀を出すと、自分をも巻き込む炎を放った。

「? 万象一切灰燼と為せ・流刃若火?」

夏梨はその攻撃に目を見開く。(なんで?! これじゃあ爺さんも自分自身の火に焼かれて…!)

そんな事を考えていられるのは一瞬にも満たない。

火傷をしないためにも夏梨はすぐに炎から飛び出て上空へと避難した。

元柳齋が、いや元柳齋の斬魂刀が放った炎はすぐに消えていった。その様子を見て夏梨は元柳齋からある程度距離をとって地面に降りる。

「近寄れば儂が儂自身を焼きかねないからと炎を使わぬとも思ってたか? こんなもの、百年以上前に克服したるわ」

「…くッ」

夏梨の顔から苦々しさがにじみ出る。

「ガキ相手に始解か?」

「餓鬼相手に時間はかけられんからのう」

「そう」

「どうした? 終わりか?」

「…冗談!」

そう言うってから夏梨は息を吸って藍月の解号を叫ぶ

「? 切り裂け・藍月?!?!?!」

「ほづ、さらに兄にそっくりじゃな」

「そのあんた余裕も今のうちだ」
「それは楽しみじやな」

さっきので近距離だと、遠距離以上に危険なのではないかと思った夏梨は元柳齋に近づくことなく柄も鏢もなくなつた斬魂刀に靈力をめいいつぱいに込めて振り上げた。

「月牙天衝！！」
「なぬ…?!」

夏梨の放つた特大の白い光は元柳齋の所で爆破のような音を放ち、勢いよく煙が上がる。

その煙が消え見えてきた元柳齋は右肩から血を流していた。

「まいったな」

元柳齋は口ではそう言ったが、血が出ていても傷自体は浅いことなど夏梨にも分かった。

距離は少しあつたから近くで撃てば分らないが、ほぼ全力で撃つた月牙天衝がこれくらいダメージしか与えられないのでは、月牙だけでは元柳齋を倒せない事は小学生にも分かる。

それにさっきの月牙天衝はきつとわざとあたつただろう。

総隊長ほどの人ならば避けようとすれば避けられる攻撃だつたはずだつたからだ。

きつと力の差を見せつけて戦意喪失にでもさせたかつたのだろうかあいにくあたしにはきかない、と夏梨は強気に思う。

(こつなつたら…！)

夏梨はその場から瞬歩で再び元柳齋との距離を詰め、間髪入れずに

刀を元柳齋に向けて振った。

?カキイイン

しかし元柳齋はその夏梨の攻撃など予想していたかのように刀を夏梨の刀とぶつける。

その後は刀での打ち合いがつづく

ーカキン、カキン、カキン、カキイン

夏梨は両手で刀を持ち、一太刀、一太刀に体重もかけているのだが、対する元柳齋は片手で刀を持ち、その相手をしている。

もちろん夏梨は元柳齋に傷一つつけられない。しかし元柳齋は夏梨の腕や顔に切り傷を与えている。

そして、夏梨が飛び上がってもう一度刀を元柳齋に振り下げようとした時。

?ブシャー!!

元柳齋が夏梨の脚に大きく切り込んできた。その攻撃で夏梨の脚から血が出て、元柳齋のそばに倒れる。

「夏梨ちゃん!!」

その様子を見た遊子からの叫び声が聞こえる。

「もう良いじゃろ。餓鬼にしてはよく儂と戦った」

「…」

元柳齋は優しくも近くで倒れ込んでいる夏梨に攻撃をする気はないらしい。

いいわけない。あたしはここに遊子を助けにきたんだぞ？！

遊子を安心させるためにも、優勢に立たないと……。
負けられるような状態じゃないんだから！
これじゃ、遊子を守れない！！

そう思った夏梨は藍月を地面について、それを支えにをゆっくりと立ち上がる。
なにせ脚を斬られたので立つにも痛い。

ズキン、ズキン、ズキン……
それに頭痛も治まりそうにない。

それでも元柳齋にやられまいと思い、地面についてままの藍月に靈力を込める。

「やめい、勝負はついた。やめるのじゃ！」

夏梨がその通りにするはずなく、藍月にゆっくりと靈力を込めていく。

「月牙…天衝！！！」

藍月が地面に刺さったまま夏梨は元柳齋に月牙を撃った。

「?!」

元柳齋はその場から瞬歩で移動。
夏梨のそれを命中させられなかった。

しかし、夏梨の放った月牙は双極の地面を割つたと表現していい程に深い溝を掘っており、遊子を蒸発する役目を持っていたであろう担架はピシッとひびが入り、やがてギィィと二つに分かれて倒れた。

月牙天衝を放ってから夏梨のさつきからズキンズキンとしていた頭痛がさらにキツくなった。その頭痛に耐えられず、その場にしゃがみ込む。

そして、頭に機械を通したような声が頭に響いた。
？代われ！！！？

ードクン！！
頭を強く打たれたような鈍い痛みが走った。

「…なかなかじゃな」
夏梨のやらかした惨状をみて、あそこまで減っていた靈力を絞り出してここまでの威力を発揮するとは未恐ろしい。元柳齋はそう思いながらひび割れた地面と担架を見ていた目を夏梨にやると、夏梨の様子がおかしかった。
姿こそそのままなもの、

その靈圧、まるで、虚であった。

敵はどいつ

現世／浦原商店・茶の間

座卓についてコンピューターらしきものをかたかたといじくりくる
喜助。

「ん？　ありやりや、夏梨サンの霊圧が…」
喜助はその画面を見て驚いた素振り。でもさして深刻そうな顔ではない。

「店長、どうしかしたんですか？」（鉄）

「まあ、悩みの種が開花したという感じっす」

尸魂界／双極の丘

「……………」

総隊長は黙ってその夏梨を見ていた。
決して焦る事なく、落ち着いて。

「ん、ああ、いッ」

しばらく震えながら苦しんでいた夏梨だが、やがてその震えをピタッ
とやめ、すくっと立ち上がる。

しかし、顔は下を向いていて様子が窺えない。

「…か、夏梨ちゃん…？」

遊子も夏梨のその様子に駆け寄ろうとするが、顔に布をつけている人達に止められる。

その遊子の呼びかけにか、夏梨はゆらりと顔を上げた。
その顔には、

白い仮面がついていた。

漕霊艇 / 四番隊隊舎

「ん…ん………」

「副隊長…！」

「あれ？…なんで…」

「目が覚めて良かったあ」

「なんであたし…いたッ」

勇音が起き上がるうとする体と体に痛みが走った。

「無理しないでください。副隊長は侵入者にやられて傷もまだ完治とはほど遠いんですから」

「侵入者…！」

「どうしたんですか？」

「すみません、私何日間寝ていましたか？」
「えっと、ここ数日だから…」

「数日も…。侵入者についての情報があります。卯ノ花隊長が今どこにいるかわかりますか？」

「あ、それならきつと隊主し」

「ここにいますよ」

「卯ノ花隊長」

「勇音、目が覚めて何よりです」

「あ、私はここで失礼しますね、お大事にしてください、勇音副隊長」

「はい、ありがとうございます」

ばたばた「つと足音はとおざか行つた。

「何かあつたのですか？」

「はい、私は侵入者にこうして倒されてしまったのですが、戦闘中に侵入者の身元を聞き出しました」

「誰なのですか？」

「特異点の兄妹の黒崎夏梨です…！」

「?! 勇音、双極へ急ぎましょう」

「え? なんで…」

「あなたが寝ている間に状況は悪い方へと進んでいるようです」

八番隊から出て良い事になった一角と、それを迎えにきた弓親は十番隊へ移動していた。

「ふうーッ」と

「おつかれさま、一角」

「ほんだぜ。でもま、あの形式的なもんだったから最初の5分くらいしか尋問されてねえし、その後は部屋でゴロゴロと三日間…あれ？二日だったか？…」

「そりゃ良かったね、僕も捕まりたかったよ」

「なんでだよ？暇も楽じゃなんじゃないぜ？」

「一角…、享楽隊長と狛村隊長が消えてから、隊士の野次馬根性やらが発揮されて…散々だったんだよ？」

「おー…災難だったな」

弓親が詳しく説明しなくても一角も夏梨が来たときに隊士からの質問攻めにあってるので、そのめんどくささやしつこさを知っているのだ。

「で？俺がいない間に何か大きい事あったか？」

「あれ、一角の入れられてた部屋って放そ…そっか、今回は地獄蝶が知らせてきたんだっけ」

「？ だから何かあったのか？」

「あつたよ。とびきり大きいのが。」

「ほお」

「簡単に言つと、特異点とか言うものの消却があと、40分後にある。それに…って一角聞いているの？」

弓親が言う通り、一角は話を聞かずに空の方を見ているようだった。

「ちよつと一角？」

「おい、弓親、あれなんだ？」

「は？」

弓親は一角が見ていた方を同じように見る。

見た先は丘の上にある、双極。

そこにあつたのは黒い霊圧の柱だった。

二番隊／隊主室

「なんだ？この虚のような…」

「え？隊長敏感つすねえ。全然気づきませんでしたよ」

「?! この霊圧！」

「何なんすか隊長お、大袈裟つス…、！」

「やっと気づいたか、馬鹿者。あの霊圧どこから……双極……！」

八番隊／縁側

「はああ、まだ行く時間には早いんだけどなあ」
「ぼつりとつぶやく。」

「あ、今日七緒ちゃんいないんだっ…」

ふう…

享樂はもう一度ため息を吐く。

「しかたない。行こうか」

漣靈艇の貴族の家が建ち並ぶその一角にその家はある。

小野平家。

黒幕は小野平家であると確信した冬獅郎、乱菊、ルキア、白哉、恋次は小野平家を叩くため、小野平家の屋敷の前に来ていた。当たり前だが門の前にはがっちり門番が固めている。

「失礼する。朽木だ。門を開けてはくれまいか」

「く、朽木殿?! え、でも、いや連絡をいただいておりますので、いくら朽木殿でも…」

? 朽木? という名前に門番もあたふたする。

ちなみに門番に入れてもらえないか交渉に出たのは白哉とルキアの二人だけだ。冬獅郎、乱菊、恋次の三人は影でその様子を見ている。

そう、これはそういう作戦なのだ。

白哉とルキアが門の前で騒ぎを起こし、門番や警備の人達の意識をそっちに持っていかせ、その間に三人は塀をのぼって侵入する…と

いう作戦。

「この家の当主との密談の予定があったのだが、…知らされてはいないのか？」

「そうです。三日程前に気が身を屈けているはずなのですが…」

「そうだったのか？」

「いや、記憶にないが…」

門番同士で話し合う。

「最高責任者を出せ」

と白哉。演技とはまるで見えない。

「よし、うまく言ってるみたいだ。忍び込むぞ」
冬獅郎の小さく言ったその声に、二人は頷いた。

ートン、トントン

三人は塀を乗り越え、静かに着地、とりあえず近くの茂みに身を隠す。

「おい、そっちは誰もいないか？」

「はい」

「こっちもっス」

ーガササッ

お互いの報告を聞き、三人は茂みから身を出す。なぜか簡単である。全くもって人気ひとけが感じられなかったからだ。

「おい、この屋敷…」

「人がいない…？」（恋）

「バラけて屋敷の人探しますか？」（乱）

「そうだな」

そうい言ってそれぞれが別々の方向へ散ろうとした時、夏梨の虚化した霊圧が小野平家まで届いた。

双極の丘の上（前書き）

分かりにくかったかもしれないので補足を入れておきます。

順番的には夏梨が白い仮面をつけていたのを総隊長が見たあと、霊圧が溢れ出して黒い霊圧の柱が出来たんです。それを見た隊長格達が双極の丘に集まったのです。

以上です。

では楽しんで呼んでいただけたらと光栄です。

双極の丘の上

「おい、なんだよ、この霊圧…?!」(冬)

「虚…です、よね」

「違うだろ、こりゃ、虚と死神の霊圧が混じってる…。ヴァイザート 仮面の軍勢

…!」(恋)

「あの人達は今も現世でしょ?…!」

「…さつきまで大き過ぎて気づかなかったが、この霊圧は夏梨じゃねえか…?!」(冬)

「!」(乱)

「…日番谷隊長、行ってください」

「は…?」

「恋次の言う通りです。ここは私たちはここで小野平のしっぽをつかみますから…!」

「!…!」

「あの霊圧の中じゃ俺らは足手まといになるかもしれないっすから…分かった。」冬獅郎は地面を睨んでいた目を二人に移し、叫ぶのではなく、力強く、

「ここは任せたぞ」と言った。

「はい。隊長こそ夏梨、任せましたよ」

「ああ!」

冬獅郎はさつき小野平家に侵入するために超えた塀をまたも飛び越え、外へと出て行った。

冬獅郎が出て行ったあと、二人は手分けをして小野平家の屋敷を捜索しだした。

「恋次、あんたはそつちよろしく」
「はい」

冬獅郎が屋敷を出てから瞬歩を織り交ぜながら屋根の上を走る。
さつきは塀が近くにある所為で見えなかったが、黒い、霊圧の柱が
双極の丘のところに立っている。

やっぱり夏梨には荷が重過ぎたか、などと思っていると、前方に自
分と同じ方向へと進む人影が見えた。はためくそれはよく見ると白
い、隊長羽織を着ていることが分かる。

黒髪、隊長羽織、そして冬獅郎と同じ方向から双極に向かっている
事からその人とは白哉だろう。

冬獅郎は白哉に追いつこうと走るスピードを上げた。白哉の進む速
さが速いのか、距離が思ってたより開いていたのか、それには予想
以上に時間がかかったかった。

「朽木」

「…なんだ」

走ったまま、無言で白哉は少し顔を冬獅郎に向けてからすぐに前に
戻し、声を発したのだった。

「いや…、ただこの霊圧は、やっぱり」

「無論、黒崎の妹のものだろう」

「だよな…」

「とにかく、急ぐしかない」
「そうだな」

白哉と冬獅郎は並んで双極を目指した。
そこに近づくにつれ、その霊圧は強く、重くなっていく。

「日番谷」

「なんだ？」

「覚悟は括くれているのか？」

「…ああ。」

覚悟、それが何なのか。白哉に言われずとも知れている。

暴走した夏梨。それを止める方法は、
もしかしたら、

1つかもしれないという意味だ。

― 殺してやる事。

その覚悟を括らなければならぬのだ。

冬獅郎と白哉が靈庄の柱の真下である双極に着くと想像以上の人達がそこに集まっていた。

元柳齋、一角、弓親、享樂、碎蜂、大前田、卯ノ花、勇音。

しかしそんな事より目は黒い柱の方へ向く。

その場にいる誰もがそちらを睨んでいた。

「こうなったらやるしかないのか…」
誰かがそう呟いたとき。

さっきまで嘘のような大きさであった靈庄の柱が治まっていったのだ。

「ガグアアアアアア！！！」
機械にかけたような歪んだ声があたりに響く。

それと同時に夏梨はセロをぶっぱなす。
かろうじて誰もあたらなかつたが、このまま避け続けられるような速度でないし、威力もかなりのものだ。
「くそッ…どうすんすか！！隊長方あ！」
叫ぶのは一角だ。

「どうするもこうするも対抗しなきゃやられっぞ！」
答えたのは冬獅郎だ。そして答えてから刀を構え、夏梨の方に向けた。

少し渋った様子の一角だったが、夏梨の放ったセロの先の建物の崩壊ぶり、そして隊士の被害の大きさを見て返事をする。

「…分かりました。相手をするとしたら本気でいくぜ！くそガキ
！！」

「ヤツを押さえるぞ！」（蜂）

「ええ？！俺らだけじゃ無理っスよあんなの」

「お前に入ってない！」

「ええ？！俺碎蜂隊長の副官っスよねえ！！」

「そう思った事はいい度もない！！」

「僕たちもいくかねえ」

弓親と白哉を見て享楽が言う。

「ああ」

「そうですね」

「隊長、私たちも…」

「いいのです。」

「でもッ！」

「いいから。」

元柳齋はその横で各隊長のとする行動の様子をじっと見ていた。

冬獅郎が夏梨の近くに踏み込み、刀が夏梨にあたる…そのとき、

?カキイイイン

予想だにしなかった刀と刀のぶつかる音が冬獅郎の耳に届いた。なぜなら夏梨はさつきまで刀に手をかけていなかったからだ。いくら早く引き抜いても冬獅郎の斬撃に間に合っはすがない。

そう、冬獅郎の刀を受けとけたのは夏梨ではなかった。

そしてその人物の登場に皆が目を見開いた。

浦原商店

「で、夏梨さんどうするんですか？危ない状況なのでしょう？」

「そうつスよ。でも心配はいらないっス。もう、特効薬を頼んどきましたから」

「特効薬、ですか…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7672q/>

jump up high

2011年12月16日00時52分発行